

---

# 戦乙女の伝説

スライム

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦乙女の伝説

### 【Nコード】

N7765W

### 【作者名】

スライム

### 【あらすじ】

遙か昔に外界と内界に別れてしまった世界。あるものを求めて内界へやってきた外界の少年セシル。守護騎士団への入団を目指し、国の英雄になることを望む内界の少女エリス。二人の少年少女の出会いから、後に世界を救うことになるまでの物語。

## セシル

とある国の、とある城の、玉座の間と呼称される場所。

壁から床に至るまで、煌びやかな装飾を施されたその空間は、強く射し込む光を受けて目に痛いほど輝く。

その玉座の間に、太陽を遮る天井はなかった。

だが別に天井が無くとも不都合はない。たとえ天気が悪くとも、この玉座の間が雨水に浸かる心配はない。

この城は……いや、この国は雨雲が発生しうる場所よりも上空に浮いているのだから。

そんな国の、最も高い建築物である城の最上階の空間。

そこには全人類の中で最も高い場所に座る女の姿があった。

褐色の肌に、美しい顔立ち。長く艶やかな黒髪と金色の双眸という外見は、古代の物語に出てくる悪魔を連想させる。

いや、頬杖をつきながら玉座に腰掛けているその様は魔王と表現したほうが正しいか。あたかも自身の上に存在する生物はいないと言いたげな傲慢さを隠そうともしていない。

いや、実際にその通りなのだろう。

だからこそセシルは頭を上げず、その場にひざまつっている。

セシルがかしづくのは、相手がこの国の女王だからという理由ではなく、その女が持つ力こそを敬愛しているからだ。

……でなければ、こんな変態ドS女には絶対従わなかっただろう。奇声を上げながら桁外れの怪力で抱きついてきたり、男である自分に女の格好をさせて連れ回したり、妙な動物の扮装をさせられて添い寝を命令されたり、そのまま首輪を付けられそうになったり度々・重なる玩具扱いにうんざりしている。十六歳である僕よりも五

歳も年上のくせに、僕よりも精神年齢低いんじゃないだろうか。乳ばかりでかくなつたせいで頭に血が行ってないのではないだろうか。そういえばなにがしと煙は高いところが好きといった格言を誰かが言つてた気がするな……と思考の途中で、セシルの頭に女王の声がかけられた。

「顔を上げよ」

「はい」

その言葉に素直に従い、玉座にいる女王を見た。その顔が、かなり不機嫌そうにしてることに内心焦る。

「今、とても無礼なことを考えておつたじゃろ？」

「め、めっそうもないです」

背筋に冷や汗を流しながら、慌てて否定した。そんなセシルの様子に、女王は小さく苦笑する。

「まあよいか。それで、内界に行つてみたい……とな？」

「はい」

「ふむう……」

女王は目を閉じ、考え込むように顎に手を添えた。

そんな女王の反応で、セシルは内界へ渡る方法が存在することを確信する。

一定以上の>マナ<を外側に排出する結界を、一つの大陸を覆うように張り巡らせた地域。

それをセシル達は内界と呼んでいる。セシルが知っている伝承によると内界とは、外界の高濃度の>マナ<が漂う環境では生きられ

ない人々の避難所のようなものだったらしい。

通常、口から取り込んだマナは体内で魔力となるのだが、濃すぎるマナは一息で過剰に魔力を作ってしまう。魔力の許容量が少なく、それを上手く排出できない者の体や精神に悪影響を及ぼしてしまうのだ。

そこで昔の人類は、今は内界と外界にそれぞれ一つずつ存在する古い魔導装置で、巨大な結界を張った。それにはマナを結界の外側に排出する機能の他に、一定以上の魔力を持つ魔獣の侵入を阻む効果もある。それは内界を守る為の措置なのだが、そのせいで例外なく強い魔力を持つこの国の住人達も中に入ることができないのだ。

「本当なら考えるまでもなく却下するべきなのじゃが……」

悩む女王を後押しするべく、セシルは予め用意しておいた言葉を並べた。

「結界の内側である内界との交流が途絶えて二〇〇〇年弱。マナが限りなく薄い地とはいえ、あちらも独自の発展を遂げていることでしょう。あちらの有用そうな技術などを調査して持ち帰るのは、この国にとって非常に価値があると思われます」

セシルのその言葉に、女王はどこか呆れた様子で嘆息した。

「お主にしてはもっともらしいことを言っておるが、本当の目的は別にあるんじゃない？」

「……」

凶星を指されて表情が固まるセシルに、女王は愉快そうに笑う。

「相変わらず、お主は嘘がつけん男じゃのお。その目的もだいたい見当がつく」

流星は一国の主と言つべきか。それとも単にセシルが分かり易すぎるのか。

セシルの企みなどお見通しのようだった。

だからこそ、セシルは内界に行けるかもしれないと希望を抱く。

その考えを裏付けるように、女王の快活な声が玉座の間に響いた。

「よし、いいじゃろう。期限は一年。その間に、お前を向こうに送り出す労力に見合うものを持ち帰れ」

「ありがとうございます」

許可を得られた嬉しさに声を弾ませながら、セシルは頭を下げた。だが女王の言葉はまだ続く。

「もし、その条件を満たせずに帰ってきた場合は……そうだな」

ニタアッと嫌な笑顔を浮かべた女王に、セシルは凄まじく嫌な予感がした。

「その時は、楽しい楽しい後宮生活が待っておるぞ。そなたには一生、妾の玩具になって貰おうかの」

…サボらずに絶対に何らかの成果を持ち帰ろう。

セシルはそう強く心に誓った。

## エリス

とある国の、とある貴族の館の、鍛錬場と呼称される場所。強い日差しが射し込む中、そこにはいつも通りの二人組の姿があった。

雑草一つ生えることを許さないほど踏み固められた地面は、その鍛錬場を利用している者達の努力の程を表している。

もつとも、その地面に強く踏み込み、鍛錬を続ける役はもつぱら一人であったが。

その鍛錬を続ける役であるエリスは、今は剣を正眼に構えたまま、軽く目を閉じてその場に佇んでいた。

呼吸を一定に整え、体の中の経脈を循環する何かを感じ取るよう、意識を集中させる。徐々に感覚を広げ、自身の体のみならず手の指先から剣の先まで。力による負荷が空間を伝って、少し離れた所にある木片の場所まで移動する様を心に描く。

とそこでエリスは両眼を見開き、鋭く剣を振った。

と同時に、カンツと乾いた音を立てて木片が弾け飛ぶ。

短い空中遊泳を終えた木片が地面に落ちると、エリスの背後から軽い拍手が鳴った。

「見事です。この>遠当てくが出来る>気くの使い手は、私の祖国でも数える程度しかおりませんでした。>気くの練度に関しては、有数の使い手と言っていいでしょう」

起伏のない平坦な声で称賛するのは、エリスの剣術指南役であるサクヤだ。

長い黒髪に鳶色の瞳をした女性で、身長は女性の平均であるエリスと同じぐらい。年齢は一六歳であるエリスより三つほど上であると聞いている。メイド服を着ているのは、この屋敷の使用人でもあるからだ。

「つまり、> 気くの達人程度では私のこの体質を補うに足りないということか」  
「……」

エリスの自嘲の言葉に、サクヤが沈黙する。

エリスの均整の取れた肢体は、同じ女性の中でも少し細身であると言っている。

いや、厳しい鍛錬を積んだ者の体としては細すぎると言っているだろう。

女性としては理想の体かもしれないけど、戦う者としては心許ない細さ。

いくら鍛錬しても、エリスの体には筋肉が付かないのだ。

その原因は、エリスが生まれながらに持つ巨大な魔力のせいである。詳しいことは解明されていないが、魔力を持つ者はその魔力が大きければ大きいほど、身体能力が低下するらしい。

エリスの魔力は巨大すぎるのだ。

そしてその巨大な魔力は、巨大すぎるが故に使うこともできない。魔力があまりにも大きすぎるためか、その排出量も異常であり、緻密な図形を大量の染料で塗りつぶすがごとく、エリスには魔方阵が構築できないのである。

先天性魔力異常。

エリスのこの状態をそう呼ぶらしい。

二一年に一度の割合で稀に産まれることがあるそうだ。その中でも、エリスの魔力は過去に前例のない異常な大きさだと聞いている。

エリスはそのハンデを、サクヤの国に伝わる>気くによって補おうとしていた。

>気くには一時的にはあるが身体能力を向上させたり、体の衝撃を拡散させたりする等の力がある。

不幸中の幸か、>気くの才能はあったエリスは懸命に鍛錬を積み、今では>気くの扱いに関してはかなりりの自負があった。

だがそれでも足りないかもしれない。

目標には届かないかもしれない。

焦る気持ちを振り払うように、エリスは首を振った。

「すまない、今は忘れてくれ」

「大会は一日後です。……今から弱気にならないで下さい」

サクヤは一見、無表情に見える。だが、ここ三年は毎日の付き合いであるエリスには、その中に僅かにある心配そうな表情が分かった。

サクヤの心遣いが嬉しく、エリスは頬を弛める。

「そうだな。今から弱気でいては勝てるものも勝てないか」

エリスは目を細め、今だ強い日差しを送り続ける太陽に視線を向けた。

立ち止まらず、光に向かって進む為に。光を目に焼き付けるように。

いつか、その光になる為に。

「私は、絶対にイルレオーネ守護騎士団に入団するんだ」

六年前に決意した意志を、言葉にして再び心に刻んだ。

## 第一話 二人の出会い

背中が地面とぶつかる衝撃と同時に、視界が強制的に晴れ渡った空へと移った。

「そこまでっ！」

この試合の審判を担当していた男の声。

その審判が戦いの結果を示す白いフラッグを上げると同時に、歓声の洪水が地面を揺らした。その震動が、エリスに自身の敗北を実感させる。

仰向けに倒れたまま、荒い息を整えようと努める。疲労が激しく、その碧眼が向く方向を空から動かすことができない。

顎のやや下あたりで切られていている金髪は、今は汗で顔に張り付いてしまっていた。そこに地面の砂埃も加わって、さぞや酷い有様になっているだろう。

だが、今はそれも気にする余裕がない。果たしてこの脱力感は、疲労という単純な事実だけから来ているものだろうか？

ギシギシと、心の中で何かが悲鳴を上げて折れそうになっているのを感じる。

そう、また私は負けたのだ。

「いい試合だった」

先程まで戦っていた男から、手を差し出される。その顔には、爽やかな笑顔が浮かんでいた。

実力でかなり劣っていた私を、この男は称えてくれているのだ。騎士道の鏡のような男の行動に、少し自分が恥ずかしくなる。

エリスは心の中で燻る何かを抑え込み、その手を握った。

「……ありがとうございます」

エリスのぎこちない笑顔見て何かを察したのか、今度は男の表情が申し訳なさそうなもの変わる。

その変化に、エリスは慌てて言葉を重ねようとして……言葉が出なかった。

「……」

「……まあ……その何だ。あまり気を落とすな。また半年後に頑張ればいい」

「……」

エリスは喉から出てこない声の代わりに、頷くことで返事をした。それを見た男は、気まずそうにしながらも背を向け、試合場から去って行く。

私を負かした相手は優しかった。それ故にエリスは、双眸から溢れそうになるものを堪えるのに必死で、声が出せなかった。

これまでの勝利と、今ここでの勝利は意味が違う。

ここでの勝者と敗者は決定的に違う。

勝者にはこの王国が誇る対魔獣戦闘用集団、イルレオーネ守護騎士団への入団が認められる。

敗者には何も無い。

半年に一度、試験代わりに行われるこの大会で勝ち上がり、一六人の中に残ることが騎士団への入団条件だった。エリスはその一歩手前で負けたのである。

エリスが大会に挑戦するのは、これが初めてではない。つまり、エリスが負けるのはこれが初めてではない。

だからといって、負けた悔しさが無くなるわけではなかった。  
しかも実力で圧倒されての敗北だったのだ。何とか粘ることだけはできたものの、勝利への糸口さえ見つけられなかった。自分が守護騎士団に入団するのは、永遠に無理なのではないかという不安が心を締め付ける。

「大丈夫ですか？」

その声に、エリスははっと我に返った。

呆然と立ち尽くし、その場から動こうとしないエリスに審判が声をかけたようだった。

「ああ、すまない。大丈夫だ」

僅かに目が潤んでいるのを悟られないように、エリスは下を向きながら会場を後にした。

エリスを負かした男が、次の試合で惨敗したことを知ったのは、そのしばらく後だった。

「これが飲まずにやっていられるか!」

「エリスちゃん・・・」

エリスはグラスの中身を一気に呷ると、底をタンツとカウンターに叩きつけた。

その様子に、この酒場の店主である壮年の男は苦笑する。

「でもお酒が飲めないからって、代わりにミルクのやけ飲みはどうかと思うよ」

「……………」

エリスは呻きながら、いらぬ水を差してくるマスターに恨めしい視線を送る。

大会の試合が全て終わった後、エリスはその足で王都の商業区のある酒場に来ていた。

嫌なことがあったり、何かで負けるたびにここに来ているので、このマスターとは顔なじみだったりする。

最初にこの店に来た時に初めて酒を飲んでみたのだが、一口飲むだけで立ち上がれないほど世界がグルグルと回った。その時、エリスは自分が致命的なほどに酒に弱いことを知ったのだ。

「じ、じゃあ料理をどんどん持ってきてくれ」

「またやけ食いかい?それで去年は二皿目で顔を青くしたでしょ。」

エリスちゃん少食なんだから無理は駄目だよ」

「……………」

「それに、そういう自分を律せてない行動は、エリスちゃんが目指す騎士としてどうなのかな?」

「ぐう」

それを言われると弱い。

たしかに酒場でやけになって飲み食いしている姿は、エリスが理想とする騎士像からは著しく外れていた。

別にエリスはまだ騎士ではないのだが、エリスは形から入るタイプである。

……そもそも貴族である侯爵家の令嬢が、こんな場所に一人であること自体が問題なのだが、マスターはエリスの身分を知らなかった。

大人しく、だが哀愁を漂わせてちびちびとミルクを飲んでいるエリスに、マスターが不思議そうに首を傾げた。

「また半年後があるんだし、そこまで悲観することはないんじゃないか？ あと一步の所までは勝ち上がったんだらう？」

「……組み合わせが偶然良かっただけだ。同じ所まで勝ち上がった者は皆私よりもずっと強かった」

後学の為にと、残り三二人になってからの試合は全て観戦したが、エリスを負かした男でさえ、実はエリスの次ぐらいに弱かったのだ。

「大会への参加者希望者は、イルレオーネの領土内に限らず他国からも来るって話だ。そんな腕自慢の中でそこまで勝ち残ったんだから、それでも大したもんだと思うけどねぇ」

「大したもので終わっては意味がない」

「そんなにあの騎士団に入りたいのかい？ 人を守るような職に就きたいなら、他にもあるだらうに」

「……私はあの騎士団がいいんだ」

意気消沈しながらも、少しも意志を揺らがせないエリスに、マスターは肩を竦めた。

イルレオーネ守護騎士団は王国が持つ通常の軍隊とは違う。相手をするのは野党や他国の軍隊ではなく、魔獣のみ。言うなれば魔獣討伐の専門部隊である。

核を破壊しない限り動き続ける魔獣に弓などは効果が薄く、強烈な威圧感によって身を竦ませてしまう馬は足手まといにしかならない。

また、魔獣達は例外なく大きな魔力を保有しており、その影響が魔術による攻撃が効きづらい。いや、ほぼ効果がないと言っている。一部の例外を除く人間相手には強力な力を持つ攻撃魔術だが、魔術の効かない魔獣に対しては用をなさなかった。

以上の理由で、魔獣退治に求められる資質は、自力の機動力と直接攻撃で魔獣に対抗できること。イルレオーネ守護騎士団はそれらにのみに特化した部隊であった。

「騎士団に何か特別な思い入れでもあるのかい？」

「……」

「ああ、ごめんよ。言いづらいことなら言わなくていいんだ」

思わず沈黙してしまったエリスに、マスターは慌てて言葉を重ねた。

「気まずそうに自身の白髪頭を掻きながら弁明する。」

「ただ、もつたいたいと思ってるね。エリスちゃんぐらい綺麗なら、若い男が放っておかないだろうに」

「むう」

普段は朝から晩まで鍛錬ばかりに気を取られて、屋敷の敷地内に引き籠もりがちのエリスである。他人と接する機会が少なく、容姿を褒められるのはあまり慣れていなかった。

なので人並みに照れる。

どう反応していいか分からず、エリスはマスターから視線を逸らした。

……と、その視界に映ったものに、エリスは目つきを鋭くする。

偶然にもその視線の先で、エリスにとって無視できないことが起こっていた。

視界の中心は、短い銀髪の可憐な女の子。透き通るような白い肌に、煌めく緑の双眸を携えた童顔は、美人というよりは可愛いといった表現が正しい。大きめの外套から覗く、その細い体つきは、触れれば折れてしまいそうな儂さがあった。

それ故に、その少女の腕を掴む男達の粗野さがいつそう際立つ。

二人がけの小さなテーブルを囲むようにして、しつこく言い寄ってくる四人組の男達に、少女は困ったような顔で狼狽えていた。

その困った顔さえも可憐であり、男達が声をかけたのも少しだけ納得してしまう。

「エリスちゃん？」

急に険しい顔をして立ち上がったエリスに、マスターが戸惑いの声を上げた。その呼びかけには応えず、エリスは迷い無くその現場に歩み寄っていく。

「何をしている？」

「ああ？」

野太く剣呑な声と共に、男達の視線がエリスに集中した。

男達は全員それなりに鍛えた体をしており、かなり体格がいい。

見上げるほどの身長に、広い肩幅。腕などはエリスの倍ぐらいはありそうだ。

そんな男が四人。

うう… ちょっと… いや、かなり怖い。

表には出さないが内心ちょっと怯んでいると、驚いた顔でこちらを凝視している銀髪の少女と目が合った。

騎士を目指すなら、ここで引いてはいけない。

エリスは、自分を奮い立たせるように表情を引き締めた。

それとは対照的に、男達のほうはエリスの容姿を見て表情を弛ませる。

「お、こっちの嬢ちゃんもべっぴんじゃねーか」

「へへ、嬢ちゃんも一緒に飲まねーか？」

上から下へと自分の体を舐めまわすような視線を向けられ、怖気が走る。

エリスは沸き上がる嫌悪感を抑え、毅然とした態度を崩さないよう苦心した。

「断る。それよりも」

「ん？ よく見りゃお前、今日の武芸大会に参加してた女じゃねーか」

予想外の台詞に、エリスは自らの言葉を切つて、その声の主に視線をやった。

「あつ」

思わずそんな声が出てしまう。

その男には見覚えがあつたのだ。

額の左側からその下の頬まで続く傷跡と、浅黒い肌の禿頭が特徴的な男。武芸大会の本戦に残っていた一人だ。

たしか大会の成績は上から二番目。つまり決勝まで勝ち上がった猛者である。最後の試合で惜しくも負けたものの、そのレベルの高い戦いは今でも目に焼き付いていた。

他の男達も、もしかしたら大会の出場者だったのかもしれない。

相手に見覚えがあるのは、男達の側も同じようだった。

「ああ、あれか。ほら、本戦で一人だけ目立って弱かった奴」

「いたな、そういえば。弱すぎて逆に目立ってたから覚えてるぞ」

「あれならもつと強い奴が予選にいたはずなんだがなあ……」

「……」

男達の言葉に、押し黙ってしまう。自分でも自覚があるだけに、何も言い返せない。

その様子に何を思ったのか、禿頭の男が嘲るような声を上げた。

「嬢ちゃん、貴族の娘だろ？」

「……そうだ」

男の唐突な質問に疑問符を浮かべながらも、エリスは正直に答え

る。その返事に何かを納得したのか、禿頭の男が訳知り顔で頷いた。

「やっぱりな」

「どういうことだ？」

「八百長ってやつだ。貴族のご令嬢様ができるだけ弱そうな奴とばかり戦えるように、責任者のお偉いさんあたりが組み合わせを弄るのさ」

「なっ」

禿頭の男の言いがかりに、絶句する。

だが同時に、エリスの中にも、もしかしたら・・・という疑念が沸いてしまった。

たしかにエリスが、あそこまで勝ち残れたのは都合が良すぎる。

他国からも参加者が来るとはいえ、主催はイルレオーネなのだ。

そのイルレオーネでも有力な貴族の一人である侯爵家の娘という立場を考えると、ありえない話ではない。

エリスがそれを望まなくても、エリスのことを知らない大会関係者の誰かが余計な気を利かせた可能性は十分にあった。

何も言えないエリスを無視して、男達の言葉は続く。

「それでも嬢ちゃんは駄目だったようだがな。だが実力で頑張ろうって奴には迷惑な話には違いねえ。本戦に残れる枠が減るわけだからな」

「足手まといになりそうな弱い奴が残っても、騎士団は迷惑だろうに」

「全くだ」

男達の言い分はもつともだと思う。だからこそ、その言葉の針はより深くエリスの心に突き刺さった。

情けない気持ちと申し訳ない気持ちが、体の中でぐるぐると回って混じり合う。

エリスは唇を噛んで俯き、溢れそうになる涙を堪えた。

ああ、何で私はこんなにも泣き虫なんだろう。

本当に、何から何まで嫌になる。

その場で立ち尽くし、何も言わなくなったエリスに、禿頭の男は面倒くさそうにしっしと手を振った。

「ま、貴族の娘に手を出すほど俺達もバカじゃねえ。邪魔だからどっか行え」

突然、男の声が途切れた。

いや、突然エリスの視界から、男の姿が消えた。

「え？」

思わず、そんな声が漏れる。

と同時に、ズドンツという巨大な衝撃音が建物全体を揺らした。

あまりのことに、酒場にいた客達が静まりかえってしまふ。

エリスは一瞬身を竦ませたが、上から細かい木片が落ちてきたことで、すぐに我に返る。

エリスは何気なく、その木片が落ちてきた方向に目をやり・・・絶句してしまふ。

その天井からは、足が生えていた。

いや、違う。

股下からしか見えないが、間違いない。

先程消えたと思った男が、天井にめり込んでいるのだ。

おそらく二階部分に頭が出ているだろう。・・・というかあれは生きているのか？

少し心配になるが、やがて足がじたばたと動きはじめたことから生きていると判断した。流石は大会二位。異常なタフさである。

驚愕の顔はそのままに、エリスは視線を前に戻した。

男達もあれに気がついたらしく、天井を見上げた姿勢のまま啞然としている。

だというのに、銀髪の少女だけは動じた様子もなく、エリスのほうを向いていた。

何やらニコニコと可愛らしい笑顔を浮かべている。いつの間にか右手が、こちらに挨拶するように挙げられていた。

「はじめまして、僕の名前はセシル。君の名前は？」

「え？……あっ」

あまりにも空気にそぐわない唐突な自己紹介に、エリスの反応が遅れる。

不思議そうに首を傾げるセシルに、慌ててエリスは自分の名前を名乗った。

「エ、エリスだ。エリス・ムーア」

「よろしく、エリス」

セシルと名乗った少女は、弾んだ声でエリスの名を発音する。やたら上機嫌であり、先程までこの男達に囲まれて狼狽していたとは思えない。

もしかしてあれは、この少女が？

直感で、そんなことを思った。  
だがどうやって？

力で？ありえない。

セシルの体格は、どう見てもエリスと同じくらい細い。むしろ身長なら、少しだけエリスのほうが高いぐらいだろう。

それ以前に、人間の力であんなことが可能だろうか？

では魔術か？それもありえない。

魔術は発動すると、短い時間だが使用した魔術の魔方陣が残るのを知っている。

では何だ？

エリスの知らない、未知の何かがある。

おそらくこれはそれだ。

エリスは初めて、>気く<の存在を知った時のように、昂揚していた。

もしかしたら私は、まだ強くなれるのかもしれない。

そんなエリスの期待に応えるように、セシルは軽い口調で言った。

「それでエリス、よかったら強くなって見ない？」

その真っ直ぐな緑の眼差しの中に、エリスは光明を見た気がした。

## 第二話 二人の出会い？

セシル・フォーティンは、内界へ来たことを後悔し始めていた。日が傾いてきた空は雲まで黄金色に染まり、その景観は非常に見応えのあるものとなっているのに、セシルの視線は下の石畳ばかりである。

セシルが内界に来てから、既に四日がたっていた。慣れない道をトボトボと歩きながら、この四日間のことを思い返す。

最初に訪れることになった森では、エルフと名乗る種族が住んでおり、そこでは大変な厚遇を受けた。どうやらエルフ達に伝わる外界の伝承は、かなり美化されているらしく、セシルはまるで英雄のような扱いだっただ。

> マナくが薄い地で産まれた影響なのか、皆魔力が小さい者達ばかりであったが、それを補うよう洗練された魔術には外界に匹敵するものがある。内界ではエルフの秘術と呼ばれるものらしいのだが、エルフ達は快く教えてくれた。

残念ながら、そこまで画期的と言えるものまではなかったものの、外界へ帰る時の小さな手土産程度にはなるだろう。

これは幸先がいいんじゃないか？ とその時は思ったりしたものだ。

だが、エルフの族長に内界の人間達の様子を尋ねると、何とも言えない渋い顔をされた。

「あまり期待をされないことです。……おそらく、失望されること

でしょう」

そんなことを言われるものだから、ある程度は覚悟していた。だがすぐに、そんな覚悟では甘かったと思ひ知るようになる。

次に訪れたのは、エルフの森から一番近くにある人の集落。そこそこ大きな集落に住む人々を視て、セシルは愕然とした。

内界の人間達は、その多くが魔力を全く持っていなかったのである。

持っていたとしても、だいたい三〇人に一人という割合。しかもその魔力は、森のエルフ達よりもさらに小さいものでしかない。

そしてさらに衝撃を受けたのは、内界の人間達は外界のことを完全に忘れていたらしいことだった。セシルが外界から来たことを説明しても、皆困惑したり笑ったりする者ばかりで、信じる者は誰一人いない。

挙げ句の果てには、やたら荘厳な建物にいたキルストア教徒とかいう白っぽいローブを着た爺さんに、烈火のごとく怒られた。

聞くところによると、内界の人間は外界のことを冥界やら神界なるものと勘違いしているらしい。人間界の下層にある冥界は上層にある神界の侵略を目論んでおり、魔獣はその先兵であるとかなんとか。

どこのお伽噺だ。

だが、内界の人間は本気でそんなものを信じているようだ。

しかも、一つの大陸内で国がいくつにも分かれ、頻繁に人間同士で争っているらしい。この二〇〇〇年弱の間に何があったのかは知

らないが、随分と酷い有様である。

この分では、自分が内界に来た目的はとも果たせそうにない。それどころか、このまま手ぶらで外界に帰れば、セシルは一生女王の玩具確定である。

何でもいいから、とにかくあの女王が納得しそうなものを見つけねばならない……のだが、それ以前にセシルは行き倒れてしまいそうだった。

セシルは内界の通貨を持っていなかったのである。この状況での内界で、外界の通貨は当然使えるわけがない。つまり、セシルは無一文だった。

グウグウと悲鳴を上げる腹を抱えながら、セシルは内界へ来たことを後悔し始めていた。

実はここ四日ほど何も食べていない。エルフ達は基本的に水しか飲まないの、水以外の食事が出ることはなかったのだ。

ふらふらした足取りで、酷い人混みの道を歩く。

セシルは今、イルレオーネという国の王都という場所にいた。エルフの森の近くにあった集落地からは昼過ぎに出発したので、王都にはセシルの足でその日の夕方頃に着いた。

最寄りではここが一番人が集まる地だそうだ。

王都の中心あたりには、石造りの大きめの城が見える。内界の間達が外界のことを正しく認識していたなら、あの城に行けばアースガルズからの使者として扱って貰えたのかもしれないのだ。

まあ、今そんなことを考えてもしょうがない。

まずは何かお金を稼ぐ方法を考えねばならない。  
ということ、できるだけ人が多く集まる南側区画に来てみたの  
だ。

まずは喉が渴いたので、手近にあった酒場に入る。  
水だけ貰って出ようと、かなり迷惑なことを考えて店に入ったの  
だが、席についてから水も有料であることを知り絶望した。

四人組の暑苦しそうなお男達に声をかけられたのはそんな時だった。  
どうやらセシルのことを女だと勘違いしているらしく、何やらイ  
ヤらしい目つきでこっちを見てくる。同性である男からそんな視線  
を向けられ、セシルは狼狽した。かなり気持ち悪い。しかも酒くさ  
い。

あまつさえ、セシルの腕を掴んで強引に連れて行くこととしてくる。  
……いつそ、こいつらを路地裏に連れ込んでお金を巻き上げてや  
ろうか。

空腹のせい、そんな危険な発想が浮かぶ。  
そこに、何者かの声が割り込んできた。

「何をしている？」

セシルは、何気なくその声の主に視線をやり……目を見張った。

そこに立っていたのは、自分と同年ぐらいの少女だった。  
顎の下あたりまで伸ばされた金髪に、意志の強そうな輝きを灯し  
た碧眼。くっと引き締められた唇と、やや目尻の上がった両眼を内  
包した顔が、見る者に凜々しい印象を与える。そんな少女。

とびきりの美人ではあるが、セシルが目を見張ったのは、そんな

理由からではない。

セシルには視えていたのだ。

自分に匹敵するほどの、巨大な魔力が。

外界でも一四人しか持ち得ていない、最強クラスの魔力。まさか内界にそんな魔力を持つ者が存在するなど、考えてもいなかった。

そして閃く。

これはセシルが外界に帰る時の鍵になるのではないか？

一四人の>数字持ちくと呼ばれる者達に匹敵する人物を内界で発見したとなれば、恐らくそれだけで十分な成果になるだろう。セシルは女王の玩具にならずに済むのだ。

セシルはその少女に、光明を見た気がした。

「には違いねえ。本戦に残る枠が減るわけだからな」

「足手まといになりそうな弱い奴が残っても、騎士団も迷惑だろうに」

「全くだ」

男達に浴びせられる言葉に、少女は耐えるように唇を噛んで俯いている。詳しい内容はよく分からないが、どうやら男達はその少女を弱いと侮辱しているようだ。

うん、まあしょうがないのかもしれない。内界ではその魔力を扱う術がないだろうし、持て余すことだろう。あの少女がそのことで悩んでいるとしたら、むしろ好都合だ。

そんなことを考えていると、男達の一人がその少女を追い払おう

と手を振った。

……駄目だ。それは困る。

「ま、貴族の娘に手を出すほど俺達もバカじゃねえ。邪魔だからどっか行え」

咄嗟に、その男の襟首を掴んで上に放り投げた。

あ、ちよつと力加減間違えたかも。

放り投げた男が、大きな音を立てて天井に突き刺さってしまう。まあ視る限りは意外と軽傷のようなのでいいか。鍛えてる人ではなかった。

とにかく今は、上を向いて驚いた顔をしているあの少女と仲良くするべきだ。初対面での好印象の秘訣は笑顔。そして明るい挨拶だ。

「はじめまして、僕の名前はセシル。君の名前は？」

「え？……あつ」

……少女の反応は芳しくなかった。

あれ？何か間違えただろうか？

セシルが首を傾げると、ちよつと慌てた様子で少女が返事を返してくれた。

「エ、エリスだ。エリス・ムーア」

「よろしく、エリス」

思わず、声が弾んでしまう。

そのせいなのか、エリスに訝しむような顔をされてしまった。  
・・・内界の人付き合いは難しい。

思わず次の言葉に悩んだセシルは、少し考える。

先程の男達の話と、それに対するエリスの反応を鑑みるに、次の台詞はこれで正しいはずだ。

「それでエリス、よかったら強くなってみない？」

その言葉に、エリスの目つきが明らかに変わった。どうやら、これで正解だったらしい。

エリスの瞳を真っ直ぐに見据えながら、セシルはそう確信した。

### 第三話 酒場にて

際限なく積み上げられていく皿に、エリスは唾然とした。

積みまれていくのは空皿だが、少し前まではこの上にちゃんと料理がのっていたのだ。それが瞬く間に消えて皿の塔の上に重ねられる。塔が壁となり、向かい相手の姿が見えなくなったあたりで店員に皿を回収して貰ったのだが、この分ではもう一度回収を頼む必要がありそうだった。

そんな凄まじい勢いで料理を平らげるのは、巨漢でもなく肥満でもない普通の小柄な少女……セシルである。

一体その体のどこに入るのだろうか？

エリスは今、人体の神秘を目撃している最中であった。

結局、店員が三回目の皿の回収を終えたあたりで、やっとセシルの食事が終わった。

「四日ぶりのご飯……ごちそうさました」

「ああ、それはいいのだが……」

セシルが、深々と頭を下げてお礼を言ってくる。

驚くことに、セシルはお金を一切持っていないかった。食事の代金だけではなく、この酒場の天井の修繕費もエリス持ちである。

セシルの身なりを見る限り、そんなに貧しそうなお印象でもなかったのだが、何か事情があるのだろうか？それに、この国のこの季節にしては妙に厚着である。

エリスがだいたいそのような旨を聞くと、セシルは特に隠すことなく教えてくれた。

「ちょっと遠い所から来たから、この国の通貨は持っていなかったんだよ」

「両替商には行かなかったのか？」

「リヨウガエシヨウ？」

「……貨幣を他国のものからこの国のものへと交換してくれる商店のことだ」

私も大概世間知らずだが、両替商を知らないとは……。というか、周辺にある小国もイルレオーネと同じ通貨を使用していたはず。遠い所から来たと言うが、どうやってここまで辿り着いたのやら。

「多分だけど、この国では全く知られてない類の貨幣だから無理だと思う」

「ふむ？失礼だが、一体どの国から？」

「外界のアースガルズって言うて分かる？」

「ガイカイ？アースガルズ？」

聞いたこともない地名と国だ。セシルの様子を見る限り、別に嘘をついている感じでもない。よほど遠くにある小国なのだろうか？

エリスが頭に疑問符を浮かべていると、セシルが困ったように苦笑した。

「いずれ説明するよ。今は多分、言っても信じないと思うから」

「むう……」

信じないとは一体？ますます混乱するが、とりあえず今は保留する。

今、エリスが一番聞きたいことは別にあつた。セシルが食事をしている間は、ずっと我慢していたのだ。

「それで、強くなってみないかとは、どういう意味だったんだ？  
やはり、天井のアレはお前がやったのか？」

エリスは、セシルの言葉を一語一句聞き逃すまいと、ズイッと身を乗り出す。

セシルはそれに押されたかのように、ちょっと引き気味になった。

「こ、言葉通りの意味だよ。見た所、エリスは凄い魔力を持ってるでしょ？」

「分かるのか？」

「うん。僕的能力なんだ。それも含めて説明するね」

セシルは右手をテーブルの上に掲げて見せると、その手首に巻かれてある帯状の装身具を外した。その下から、白い光で構成された文字列のようなものが姿を現す。

手首の肌を巻くように描かれたそれは、どことなく魔方陣のそれとよく似ていた。

「それは？」

「僕のいた国では、魔紋くって呼んでる。普段は見えないけど、力を発動している時はこうやって光るんだ。これには持っている魔力を、一定の道筋に凝縮して循環させ、力を増幅させる機能があるんだよ。それには、手首だけじゃなく体のあらゆる所にこれを刻む必要があるけど」

つまりは魔術なのだろうか？　しかし、それではエリスには不都合があった。

「私は自分の魔力の大きさのせいで魔術が使えないのだが、それは

私の魔力でも使えるものなのか？」

「魔力を消費することによって発動する魔術とは違って、これは消費せずに循環させるものだから、厳密には魔術とは違うよ。むしろ、普通の魔術が使えないほどの大きな魔力を持っていることが、この>魔紋<が効力を発揮できる最低条件なんだ」

エリスはひとまずホッとする。ここまで期待してやっぱり使えま  
せんととなると、酷く落胆する所だった。

エリスのそんな内心には気がついた様子もなく、セシルは説明を  
続けた。

「そしてこの>魔紋<は完全に定着すると、一人につき一つだけ特  
殊な能力が発現するんだ。僕の場合は、かなり大雑把に言うとなら  
ものを解析する能力。これでエリスの魔力を測ったんだよ」

通常、人の中にある魔力を測るには、専用の道具と測定の魔術が  
使える術者が必要になる。見ただけで相手の魔力が分かるなどと言  
うのは聞いたこともなかった。普通なら、セシルがエリスの魔力の  
ことを何らかの形で知って、事前に知っていたと考えるだろう。  
それと同じく、魔力を消費しない魔術も、この世界には存在しな  
いはずだった。

普通の人ならば、セシルの言葉は信じないのかもしれない。  
だが、エリスは信じた。

それは世間知らずだからという要因や、信じたいという心理が働  
いたことなどもあるのだが、何よりもエリスは実際に見たのだ。

体の大きな男が、天井に刺さっていたのを。さらには残りの男達  
を軽々と店外に放り出す様も。

「つまり、私もその>魔紋く<とやらを体に刻めば、セシルのような力と特殊能力が手に入るということだな？」

「うん。発現する特殊能力は個人によつて違うけどね」

「なら、是非その>魔紋く<が欲しいのだが……」

「うん。ちゃんとあげるつもりだよ」

「本当か!？」

エリスはさらにテーブルに身を乗り出すと、セシルが掲げている右手を両手で包み込むようにして握った。その勢いに、セシルはもう完全に気圧されている。

セシルの言葉が真実ならば、エリスは今よりも強くなれるだろう。イルレオーネ守護騎士団に入ることも、夢ではなくなるかもしれないのだ。そのことに、エリスは自分の中で沸き上がる興奮を抑えきれなかった。

「嘘ではないな!？今さら嘘だと言われても私は信じないぞ!？」

「う、うん。……あつ、でもそれには条件が三つあるんだ」

「条件?何だ？」

多少勢いが削がれたものの、今は大概の条件は呑んでもいいと考えている。エリスは急かすようにセシルの言葉を促した。

「まずは一つ目。ちよつと事情があつて、僕は自分の国に一年ぐらい帰れないんだ。>魔紋く<をあげる対価として、その間の僕の寝泊まりする場所と食事を用意して欲しい」

「いいだろう」

即答する。

要するに住み込みで武術を教える指南役や、魔術を教える家庭教師を雇うのと同じだ。既に一人雇っているし、問題はない。まあ、

指南役でありながら使用人でもあるサクヤはちよつと事情が違うが……あと屋敷の食費が少々かさばりそうだが、それぐらいは大丈夫だろう。

「そして、二つ目の条件なんだけど……」  
「うむ」

続きを促すエリスに、セシルは少し言いづらそうに言葉を続けた。

「>魔紋くはその形を知っていても、実際に刻める人は限られてるんだ。多分、こっちにはできる人が誰もいないと思う。だから、エリスの体に直接>魔紋くを刻むのは、どうしても僕がやることになるんだけど……」

「そうか。よろしく頼む」

あっさりとした返事に、セシルは戸惑ったような様子を見せる。そんなセシルの反応に、エリスは首を傾げた。

「……いいの？ さっきも言ったけど、体のあらゆる所に刻む必要があるから、やる時は服を脱いでもらうことになるけど」

「……？ 別に構わないが？」  
「は、恥ずかしいとかは思わないんだ……」

そうポツリと呟くと、むしろセシルのほうで恥ずかしそうに俯いてしまった。

そんなセシルの反応に、エリスは思わず微笑んでしまう。

「はは、セシルは貞淑なのだな。だが別に、女同士なのだから問題なかるう？」

そのエリスの台詞に、セシルはきょとんとした顔をすると、続けて「やつぱりか」と言いたげな様子で嘆息した。今だに手を握ったまま首を傾げるエリスに、セシルは重々しく告げる。

「僕、男だよ？」

「……え？」

二人の間に、妙な沈黙が降りた。セシルが言ったことを理解するのに、エリスは数瞬以上の時間を要する。

瞬きを三度、四度としたあたりで、やっと一番確率が高そうな結論に至った。

「……今のは冗談か？」

「冗談じゃない」

セシルが眉をひそめて否定する。

冗談の類ではない。つまりセシルが男なのは本当のことです……？

と、そこで自分がセシルの手を握ったままだったことを思い出し、慌ててその手を放した。セシルが男だと理解すると、急に恥ずかしくなったのだ。

エリスは微かに頬を赤く染めてに俯くと、指をもじもじさせながら謝罪した。

「す、すまない。とても男には見えなくて……」

ついでに余計な一言も言ってしまう。

だがセシルは、特に気にした様子もないようだった。拘っていない

いというよりは、どこか諦めきつた顔をしている。

「別にいいよ。慣れてるから」

「本当にすまなかつた。……だが、そうか。ふ、服を脱がねばならないのか」

今さらながら、二つ目の条件の意味を理解する。

エリスの国では、婚前の女性が男性に裸体を晒すのは、あまり良しとしない風習があつた。別に国法で定められているわけでもないし、罰則があるわけでもない。実は、意中の相手がいる年頃の娘あたりは、皆が律儀に守っているわけでもなかつたりする。だが、エリスは完全な箱入り娘だつた。

ましてや、セシルとはまだ初対面に近い。いくら外見が女にしか見えなくても、男だと知ってしまうとかなりの抵抗があつた。

エリスの動揺を見て取つたのか、セシルが気を取り直して先程の話の続きをした。

「だから二つ目の条件は、僕に見られたり触れられたりするのを我慢できること。あと、体に>魔紋<を刻むのはけっこう痛いし、それも覚悟しててね」

「……」

この時、痛みの中はエリスの耳にあまり入っていなかつた。どうしてもセシルの前で無防備に裸体を晒す自分を想像してしまい、どんどん顔が熱くなるのを止められない。

返事をするできないエリスに、セシルは補足するように言葉を付け足した。

「もちろん、エリスの体に>魔紋<のこと以外は絶対に手出ししな

いと誓うよ。信じるかどうかはエリス次第だけど、どうする?」  
「だ、大丈夫だ。よろしく頼む」

真っ直ぐな目を向けられて、つい気丈な返事をしてしまう。本当は、それほど大丈夫でもなかったりするのだが、躊躇っても結局は最後に同じ返事をしていただろう。それ程にエリスは強くなりたかった。

エリスの返事にしばらく沈黙していたセシルだが、やがてエリスの動揺が少し収まってきた頃に、三つ目の条件を口にした。

「それで最後に三つ目の条件なんだけど……」

そこで、セシルは言いかけた言葉を途中で止めてしまう。

「ん? どうした?」

エリスはその言葉の先を促すも、セシルは首を横に振った。

「やっぱりいいや。とりあえずはその二つの条件で」

「? あ、ああ。心得た」

セシルにどういう心境の変化があったのかは分からない。

ただ、言葉と止めた時のセシルの瞳が気になり、いつまでもエリスの頭の中から消えなかった。

#### 第四話 <魔紋>

エリスに案内されて来た、わりと豪勢で大きな装いの屋敷。その屋敷の入り口である、玄関の扉をくぐってすぐの所にそいつは居た。

使用人の装いをした、長い黒髪に鳶色の瞳をした女性。

髪色以外の外見は全然違うというのに、セシルは一目で理解した。この女はあの女王と同類だ。

我知らず、ごくりと喉が鳴る。

本能がセシルの中で激しい警告音を掻き鳴らした。

今すぐにも逃げ出したいぐらいだが、その視線に射すくめられてピクリとも動くことができない。何やら思うところがあったのか、相手もエリスから視線を外そうとはしなかった。

期せずして睨み合う格好になる。

いや、睨み合いというよりは一方的に睨まれて怯んでいる構図だが。

思わぬ天敵の登場に、セシルは冷や汗が止まらなかった。心臓がバクバクとうるさいほど早鐘を鳴らしている。

「……………サクヤ？」

二人の様子に、エリスが戸惑ったような声を上げた。それによって、サクヤと呼ばれた女性はやっとその視線からセシルを解放する。続けて、エリスに深々と堂に入ったお辞儀をした。

「おかえりなさいませ、エリスお嬢様。この男性のお方は一体？」

「ああ。いつもの酒場で友達になってな。しばらく私の客人としてこの屋敷の部屋を貸すことになった……………って男だと分かるのか？」

失礼にも、驚いた顔をするエリス。

反面、一目で自分を男だと理解してくれたサクヤに、セシルは少し感動した。と同時に、あの女王と同類かもしれないと思ったことを深く反省する。

何でこんなに礼儀正しそうな人を、あの女と同類だなんて錯覚したのか。

エリスの言葉に、サクヤは当然とばかりに頷いた。

「もちろんでございます。こんなに可愛らしいお方が女の子のほずがありません」

やっぱり同類だった!?

「そ、そういうものか?」

「そういうものです」

断言するサクヤに、若干引き気味になった様子のエリス。だがすぐに気を取り直したようで、まずはサクヤにセシルの案内をするよう頼んだ。

「空いている部屋を見繕って、彼を案内してくれないか」

「かしこまりました」

エリスの指示を平坦な声で承ると、サクヤはその無表情な顔を再びセシルに向ける。全力で警戒するセシルに、サクヤはスカートの手裾をつまんで挨拶をして見せた。

「サクヤ・ミナモトと申します。このお屋敷では使用人兼、剣術指

南役を勤めさせていただいております」

「……セシルです。よろしく」

「ではセシル様。こちらへどうぞ」

ごく自然な仕草で、サクヤが先導する。

何も疑わず、セシルがその背中に付いて行こうとした所で、エリスの声がかかった。

「待て」

「……何かございましたか？」

「そちらは、たしかお前の部屋があった方向ではないか？ そっちに他の空き部屋なぞ無いはずだが」

エリスの指摘に、サクヤが無表情のまま明後日の方を向いた。

セシルは顔を強張らせながら、後ろ歩みでサクヤから距離を取る。

「はて？」

起伏のない声で惚けるサクヤに、エリスは溜息をついた。何やら危ういものを感じ取ったようである。

「やはりセシルは、私が案内する」

「……かしこまりました」

無表情でエリスの言葉を受けたサクヤは、どこか残念そうにしているようにも感じた。

エリスに案内された部屋で待つように言われ、かなりの時間が経過した。

やはり躊躇っているのだろうか？ 部屋の窓から夜空を眺めると満月が丁度真上のあたり来てしまっている。

セシルは何となく、酒場で耳の端まで真っ赤にしていたエリスを思い出した。あの様子では、かなり抵抗があるに違いない。だがそれ以上に、一刻も速く魔紋を刻んで欲しそうでもあった。現に、彼女は今日すぐに刻むと言っているのだ。

彼女に、どこか余裕のないものを感じる。ひたすら生き急いでいるような、そんな感じ。何が彼女をそうさせているのだろうか？

そんなことを考えていると、コンコンと控えめなノック音が、部屋の扉に鳴った。続けて、その向こうにいる者が部屋の中に声を投げかけてくる。

「私だ。入るぞ」

そう言っただけで中に入ってくるエリスを見て……セシルは目を丸くした。

そんなセシルの様子に、エリスは敏感に反応して声を上げる。

「な、何だ？どこか変だったか？」

「いや、変も何も……」

はつきり言つて不自然すぎる、とまで言葉が続かなかつた。

エリスは、体型が変わるほど服を重ね着していたのである。その服でモコモコになって歩きづらそうにしているエリスの様子に、笑いを堪えるのに必死で言葉が途中で途切れてしまったのだ。

「……っプ……クク……ク」

「笑うなあ！」

やはり自覚があつたのか、体を震わせて笑いを堪えるセシルに、エリスは顔を真っ赤にして唇を尖らせた。

「し、しょうがないだろ。これくらい着ないと不安だったんだ」

何やらぶつぶつと呟いているエリスに、やっと笑いが収まってきたセシルは軽い調子で謝罪する。

「ごめん、ごめん。でも、それ意味ないよ？さっきも説明したけど、一度に全部刻む必要があるから、どうせ全部脱がなきゃならないのに」

「むう」

「……どうする？ やっぱり、やめておく？」

唸るエリスに、セシルはもう一度確認した。やっぱり辞めると言われれば、困るのはセシルであるのに、だ。

だが、そんなセシルの言葉にエリスはむしろ意志を固めたようだった。

「いや、やる。私には>魔紋<が必要なんだ」  
「そう」

一度表情を引き締めたエリスだったが、すぐに恥ずかしそうに俯いてしまう。だがもう、自らの行動を止めることはしなかった。

「ふ、服を脱ぐから、脱ぎ終わるまでは向こうを向いててくれないか？」

「うん、わかった」

セシルは素直に頷くと、エリスに背を見せる。

「……灯りを消しては駄目か？」

「……うん。大丈夫」

セシルは少し考えた後、エリスの要望を許可した。通常なら、灯りまで消されると>魔紋<は刻みにくいのだが、セシルは自分の能力で視るならば大丈夫だと判断する。

ランプの灯りが全て消され、部屋を照らす光が月明かりだけになると、エリスはおずおずと服を脱ぎはじめたようだった。

ゆっくりとした布ずれ音を背後に聞きながら、セシルも準備をすることにする。

準備とは言っても、自分の右手の人差し指に刻まれた、特殊な>魔紋<を発動させるだけであつたが。

それは外界でも、今のところ一三人にしか扱うことのできない特別な>魔紋<。

>魔紋<を刻む為の>魔紋<であり、これを持つ者達が毎年何百

人もいる資格者に>魔紋<を刻むのだ。若いセシルはまだその担当になったことがないが、この特別な>魔紋<を持つ者の義務として、知識は十分に会得させられている。

ちなみに一人例外がいて、その者はこの特別な>魔紋<なしでも>魔紋<を刻むことができた。

いや、刻んでしまうと言ったほうが正しいか。その強大すぎる魔力と特異な能力は、力の弱いものが近くに寄るだけで、その者の全身を刻み殺してしまう。

>魔紋<の原型とも言えるその能力と力こそが、アースガルズの王の資格であり、孤独者の烙印でもあった。

傍に近づけるのは、同じく大きな力を持った者だけ。その者はこの特別な>魔紋<と一緒に、王自ら直々に>魔紋<を刻んでもらうことができる。

その人数が、今のところ一三人。これでも史上最高の人数だそう  
だ。

孤独者と言うには少し多めの人数かもしれないが、あの女王は酷く寂しがりである。

その一三人が一四人になった時、あの女王は素直に一四人目を帰してくれるだろうか？

そう、セシルがエリスに言いかけた三つ目の条件。

それは、セシルが外界のアースガルズに帰る時、一緒に来て欲しいというものだった。でも、それには問題がある。

内界と外界の間に張られている巨大な結界。それには一定以上の魔力を持つ者の侵入を阻む効果がある。

エリスほどの魔力ならば、まず確実に弾かれてしまうだろう。

つまり、外界から内界に戻るには女王の助力が必要なのだ。

エリスをアースガルズに連れて行けば、帰れるかどうかは女王の気まぐれ次第になってしまうのである。はっきり言って、あの女王がエリスを素直に帰すかどうかは、全くの未知数であった。

本来ならば、全て説明した上で三つ目の条件を提示しようと思っていた。でもセシルは、エリスが二つ目の条件を呑んだ時に感じた何かに、それを躊躇った。

もしかして、どんな無茶を言ってもこの人は呑んでしまうんじゃないか？

そんなことを思ったのだ。

極端な話、命を要求すれば命を差し出してしまうような、そんな危うさがある。

まずはそれが何から来るのか、セシルは見極めようと思った。最悪、三つ目の条件は諦めてもいいと考えている。

そもそも、セシルが「魔紋」を刻む労力など、別に大したものではないのだ。対価としては、セシルが内界にいる間の生活を保障してくれるだけで十分すぎるのである。

まあできれば女王の後宮入り（玩具）は避けたいので、その時はまた別の方法を探そうと思うが。

その代案を考えながらエリスが脱ぎ終わるのを待っていると、やがて背後でしていた長い布ずれ音が止まった。続いて、消え入りそうなエリスの声がセシルの耳に届く。

「……全部脱ぎ終わった。そ、その……よろしく頼む」

「うん、分かった」

セシルが振り向くと、エリスが言ったとおりの一糸まとわぬ姿が見えた。

灯りは消したものの、窓から射し込む月明かりがその肌を照らし、

暗闇からその姿を青白く浮かび上がらせてしまっている。恥じらいながら両の手で体を隠し、こちらに背中をむけている様は、セシルに幻想的な絵画でも見ているよな錯覚を起こさせた。

「……………」

「セ、セシル？ 頼むから黙らないでくれないか？」

「ああ、ごめん。綺麗だから思わずね」

「……………」

つい口をついて出てしまった本音の感想に、エリスがボンツと音がしそうなほど一気に顔を上気させる。

「きききき、きれっ…きれ……………」

「じゃあ、まずは背中からはじめるから、ベットに俯せに寝てくれる？」

動揺のしすぎで何を言っているのか分からなくなっているエリスに、セシルはさっさと指示を出した。落ち着くのを待っていると、いつまでも終わりそうにない。

それに、実は少しセシルも動揺していたのだ。

エリスが過剰に動揺するものだから、逆にある程度は落ち着いていられたのだが、だからといって全く緊張しないわけではない。セシルもやっぱり男なのである。

外界ではあることが原因で、たまに不意打ちで女性の裸を目撃してしまうことがあったが、その度にその女性からは酷くからかわれていたものだ。

エリスがベットに寝そべったのを確認すると、セシルはその腰に馬乗りに跨った。

ジジジと何かが弾けるような音をたてる人差し指を掲げ、エリス

に最後の確認をする。

「じゃあやるよ？ かなり痛いけど我慢してね。……言い忘れてたけど、途中で気を失っちゃうと最初からやり直しになっちゃうから気を失うという部分に、エリスが身を固くした。」

「ちょっと待て。そんなに痛いのか？」

「うん、僕も四年前に身をもって体験したからね。皮膚よりちょっと下あたりを直接焼かれ続けるような感覚って言えば分かるかな？ 中には痛くて泣き叫んじゃう子もいるぐらいだよ」

セシルの脅すような言葉に、エリスは何故か妙な対抗意識を燃やしたようだった。

「四年前のお前が耐えられたというのなら、私も耐えてみせよう」

そんなことを言っただけで歯をくいしばるエリス。

セシルはもう何も言わず、まずは背中上部の肩甲骨の間あたりに、その人差し指を押し当てた。指先の濃縮された光が、触れた部分の皮膚の下へと浸透する。

エリスはその体をピクツと小さく痙攣させたが、それ以上の反応はない。

だがやはり、かなり痛いのだろう。その背中がみるみるうちに脂汗で湿っていくのが、暗がりの中でも分かった。

セシルはできるだけ手早く、その背中で魔紋くの形をなぞっていく。あまり時間をかけて、エリスを長く苦しませるような趣味はセシルにはなかった。

……余談だが、セシルに魔紋くを刻んだ例の変態DS女は、わ

ざとじつくりと刻みながら、苦しむセシルを見て恍惚な顔をしていった。

「……………くっ……………かはぁ……………」

耐えきれなくなってきたのか、エリスの口から小さく苦悶の音が漏れはじめた。舌を噛んでしまいそうな気配を感じ取り、セシルは咄嗟に左腕をエリスに噛ませた。

セシルの行為にエリスは少し困惑したような表情を見せたが、それもすぐに痛みによって掻き消える。

エリスの歯に力が込められるが、>魔紋<を発動したセシルの左腕には歯形すらつかない。でも、このままでは>魔紋<を刻みにくいので、セシルは自身の左裾を破いた。それを、くつわ代わりにしてエリスの口に噛ませる。

こういうことがあるのを忘れていた自分の準備不足を反省しつつ、>魔紋<を刻むのを再開した。

背中から腰、太ももから足首、肩から手首までを刻み、後は背後からは刻めない部分を残すのみとなった。

当然、残りは仰向けにならないと刻めない。

痛みを我慢するために姿勢が崩れ、もう色々と丸見えになっているのだが、既にエリスにはそれを気にする余裕はないようだ。仰向けになっても、その両腕は体を隠すのではなく、苦悶の表情を浮かべる顔を守るように置かれている。

その体は痛みによる汗で濡れになっており、水を得た肌が妖しく月の光を反射していた。

不覚にも、その姿にセシルの心拍数が跳ね上がる。

セシルの熱くなってしまう顔を、エリスに見られていないのが幸いだっただ。ともすれば沸き上がりそうになる邪念を振り払い、>魔紋<を刻むことだけに集中する。

エリスの首もとから腹部にかけて人差し指を這わせ、最後の足の付け根部分まで刻み終わると、セシルは盛大に息を吐いた。

「終わったよ」

目を閉じて耐えていたエリスにそう告げる。

エリスは薄く目をあけてこちらを向くと、そのまま眠るように気を失ってしまった。

気絶してしまったエリスの汗を拭いてから、シーツを被せて部屋の外に出ると、扉を開けてすぐ正面にサクヤの姿があった。

「えっと……」

「存じております」

「……もしかして監視してた？」

セシルが気恥ずかしそうに頭を掻きながら尋ねると、サクヤはあっさり和白状した。

「はい。大まかな経緯はエリス様お嬢様から伺っていたのですが…」

セシルは素直に納得する。素性が全然分らない男という怪しさから考えると、むしろ寛容すぎるとも言えるだろう。

何せ部屋の中ではあんなことをしていたのだ。何も知らない者が見れば、情事にしか見えないかもしれない。その場で屋敷から叩き出されたとしても文句は言えなかった。

なのでセシルは特に怒りが沸くこともなかった。むしろ申し訳なく感じるぐらいだ。

「失礼ですが、念のため……」

「まあ、しょうがないよね」

「いつでも私も参加できるよう待機しておりました」

「何に備えてたの!？」

「ですが存外にセシル様はヘタ……紳士的だったようで」

「今ヘタレって言いかけたよね!？僕、けっこう頑張って我慢したんだけど!」

「我慢…ですか。なるほど、たしかにそういう趣向の方も」

「僕の我慢は性癖じゃないよ!」

「それにしても、お二人の絡み合う姿は眼福でした」

サクヤは無表情のまま、ポツと頬を赤くして見せた。

セシルはそれにどう反応しているのか分からない。

「……」

「まあそれは冗談です」

「本当に冗談だったの?」

セシルの疑念は華麗にスルーして、サクヤは深々と頭を下げた。

「エリスお嬢様のご友人を疑ったことには違いありません。誠に申し訳ございませんでした」

「友人？」

友人というフレーズに少し背中がむず痒くなり、思わず聞き返してしまった。特に意味はなかったのだが、サクヤはそれに頷いて言葉が続ける。

「お二人がお帰りになられた時、エリスお嬢様はたしかにご友人だと仰いました」

そう言つと、サクヤはもう一度深く頭を下げた。

「お嬢様にご友人を連れていらしたのは初めてです。……くれぐれも、エリスお嬢様のことをよろしくお願い致します」

大げさだとは言わなかった。

ただ、やはりエリスには何かがあつて、サクヤはその何かを知っているのだ。

何となく、それが分かった。

「それでは、他の部屋に案内いたしましょう。こちらへどうぞ」

沈黙してしまつたセシルに、サクヤが背を向けて歩き出す。

セシルが最初に案内された部屋のベットは、今はエリスが使つてしまつている。なので違う部屋を貸してもらえるのは嬉しいのだが、それには一つ釘を刺しておくべきことがあつた。

「サクヤの部屋以外でお願いね」  
「……………チッ」

今舌打ちしたよ!?! この人!

## 第五話 王都にさす影

イルレオーネの魔術師としては最高峰の称号である宮廷魔術師。ある意味で彼ら、或いは彼女らは、その国が持つ最強の兵力であると言える。

なぜなら魔術師は、魔力を持たない人間に対しては絶対的な優位にいるからだ。

どんなに体を鍛え、技を錬磨させた戦士であろうと、魔力を全く持たない人間は初級魔法にさえ致命傷に近い傷を受けてしまう。

魔術師の中でも選り抜かれた精鋭である宮廷魔術師ともなると、初級魔法程度ならば一瞬で発動することが可能だった。

つまり、普通の人間が一对一で宮廷魔術師に勝つには、相手が認識出来ないほど速く接近し、尚かつ一撃で決める必要がある。戦闘用の訓練もしている宮廷魔術師達相手に、それだけの芸当ができる人間はほぼ皆無であった。

天敵である魔獣に対しては為す術もない魔術師だが、それが人間同士であれば無類の強さを発揮するのである。実際に他国との戦争になれば、魔術師達の質によって戦局が左右されると言っても過言ではない。

それが、この世界の常識であった。

だからだろうか。

その宮廷魔術師である女性、キャロライン・デンゼルはその人物を相手に全く脅威を感じていなかった。

「前々から、あんた達はいけ好かなかったのよね」

薄暗い地下室の中、そこにあるものを見回しながら、その男の背

中に声をかける。

自分がここに入ってきたのは予想外だったのだろう。

声をかけた相手が驚愕の表情をするのを眺めて、キャロラインは愉悦に浸った。

「相手をするのは魔獣ばかりで、人殺しの任務なんてないでしょう？ 全く手を汚さない高潔な騎士様達に人気が出るのは当然よね。一般庶民にちやほやされて、さぞや良い気分だったでしょう」

その長い金髪を片手でいじりながら、キャロラインは嘲笑う。

対人用の兵士である宮廷魔術師には、決して綺麗とは言えないような仕事も多い。そこに、魔術という力に対する畏怖も重なって、一般人達の宮廷魔術師に対する印象はあまり良くなかった。

平和ボケした無知蒙昧な民衆の中には、イルレオーネ守護騎士団があるなら、宮廷魔術師達は必要ないと主張する者までいる。

もし宮廷魔術師達がいなければ、誰が魔術師達の犯罪を取り締まれるというのだろうか？ 騎士達の剣が、魔術師に届くとも思っているのか？

さらには魔術師という戦力を手放せば、イルレオーネはあつという間に他国に侵略されるであろう。

もちろん、それが分かっている貴族達は宮廷魔術師達の待遇を変えようなどとはしない。それでも、市街の道ですれ違う人々から向けられる視線は、気持ちのいいものではなかった。

戦争がない平和な年が続くうちに、脅威の対象は魔獣ばかりに偏り、その分だけイルレオーネ守護騎士団の人气が上がり続ける。その反面、他国に対する警戒感が薄れるほど、宮廷魔術師達は疎んじられる一方なのだった。

だがそれは、決してイルレオーネ守護騎士団が悪いわけではない。キャロラインの騎士団に対する感情は完全に八つ当たりであった。

そんなキャロラインだからこそ、この地下室が示す事実にも、薄暗い喜びを禁じ得ない。目の前の罪深い男に、キャロラインはむしろ感謝した。

「でも、これはどう？ 清廉潔白どころか真っ黒じゃない。人間の所業とは思えないほどおぞましいわよ？このことが発覚した後の反響を考えるといい気味だわ」

「……」

「あら、貴方が悪いのよ？ 騎士団の名が汚れるのも、全部貴方の行いのせいだわ。私はただ、国から与えられた任務を忠実にこなすだけ」

キャロラインは弾む声を自重しようとしなくて、男を揶揄する。男が無言のまま、腰の剣に手をかけようとした所で、キャロラインは素早く仕事の顔に切り替えた。一步後ろに下がり、相手との距離を空けながら、その男に告げる。

「宮廷魔術師、キャロライン・デンゼルよ。拉致と殺害、その他諸々の疑いで貴方の身柄を拘束させて貰うわ。剣を置いて投降なさい」

その言葉で、男の動きが一瞬止まる。

だが次の瞬間には、男は剣を鞘から抜きはなっていた。

男の抵抗が少し意外だったものの、キャロラインは冷静に視線を鋭くする。

それだけでキャロラインの眼前に、光で構成された小さな魔方陣

が浮かび上がった。

その中央から小石程度の大きさの光球が射出され、剣を振りかぶる男に直撃する。

男の体に炎が爆ぜ、乾いた音が鼓膜を震わせた。

> 爆裂<系の初級魔法である。派手な威力はないものの、魔力を持たない人間を沈黙させるには十分な威力だ。

流石に剣の精鋭なだけあって動きは速く、あと数瞬遅れていればキャロラインは剣の錆びになっていたかもしれない。だが、もうこれで終わりである。

「馬鹿な奴。 宮廷魔術師相手に剣が届くとても」

言いかけて、右肩に走った激痛に顔をしかめる。

何事かと自身の体の右側を見ると、肩から先の右腕が消えていた。思い出したように血を吹き出すその傷に、キャロラインは悲鳴を上げる。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
何故？何が？斬られた？どうして？

混乱しながら膝をつくキャロラインの前に、男の影が差しかかった。

キャロラインは激痛に脂汗を流しながらも、その男を見上げる。

男は全くの無傷であった。

その男の姿を見て、キャロラインは目を見開く。

爆発によって破かれた衣服の下に見えたもの。

男の胸の部分にあるソレを見て、キャロラインは驚愕した。

「あなた…それはっ…まさか！」

キャロラインの中で、一つの事実が反転した。  
圧倒的な優位から完全なる劣位へ。  
捕食者から被捕食者へ。

再び剣を振り上げる男に、キャロラインは我に返る。

慌てて初級魔法を何度も多重構築し、相手の男に魔法の弾幕を浴びせた。効果がないと分かりつつも、キャロラインにはこれしかないのだ。

「くそ！くそ！くそ！くそ！人間の敵め！」

どうやら肉体に効果はなくとも、手に持っている剣などは影響を受けるらしい。男が上段に剣を構えたまま、それを上手く振り下ろせないでいる。一太刀目で自分が右腕を斬り落とされただけで済んだのも、魔術で剣の軌道が逸れたからであろう。

だがそれは、ただの時間稼ぎにしかならなかった。騎士団の対魔獣用である特別製の剣は、破壊するのに中級魔法以上を必要とする。それには、魔方阵を構築するのに数秒以上の時間がかかってしまうのだ。この男相手では、逃げ切れずに余裕で斬り殺されてしまう。

やがて、傷口から流れる血が許容量を超え、意識がもうろうとする。初級魔法が構築できなくなり、そこでキャロラインの命運が尽きた。

最後はただ、男がゆっくり振りかぶる剣に向かって、生への執着から漏れ出る言葉を紡ぐ。

「……いや……いやあ！まだ死にたくな」

そこでキャロラインの意識が永遠に途切れた。

## 第六話 目が覚めて

瞼に射し込む光を意識すると、覚醒はすぐだった。

いつもと違う角度で射し込む光は、真っ直ぐにエリスを照らしている。その心地の良い日の温かさ、微かな鳥のさえずりがまどろみを誘い、世界に自分が目を覚ますのを邪魔されているかのように感じた。

それに逆らうように、エリスは強引に上半身を起こす。まだ抜けきらない眠気のせいか、エリスの思考はごくゆっくりと流れた。

ふと、自分が何も着ていないことに気がつく。それに連鎖するように、ゆっくりとだが昨日の記憶を思い出していった。

焦燥感と昂揚。

耐え難い恥ずかしさ。

戸惑い。

激しい痛みを伴うのに、何故か心遣いを感じる指。

苦痛の終わりを告げる優しい声。

うつすらと開いた瞼の先に見えた、安心感。そのもやもやとしたものが、銀髪の少年の微笑みを形作ったところで……

エリスは飛び起きた。

ベットの上で立ち上がり、自分の両手を見下ろす。

外見に、特に変わった様子はない。グルッと肩を回してみたが、そこも別にいつもと変わらないように感じる。そのことに、エリスは首を傾げた。

そう、変わっていないのだ。昨日あれだけ痛い思いをしたというのに。

と、そこでセシルの言葉を思い出す。

『途中で気を失っちゃうと最初からやり直しになっちゃうから』

……そういえば昨日、最後に気を失ったのだ。

もしかして失敗したのか？

とにかく、どうなっているのかセシルに尋ねなければ。

エリスはベットから飛び降りると、そのままの勢いで部屋を出ようとして……

「おはようございます、エリスお嬢様」

サクヤに阻まれた。

扉を開けると、目の前にサクヤの顔があつたのでかなり驚いた。サクヤはそのまま、エリスを部屋の中へと押し戻してしまう。

「お、おはようサクヤ。セシルは何処にいるか分かるか？」

「セシル様は今、鍛錬場のほうにおられます」

「そうか。では」

と外に出ようとした所で、再びサクヤに進路を遮られた。

「お待ち下さい」

「なんだ？」

無表情であるサクヤだが、エリスにはその中にある微かな表情が分かる。今はそこに、戸惑いのようなものを感じ取った。

「今のお嬢様は、セシル様にお会いになるべきではありません」

「どづいつことだ？」

訝しむエリスに、サクヤは平坦な声で忠告をした。

「はやく目を覚まして下さい」

「そづいつことか……」

つまりは騙されていると言いたいのだろう。その気持ちは分かる。エリスだって、セシルの言っていることが嘘ではないと言い切れる根拠はない。

だがそれでも、セシルの持つ力は本物なのだ。

「残念だがサクヤ。私の目は覚めている」

エリスのその返事に、サクヤは視線を鋭くした。

「全てを理解した上で、今すぐお会いになると？」

「そうだ」

「……今行けば、昨日より酷い辱めにあわれるかも知れないというのに？」

「昨日のことは私が望んだことだ。そして今から昨日と同じことを頼もつと思っている」

「まさか……昨日は気を失ったばかりではありませんか……」

「昨日のでは、まだ足りないのだ」

昨日は途中で気を失ってしまった。私の体に、魔紋くとやらを感じないということは、おそらくまだ完全には終わっていないのだから、もう一度最初からやってもらう必要がある。

「……」

珍しくサクヤが絶句していた。

と、その奥に読み取れた予想外の感情に、そろそろエリスは違和感を感じはじめていた。

「承知いたしました。それでは、お屋敷にいる他の使用人達の人払いは、私にお任せ下さいませ」

「ん？」

何を言い出すんだ？という意味で首を傾げたエリスだが、サクヤはそこから違う何かを読み取ったようだ。

慌ててその頭を下げて、エリスに謝罪する。

「申し訳ございません、もしや見られるほうがお好みでしたか？衆人環視の中・・・っ失礼、少し興奮したようです」

無表情のままハンカチを取り出したサクヤは、上品に鼻から垂れた血を拭いた。

「ちよつと待て！何の話しだ？」

エリスは先程までのサクヤとの会話を思い返す。何かがおかしい。困惑するエリスの質問に、サクヤは正確に答えた。

「羞恥プレイの話でございます」

「へ？」

「それにしても、朝からいきなり全裸でセシル様に野外プレイを強要とは……感服いたしました。まさにMの鏡でございます」

「あ」



敷地内の、やや中央にある鍛錬場。屋敷に囲われるようにして存在するその場所は、建物自体が人の視線を遮る塀代わりのようになっている。

エリスが長年慣れ親しんだ場所であり、日常で大半の時間を過ごしてきた場所でもある。だが今日は、その風景の中にいつもと違うものが混じっていた。

強い日差しが地面を照り返す中、それと不釣り合いなほど厚着をした銀髪の少年。

その周囲は騒がしく、人には懐かないはずの野生の小鳥達が、その少年に寄り添って戯れていた。

少年は指にとまった小鳥を、その煌めく緑の瞳で優しく愛でている。その様相は、ここがいつもの鍛錬場ではなく、もっと神聖な場所であるかのような錯覚をってしまった。

ふとエリスは、その少年の左腕の裾が破れているのに気がつく。

それは昨日の夜に見た、こちらを気遣う優しい顔を思い起こさせた。その顔は今、指先にいる小鳥に向けられている。

何故かそこから目を離すことができず、エリスはその中性的な横顔を眺めていた。

トクンッ。

自分の中で、何かが鳴る。

それはまだ小さい小さい何か。意識しなければ、気がつきもしない芽吹き。

今のエリスには、その正体はまだ分からなかった。

エリスのそんな変化のせいかな、少年の周囲にいた小鳥達が一斉に飛び立ってしまう。

それによって、その少年はエリスの存在に気がついたようだ。

「おはようエリス。体の調子はどう？」

「おはよう。どうも何も、いつも通りだ」

二つの意味を込めてその少年……セシルに告げた。

どうやら両方の意味をちゃんと理解してくれたのか、セシルは今一番聞きたかったことを答えてくれる。

「なら、大丈夫かな。> 魔紋くはちゃんと刻めてるよ」

「ふむ？ そのわりには何も感じないのだが？」

「使い方があるんだ。と言っても、念じるだけなんだけどね。簡単すぎて、慣れると無意識に発動してしまうこともあるぐらいだよ」

「念じる？」

「うん。まずは昨日、最初に触れた背中部分を意識してみて」

セシルに言われたとおり、背中の肩甲骨の間あたりに意識を向けてみる。微かにだが、軽い火傷をした直後のような熱さを感じた。

「何か少し熱いような？」

「それを動かすよう念じてみて。後は勝手に流れるはずだから」

エリスが少し意識するだけで、その熱が揺れ動いたような気がし

た。背中にあった熱が広がり、川に流れる水のような感覚で全身に行き渡っていく。

自分の腕を見ると、昨日セシルに見せて貰った文字列のような模様が、淡く光って浮かび上がっていた。

「これは……」

思わず自分の手を握りしめてしまう。

全身が火照り、奥底から力が漲ってくるようだった。自分の体が驚くほど軽く感じる。今までは、何か重たい病気でも煩っていたのではないかと思うほどだ。

試しに軽く跳躍してみると、自分の身長ぐらいなら軽く飛び越えられそうなほど体が浮いた。かつてなら、全力で跳躍してもこの半分も飛べなかつたはずである。

「凄いなこれは……」

着地したエリスが思わず感嘆の声を上げると、セシルは苦笑してしまった。

「まだ刻んだばかりだから、少ししか効力を発揮してないんだけどね」

「これはまだ完全じゃないということか？」

「うん。完全に馴染むには半年ぐらいかかるかな。馴染めば馴染むほど大きな力を引き出せるようになるよ。今はまだ約半年分の内の約半日分って感じかな」

「なっ……」

さすがに絶句した。

セシルの説明の内容に、驚愕を通り越して畏怖さえ覚える。これ

でもまだ欠片も力を発揮していないというのだ。これが完全になれば一体どれくらいの力になるのか想像もできない。

だが、それがいずれ自分の力になるのだ。

エリスは感慨深い思いで自分の両手を眺めた……と、そこであることに気がつく。

体に漲る力。それと同様に、体の中でいつも以上に漲るものがあった。

それは>魔紋くに循環する熱とは違う経路で体に循環するもの。

エリスがサクヤと会ってからずっと錬磨し続けてきたもの。

サクヤが経脈と呼んでいる道筋に循環する>気くが、エリスの中で荒れ狂っている気がした。

エリスはあることを確かめるために、鍛錬場を見回す。

その様子に、セシルが首を傾げた。

「どうしたの？」

「ちよつと試したいことができてな。あれでいいか」

エリスが目を付けたのは、鍛錬場の地面に刺してある丸太。普段はそれに木剣を打ち込むのだが、今日は離れた場所から右手の指先を二本向けた。

いつもは剣を握った上で、それを振らないとできなかった技。その威力を>気くの大きさだけに任せて、静止した指先から放つ。

不可視の衝撃が丸太を叩き、ゴンツと派手な音を鳴らした。

以前の自分が、本気で木剣を打ち込んだ時よりも大きい音である。

「ふむ。>遠い当てく改め>指弾くと言った所か」

「どうやら、エリスが感じたことは気のせいではないらしい。>魔紋<はエリスの>気<の力まで増幅してくれるようだった。

これまで懸命に鍛錬してきた技の予想外の進化に、思わず顔がニヤけそうになってくる。今日までの努力は無駄ではなかったのだ。

「……………何それ？」

ポツリと呟かれた声。

気がつくと、セシルが呆然とした顔をして、エリスの指先と丸太を交互に見ていた。

破れた左裾から覗く肌に>魔紋<が浮かび上がっていたので、おそらくは視たのだらうと思う。

その上でセシルは理解しきれていないのだ。

エリスはそんなセシルの疑問に、軽く答えた。

「>気<と呼ばれるものだそうだ。鍛錬すれば、さつきみたいに衝撃を飛ばしたりと色々できる。」

「それは鍛錬すれば誰でも使えるものなの？」

「私はそう聞いているが……………」

と、そこまで言った所で、エリスは猛烈にセシルに迫られた。

気圧されたエリスの右手を、セシルが両手で包み込むように握ってくる。丁度、昨日の酒場でエリスがやったことの反対の構図。

セシルの手の感触に、頬が熱くなるのを感じた。

その変化を、セシルに凝視されている状況にさらに顔が熱くなる。結局、エリスは真っ赤になってしまった。

「なら、僕にもそれ教えて！」

「あ、ああ……」

頭に血が昇って思わず了承しかけたエリスだったが、慌てて頭を振って考え直した。

それには、ある人物に了解を得る必要がある。それに、>気くの扱いを教えることに関して、彼女のほうがずっと適任だろう。彼女に比べれば、自分もまだまだ鍛錬の途中なのだから。

エリスはそのような旨を、セシルに伝えた。

「適任者？」

「ああ、サクヤのことだ。元々、>気くはサクヤの祖国に伝わる技だからな」

「サ、サクヤかあ……」

何とも言えない渋い顔をするセシル。

エリスは何となく、これからセシルには厳しい試練？が待っている気がした。

## 第七話 <気>

昼下がりの鍛錬場。

一本の糸が張り詰めたような空気が漂う中、サクヤとエリスの二人が互いに向かい合って対峙していた。

エリスは>魔紋くを発動した状態で、模擬剣を手に右足を前にする正眼の構え。

一方のサクヤは無手のままである。さらには服装も構えも、いつもの使用人然とした佇まいのままだ。

エリスが隙をうかがうように間合いを横にずらしても、サクヤは微動だにしない。

やがてエリスがサクヤのやや左横へと立ち位置を変えると、剣の間合いへと切り込むべく、地面を蹴った。

その直後に、サクヤの左手が無造作に振られる。どこに隠し持っていたのか、鉛色をした短い棒状のものなどが複数、エリスの顔に向かって放たれた。

「喝！」

エリスの咆哮と共に、前方の空気が振動したように感じた。それによって、飛来してきたものを全て弾き飛ばす。だがその中に、煙幕を込めた小玉が隠れていたようだ。破裂して小さく広がった煙は、エリスの視界を奪ってしまう。

その隙に、サクヤは音もなくエリスの死角に体を移動させていた。いつの間にか逆手に持っていた短い模擬刀で、エリスに切り込む。

が、煙のわずかな動きでサクヤの位置を察知したエリスは、それを強化された反射神経だけで迎え撃った。

ギーンっと、模擬剣と模擬刀の衝突する音が鳴る。

一瞬で打ち合いは不利だと判断したサクヤが、その反動を利用して後ろに跳び、間合いを空けようとした。

だがエリスはそれを許さず、間髪入れずにサクヤに切り込む。

エリスの模擬剣がサクヤを捉えたと思われた時、その体が塵気楼のようにブレた。模擬剣はサクヤの体を素通りし、地面へと叩きつけられる。

気がつくと、サクヤの体はエリスの丁度右横にあった。隙だらけになったエリスに、今にも模擬刀を叩き込まんとしている。

しかしそれよりも速く、エリスは模擬剣を地面から持ち上げ、振り抜いた。

初動が大幅に遅れていたにも関わらず、強引に臂力だけでサクヤの一太刀を上回る速度の一撃。

サクヤはそれを先読みしていたのか、一太刀の初動をフェイントにしつつ、屈んで回避した。回避しきれなかった髪が数本、宙を舞う。

と同時に、サクヤはエリスの軸足を払った。無理に剣を振った直後であるエリスは、それを回避できない。エリスが為す術もなく体勢を崩す。

そこで、はじめてサクヤが声を発した。

「失礼します」

ゴツと鈍い音を鳴らして、サクヤの足がエリスの顎を打ち上げた。エリスが少し宙を飛んだ後、地面に背中から落ちて勝負ありである。

その戦いを、セシルは鍛錬場の端で視ていた。

いくつか>気<を使つたらしい技があつたが、その原理を観測することができない。>気<というものをセシルは全く知らないので、体内のどこの何を観測すればいいのかわからないのだ。

セシルがそれらを観測するには、まずは>気<のことを正しく知り、自分自身で>気<を実感する必要があつた。

……ちなみにサクヤが足を振り上げた時、スカートの下に隠していた暗器と一緒に気まずいものを見てしまった気がする。

「女性用の禪です。私の祖国の下着なんですよ」

「人の心の中の的確に答えなくてくれないかな……」

「いえ、かなり分かり易く『見てしまった』という顔をされておりましたので」

「そ、そうなんだ……」

そういえば、似たようなことを外界の女王にも言われた気がする。自分はそんなにも顔に出てるのだろうか？

「がっかりされましたか？ この国の女性は、下に何も履きませんので」

「え？ 本当に？」

「いや、普通に履いてるからな」

サクヤの嘘を信じかけたセシルに、エリスの助け船が入った。

「むう、今の私ならば勝てると思ったのだが……」

少しだけ気を失っていたらしいエリスが、蹴られた顎をさすりながら起き上がる。

>魔紋<で生身の防御力も上がっているので、そこまでのダメー

ジを受けないはずなのだが、最後の蹴りも>気<の何かがあったのだろうか？。

悔しそうにしているエリスに、サクヤが痺れて微かに震える右腕を見せた。

「たった一合、剣を合わせただけでこれです……驚きました。>魔紋<とは凄まじいものですね。昨日まで弱点だったはずの速度と膂力が、今ではむしろ強力な利点になっています。これでもまだ本来の効力の片鱗も見せていないとは……セシル様の話が本当であれば、明日のお嬢様にはもう私は勝てないかもしれません」

サクヤはそう言うが、セシルは今日の時点でもエリスが負けるとは思っていなかった。現に、単純な力と速度はエリスのほうが上である。それを覆す要因の一つとなった>気<は、やはりどうしても学びたかった。

だがしかし、サクヤに頼むのは凄く嫌な予感がする。でも先ほどの戦闘を見て、是非教えを乞いたいとも思ってしまった。その欲求が嫌な予感を上回り、セシルはおずおずと口を開く。

「それで、サクヤ。ちょっと頼みたいことがあるんだけど……」

「はい、劣情を催しましたか？私でよければ」

と、服を脱ごうとするサクヤにセシルは慌てて声を張り上げた。

「違うよ！ どうして突然そうなるの!？」

「私の下着をご覧になってから、何やら堪えておられる様子でしたので」

「えっ、……あ」

そう言われると、戦闘を見てからウズウズしていた様子はそう見えるかも？

一瞬黙ってしまったセシルを見て、何やら誤解したエリスが顔を赤くして咳払いをした。

「セ、セシルも男なのだ。いや、男の人はそうだと聞いたことがあるが、そこまで唐突に我慢できなくなるのか。書物によると、理性を失ったその姿は狼のようだと聞く。セシルもやはり、体が毛皮に覆われるのか？」

さりげなくエリスが間違った知識を言い出す。

「だから、違うよ！ いや、たしかにそういう顔をしてたかもしれないけど誤解だよ！ あと、そんな変身もしないから！」

そう訴えるセシルに、サクヤが無表情のまま、そつと頬を染めた。

「誤解からはじまる過ち……ということもあります」

「はじめないですよ！ もっと自分を大切にしてください！」

「ご安心下さい。私は初めての方を一生の伴侶にとすると誓うぐらいいには、自分を大切にしております。それでは、軽く一発……」

「全然軽くないからね！ 人生を左右してるからねそれ！」

「まあそれは冗談としまして……」

頃合いを見て、満足したサクヤが仕切り直してくれる。

それにしても、このサクヤの冗談は際どすぎるとセシルは思う。もし本当に自分がその気になったら、サクヤはどうするつもりなの

だろうか？・・・いや、自分がその気にならないのも見越してのことなのか？やはりヘタレだと思われてそうだ。

少し落ち込んだセシルに、サクヤは言葉を続けた。

「それで、頼みたいことは何ですか？」

「僕にも>気くを教えて欲しい」

「いいですよ」

即答だった。

何やらずつと嫌な予感に悩まされていただけに、呆気にとられてしまう。が、やはりサクヤの言葉は続きがあった。

「もちろん、いくつか条件がありますが」

「・・・」

やっぱりそうきたか、とセシルは思った。

よく分からない緊張感に苛まれ、ゴクリと喉が鳴る。

どんな酷い条件を出されるのかと身構えていたが、サクヤが最初に提示した条件は意外と普通のものだった。

「まずは一つ。>気くは私の祖国の民が対魔術師用に編み出した技であり、各流派で秘伝とされているものです。故あってエリスお嬢様にはお教えいたしましたが、みだりに広めて好ましいものではありません。なので私の許可無く誰かに技を教えることを禁じます」

「うん、約束する」

セシルは素直に頷いた。できれば>気くという概念を外界へ帰るための手土産にしたいのだが、それはまた折を見て相談しようと思う。

それよりも、まずは自分が学びたかった。> 気くはセシルが内界に  
来た本当の目的の足がかりになるかもしれないのだ。

あまり変態的な条件が飛び出してこないのを祈りつつ、セシルはサクヤの次の言葉を聞いた。

「次に二つ目。これからは、セシル様に> 気くをお教えするのに時間を割くことになりましたが、私には使用人の仕事もございます。です  
のでセシル様がお屋敷に滞在なされる間、私の指示に従って仕事の一部を手伝って頂くうかと思えます。よろしいですか？」

「うん、いいよ」

これも、了承する。むしろ教えて貰えるのだから、それぐらい当然  
だろう。セシルには払えるお金がないのだ。残りの条件にもよるが、これだけでは申し訳ないぐらいである。

「そして最後の条件です」

もったいぶったように一呼吸置くサクヤに、セシルは緊張感を高めた。

とうとうくるのか！？ きちやうのか！？

半ば覚悟を決めていたセシルに、サクヤは最後の条件を口にした。

「セシル様が今お召しになっている服をこちらでお預かりし、代わりの服をご用意させて頂きたく思います。左裾の修繕もさせて頂きたいのですが、よろしかったですか？」

「え？ それは……」

サクヤの申し出に困惑する。その条件は、むしろセシルにばかり

利益のある内容であった。

「私が気になる、というだけの話でございます。それを勝手に修繕したいと思い、条件にしました。これはあくまで私の為の条件ですので、遠慮することはありません」

「サクヤ……」

セシルはサクヤの心遣いに感動した。

それと同時に、サクヤの人物像を見誤っていたことを反省する。

変な発言に惑わされていたが、彼女の本質は優しさにあった。お人好しと言っても良い。

そのうち誰かに騙されるのではないかと心配になるほどに。

セシルは彼女の厚意に、溢れる笑顔で答えた。

「うん、ありがとうサクヤ」

「お礼の必要はありません」

サクヤがわずかに視線を逸らす。意外と照れ屋なのかもしれない。エリスが何か言いたそうな顔をしていたが、この時は気にならなかった。

次の日の早朝、セシルは支給されたメイド服を見て、この時のことを激しく後悔した。

## 第八話 ジエディ

> 魔紋くを刻んでから二日目の朝。

今日はどのくらい強くなっているのか昨晩は期待に胸を膨らませていたエリスだったが、起きて朝一番にセシルの姿を見て全て吹き飛んでしまった。

黒に近い濃紺のワンピースに白いエプロンを合わせたエプロンドレス。そんな女性用のメイド服を着たセシルが、丁度目が覚めた頃合いにエリスの部屋へとやってきたのである。

しかもそのメイド服は特別製のようで、通常よりも袖とスカートの部分が短くなっていた。その頭には白いフリルの代わりに、何かの獣の耳を模したものが被されている。

おそらくサクヤの仕業だというのは分かった。……セシルには悪いが、かなり似合っていると思う。特にその獣の耳のようなものが、セシルの可憐な顔立ちによく合っていて、思わず抱きしめたくなるような愛らしさを演出している。まさに愛玩用の獣のような感じ。

どこか虚ろな目をしているセシルに、エリスはベットから上半身を起こした体勢で話しかけた。

「セ、セシル？」

「おはようじゃ」

「……じゃ？」

「語尾に『じゃ』を付けてエリスの世話をするように言われたじゃ。条件にあった仕事の手伝いじゃ」

「あ、ああ」

珍妙な口調に戸惑いながらも、エリスはベットから出ようとして……気がついた。

思わずベットのシーツを持ち上げて、意味もなく体を隠してしま  
う。

「セシル？ 私は着替えたいのだが……」

「でも、着替えを手伝って言われたにや」

「なっ！」

サクヤは何を考えているのだろうか？ いくら外見が女性っぽくても、セシルは男なのだ。流石に着替えを手伝わせるのは恥ずかしい。

「じじじ、自分で着替えるからいい」

「そうかにや」

セシルが持つてきた着替えを受け取ると、エリスは顔を俯かせながら頼んだ。

「すまないが、しばらく向こうを向いててくれ」

「分かったにや」

頷いて、素直に背中を向けてくれるセシル。

その背中を見ながら着替えはじめるも、妙にやりずらかった。見られてはいないはずだが、やはりこんな時に同じ空間にいられると緊張するのだろうか？ 胸に手を当てると、何だかいつもより少しだけ自分の鼓動が速い気がする。

エリスは首を傾げつつも全ての着替えを終え、哀愁を漂わせているセシルの背中に声をかけた。

「着替え終わったぞ。セシルも大変だな」

「……サクヤに預けた元の服が帰ってこないにや」

言いながら、セシルは少し目尻を潤ませる。

成る程、三つ目の条件もやはり罨だったのか。昨日、満面の笑顔を浮かべていたセシルは気がついてないようだったが、あの時のサクヤはほくそ笑んでいたのだ。

でもセシルのそれは似合いすぎていて、エリスの中からサクヤを止める気が失せていたりする。

今、大きな試練に立ち向かっているセシルを心の中だけで応援しつつ、エリスは自分の部屋を後にしようとした。だが、部屋を出る前にもう一人来訪者が現れる。

「た〜だ〜い〜ま〜。エリスちゃん、元気してたあ〜？」

やたら間延びした声で部屋に入ってくる人物を、エリスはよく知っていた。

やや癖のある長い金髪に、眠そうな碧眼。その大きな胸が重いとしても言いたそうに、高い身長を怠そうに猫背にした女性。

エリスの姉のジエディ・ムーアである。

「姉さん！？ いつ帰ってきてたのですか？」

「今朝帰ってきたばかりよ〜」

どこかふらふらとした足取りでエリスの部屋のベットに近づくと、ジェディはそのまま倒れ込むようにベットに寝転んだ。

初対面の人には疲れているのかと誤解されやすいが、姉はいつもこうなのだ。

だがこれでも、二一歳という若さで宮廷魔術師長の一人にまで上り詰めた魔術の才媛である。

最近は宮廷魔術師の研究塔に籠もっていて、滅多に屋敷に帰ってくることはない。

そんな姉がエリスのベットでごろごろしていたかと思うと、何かに気がついて顔を上げた。

「あれ〜？ 何か知らない子がいる〜？」

眠そうな顔で首を傾げるジェディに、エリスはセシルを紹介していなかったことを思い出した。

「ああ、彼は二日ほど前に友人になった……」  
「セシルって言うにゃ」

……正直、今はその口調を辞めて欲しいのだが。

「可愛いけど、変わった口調の女の子ねえ。そっか〜エリスちゃんのお友達か〜。私はジェディ、エリスのお姉さんよ〜、よろしくね〜」

「……よろしくにゃ」

色々と誤解が生じている姉に、諦めた顔で応じるセシル。

その格好がメイド服なだけに、性別の誤解を解くのを躊躇ったよ  
うだ。

また哀愁を漂わせるセシルを置いて、ジェデイの言葉はまだ続いた。

「それにしても、エリスちゃんにお友達ができたのは嬉しいわ。仲良くしてあげてね。」

「これでもエリスちゃん、とっても泣き虫で寂しがりなのよ。」

「ね、姉さん……。」

そういうのは本当に気恥ずかしいので辞めて欲しい。

「そうなのじゃ？」

「そうよ、いつも私のあとをトコトコ付いてきて。少し離れるとすぐ泣いちゃうの。可愛かったわ。私が魔術学院に入学することになった時は大変だったのよ。」

「そ、それは六年以上も前の話で……。」

「それが今ではすっかり男みたいな口調になっちゃって。ドレスも全然着てくれなくなっただし。」

「以前は違ったのじゃ？」

「昔は私のこともお姉様と呼んでくれたのよ。それに……。」

そこで、エリスは二人に背を向けた。

何だか非常にいたたまれない空間が部屋にできてしまっている。

「私は朝の鍛錬に行ってくる。」

そう言って早々にこの空間から脱出を試みたエリスだったが、そこで思い出したようにジェデイがエリスに声をかけた。

「あ、そうだ。今日はエリスちゃんに頼みたいことがあったの。」

ジエデイがベットから起き上がりながら言葉を続ける。

「一年前から不定期に、王都に住んでる人が行方不明になる事件があつてね。その調査を担当していた宮廷魔術師が一人、二日前から帰ってこないのよ。それで色々あつて、私もその宮廷魔術師の捜索に加わることになつただけよ」

軽そうに喋るジエデイだが、その内容はわりと深刻なものだった。

「もし行方不明になつた宮廷魔術師が、調査していた事件の犯人、もしくは犯人達にやられたのなら、その中に強力な魔術師がいると思うの。それで、もし犯人を捕まえることになったら、その時にエリスちゃんに協力して欲しくて。少し危険だけど私もついてるから大丈夫よ」

宮廷魔術師をどうにかするのが可能なのは魔術師か魔獣のみ。だからジエデイは魔術師が関わっていると考えたようだ。

そしてエリスの膨大な魔力は、魔術に対して魔獣を凌駕する抵抗力がある。つまり、その魔術師を捕まえるには最適な人材なのだ。

「なるほど。そういうことなら手伝います」

珍しい姉からの頼みである。エリスにとっては断る理由はない。

エリスが頷くと、ジエデイは小さく堪えるような笑みを浮かべた。その顔を、エリスは良く知っている。それは、ジエデイがエリスに贈り物や楽しい知らせを持ってきた時に浮かべる顔だった。

要するに、エリスが喜ぶ様を想像してほくそ笑んでる時の顔である。

ジェディのそんな顔に、もしかしたら本題は別にあるのかとエリスは思った。

そのエリスの疑問は、次のジェディの言葉で解消されることになる。

「あと王都内だし可能性は限りなく低いけど、宮廷魔術師が魔獣にやられた可能性もゼロではないのよね。だから念のため、騎士団本部へ報告しに行こうかと思うの。エリスちゃんは協力者になるんだから、一緒に来てもいいわよ？」

「騎士団本部……もしかして、リチャード殿に会えるのか!？」

「そうよ。ふふっ、エリスちゃん大ファンだものね。」

ジェディの言葉に、エリスは思わず両手を合わせた。

明らかに目の色を変えたエリスを見て、セシルは首を傾げる。

「リチャード？」

「あら〜？今時珍しいわね。この国でリチャードを知らないなんて」

セシルのその言葉で、エリスの何かにスイッチが入った。

「イルレオーネ守護騎士団の団長だ。国王から「名誉騎士」の称号を賜った稀代の英雄。とにかく凄い人でな、その実力が初めて頭角を現したのは十年前で」

「待つにゃ」

話の途中で声を割り込ませたセシルに、エリスは首を傾げた。

「何だ？」

「その話はどれくらい続くにゃ？」

「ふむ、だいたい五時間あれば十分だ。大丈夫、きつと時間を忘れるぐらい楽しい」

「……」  
「き、騎士団本部に行くのは午後だから。話が終わったら起こしてね」

と、ジェディはエリスのベットに入ってさっさと寝てしまう。

姉さんも一緒に話したかったのだが……

見ると、セシルはその場で正座をしていた。その顔が、決死の覚悟を決めた騎士のように凜々しくなっている。

うむ、リチャード殿の話にそんなに興味があるのか。

「好きにするにゃ」

「分かった」

エリスは思う存分、リチャードの伝説を話す……ことはできなかつた。

その一時間後ぐらいにサクヤが朝食に呼びに来たのである。

目尻に涙を浮かべて悔しがるセシルに、エリスは機会を見て話してやるつもりだった。

## 第九話 騎士団本部

王都の北地区と西地区の間に位置するように構えられた、イルレオーネ守護騎士団の本部。

敷地内の、騎士達の宿舍も含めた建築物に華やかな装飾などはなく、まさに質実剛健を体現したその外装は、王都に済む住人達の騎士団人気を上げる一助にもなっていた。

敷地の外から見る騎士団本部は、いかにも民衆が好きそうな清貧な印象であるのは間違いない。だが、それも敷地内に入り建物の内装を見るまでである。

少なくとも、団長の元へと案内されて入った執務室は、内界の物の価値が分からないセシルでも、贅沢そうな印象をうけた。

いかにも高そうな絵画や骨董品などが過剰なぐらいに飾られ、これまた高そうな調度品が所狭しと棚に詰まっているその様は悪趣味ですらある。

床に敷かれた絨毯も、踏んだ感触からして相当な高級品だろう。その赤い色彩に負けじと、部屋の至る所に赤の装飾が目立つ。後から聞いた話によると、赤はイルレオーネ守護騎士団の象徴なのだそうだ。

エリスから一時間に渡って聞かされた男と、この部屋の主とがいまいち結びつかなかった。まあ英雄譚というものは、往々にして過剰な尾ひれがついてしまうものだし、案外本人は俗物なのかもしれない。

だが、セシルの隣でガチガチになりつつも目を輝かせているエリスには、そんなものは気にもなっていないようだった。

この分では、現在進行形で行われているジエディとリチャードの

会話も耳に入っていないだろう。

ちなみに、ここにはセシルまで同行する必要はなかったのだが、何故だかサクヤの命令でついて来ることになった。理由を尋ねるとはぐらかされたので、何かあるのかもしれない。

今のセシルとエリスは、ジェディがしている仕事に関する話が終わるのを待っている形になっていた。その間、エリスの視線はずっと同じ人物に注がれている。

その視線の対象となるリチャードなる男は、部屋の奥の窓際に位置する執務機の椅子に腰かけていた。後ろに流した金髪と、薄茶色の双眸をした壮年の男。無精髭が妙な愛嬌を醸し出しているが、それ以外はこれと言って特徴のない人物だ。

どうにも英雄という感じではない。

むしろ、その隣に控えている若い男のほうが存在感があった。短い黒髪に、目尻の尖った琥珀色の双眸をした痩身の男。思いやりの欠片もなさそうな冷たい無表情を顔に貼り付け、一言も言葉を発することなく佇んでいる。

彼は一年前に入団した騎士で、名をサイラスと言うらしい。その並外れた実力から異例の速さで副団長になった男だそうだ。その腕は団長であるリチャードと互角であるとか何とか。あくまでエリス談であるが。

セシルにとって、その二人には全然興味を持てなかった。剣の達人だとは言っても、所詮は魔力を持たない人間である。が、暇な時間が続く内に少し考えを改める。

もしかしたら、サクヤの>気くのような秘技は持っているのかもしれない。

そう思ったのだ。

今のセシルはいつもの服ではなく、肌の露出が多めのサクヤ特性メイド服なので、魔紋<の光が見えてしまう。別に見られて困るものでもないが、いちいち何事かと聞かれるのも面倒くさい。

なので、一瞬だけ、魔紋<を発動させるようにして、その二人を視た。

そこである意外なものを視てしまう。

「にゃ？」

「まだ続けるのかその口調……」

若干緊張が解けたらしいエリスが、ジト目でセシルに視線をやる。そんなエリスの様子を見て少し考えた後、セシルは首を横に振った。

「なんでもないにゃ」

「？」

訝しむような顔をしたエリスだったが、リチャードとジエディの話が終わりそうな気配を感じ取ったようで、再び緊張した顔に戻った。

「承知いたしました。ではこちらからも数名、その調査に派遣しましょう。他の騎士達も、要請があればすぐに出動できるようにしておきます」

「いいんですか？警戒水準を上げてもらうだけのつもりだったんですけど、まさか騎士を貸してくれるなんて。こちらは助かりますけど〜」

「例えそれがどんなに小さな可能性でも、王都内に魔獣が侵入して

いる可能性は見過ごせませんよ。まあしばらくの間、部下達には多少の睡眠時間が削れるのを我慢してもらいましょうか」

「はあ、流石ですねえ。有難うございます」

感嘆の声を上げて頭を下げるジエディ。

「ではよろしくお願いしますね」

「はい。今日はご足労くださり、感謝します」

どうやら話が終わったようだ。

見送るつもりなのか、リチャードが椅子から立ち上がった所で、エリスが声を上げた。

「そ、その！リチャード殿！」

「ん？」

名前を呼ばれたことで、リチャードの視線がエリスに向く。そのことに少し怯んだようだが、エリスは懸命に言葉を続けた。

「私は、貴方に憧れて騎士を目指しています！」

「ほっ」

エリスの言葉に満更でもなさそうなりリチャード。というよりか鼻の下が伸びてる。やっぱりこいつ俗物なんじゃとセシルは思った。

「貴方は覚えておられませんでしょうが、私は一度、故郷で貴方に助けられたのです。その時の、人々の憧憬を集める貴方の姿は私も眩しく映りました」

その時のことを思い出すように、一瞬だけ遠い目をするエリス。

だが次の瞬間には、意志の強い眼差しでリチャードを見据えていた。

「私も貴方のようにになりたい。人の憧れとなるような騎士に」

それは強い決意の言葉。

だが、エリスのその言葉に応えたのはリチャードではなく、その時まで沈黙を保っていたサイラスだった。

「おい、小娘」

「え……」

予想外の人物から声をかけられ、戸惑うエリス。それに構うことなく、サイラスの言葉は続いた。

「うちに、物見遊山の弱者はいらん。民衆の人氣が欲しいだけなら劇団にでも入れ」

「なっ……」

サイラスの辛辣な言葉に絶句するエリス。だが、それは凶星なのかもしれないとセシルは思った。

なんとなくだが、エリスの言動は人を守るためというよりも、人氣が欲しいから騎士団に入りたがってるように聞こえたのだ。

サイラスもそれと同じことを感じたようだ。ただし、セシルが感じたものとは少し意味合いが異なるかもしれないが。

「我々が必要とするのは魔獣に対抗できる力だけだ。そこに品性や生い立ちは問わない。だからこそあのような採用方法を探っている」

それはその通りなのだろう。参加者に制限のない大会の上位者を採用するやり方は、要するに勝ちさえすれば入団できるのだ。

騎士団が持つ清廉潔白な印象は、一番目立つ場所にいるリチャードの指導と民衆の色眼鏡によるものであって、団員達全員がそうであるとは限らない。

むしろ荒れくれ者のほうが多いんじゃないかと、セシルは酒場にいた禿頭を思い出した。

何も言い返せず俯いてしまったエリスに、さらにサイラスが口を開いた所で、リチャードの制止が入った。

その顔に困ったような苦笑を浮かべながら、頭を搔いてぼやく。

「全くお前は、これだからいかん。お前の言うとおり、騎士団は強者であれば歓迎する。だからこそ、その動機だって何でもいいだろう」

リチャードはエリスに歩み寄ると、慰めるようにその頭に手を置いた。

軽く腰を屈めて、エリスと視線の高さを合わせる。

「それに、民衆の人気だって大切なのだぞ？格好いい、あんな風になりたい、と思わせる理想の正義の騎士。それを体現しながら他者を魅了することで、感化された者は良き行いを模倣する。騎士を目指す者だって増えるだろう。それはこの国の平和への一助ともなる。憧憬を集めることは、悪いことではない」

「リチャード殿……」

微かに目を潤ませていたエリスが顔を上げる。

それに、リチャードが爽快な笑顔を浮かべて見せた。

「私は君の入団を心待ちにしている」

「……はい……」

嬉しそうに返事をするエリス。

だがセシルは、今にも攻撃魔法を仕掛けそうな勢いでサイラスを睨んでいるジエディに、気が気でなかった。

サイラスもサイラスで、相手が魔術師だというのに全然怯んだ様子もなく、むしろ睨み返している。

まさに一触即発の状態であったが、それはエリスの声で簡単に霧散した。

「姉さん？」

「はい。帰りましょう、エリスちゃん」

いつもの眠そうな顔に戻ったジエディが、エリスの手を引いて引き寄せた。

エリスの頭を、その胸に埋めるようにして抱きしめる。

「ふええばん！？（姉さん！？）」

「じゃあ私達はこれで」

「ああ、気をつけて」

見送るリチャード達の視線を背中に、セシル達は執務室を後にした。

「もう、腹が立ったわあ、あの男。うちのエリスちゃんに何てこと言っのかしら」

騎士団本部の敷地内から外に出た所で、ジェディが不満そうに唇を尖らせた。

「姉さん、いい加減重いんですが……」

ここまでの道中、ずっとエリスはジェディに抱きつかれたままである。ジェディが上から寄りかかるような形になっているが、エリスは口で言うほど迷惑そうには見えない。むしろ苦笑しながらも、どこか嬉しそうだった。

おそらくは、それがジェディなりの慰めであり、エリスはそのことをよく理解しているのだろう。

「あいつは絶対、元犯罪者よ。悪そうな顔をしてたもの。それにきつと騎士団内でも孤立してるわね。ベットに虫を入れられたり、靴に小さな刃物を仕込まれたりして、陰湿なイジメを受けてるはずよ。それで追い込まれすぎて不能になってるんだわ。だから女の子に酷いことが言えるのよ」

「希望が入り交じりすぎだにゃ」

「だがりチャード殿はやはり、立派な方だった」

声をかけてもらった場面を思い出したのだろう。エリスが目を輝

かせながら、祈るように手を胸の前で合わせた。

もしかして、エリスのがむしやらかな原動力とは、リチャードへの過剰な憧れからきているのだろうか？

その横顔を眺めながら、そんなことを思う。

「……………」

「ん〜？ どうしたの〜？」

鋭く何かを感じ取ったジエディに、セシルは誤魔化した。

「仲が良い姉妹だと思ってにや」

「あら〜？ 羨ましくなっちゃったの〜？」

そう言って今度はセシルの手も引き、その豊満な胸の中へと誘った。

ジエディがエリスとセシルをまとめて抱きしめる形になる。

「ね、姉さん！ これは……………」

「あ、歩きづらいにや……………」

「ふふっ、両手に花とはこれのことね〜」

上機嫌のジエディだが、腕の中のセシルとエリスはそれぞれどこではなかった。

エリスはセシルが男だと知ってるためか、不意に密着させられて真っ赤になってしまっている。セシルも、ジエディの胸の感触やらエリスの体温やらを感じて頭に血が昇ってしまっていた。

「……………」

「……………」

「  
」

沈黙してしまった二人を気にせず、ジエディは鼻歌を歌いながら歩み続ける。

その三人の塊の行軍は、屋敷に着くまで続いた。

## 第十話 英雄志願者

「我が剣の錆びにしてくれる！ ……普通すぎるか？汚れし血よ、我が剣の錆びとなれ！ ……何か嫌だな。我が志、その身に刻まれよ！ ……うーん、何かが違う。我が剣の錆びとなりて、栄光の礎となれ！ ……お、これはいいんじゃないか？」

その姿を探して、夕焼けの色に染まる鍛錬場に来たセシルだったが、そこには何とも声をかけにくいことをしているエリスがいた。グフフ、グフフと奇妙な笑い声を上げながら剣を構え、よく分からない練習が続けられる。

これは見なかったことにして、そつとこの場を去ってあげるべきだろうか？

そう悩んで立ち竦むと、先に向こうがセシルに気がついてしまったようだ。

「セセセセセセ、セシル！？ いつからそこに！？」

「我が剣の錆びに、あたりからかな」

「× ……！？」

案の定、顔を真っ赤にさせてエリスが狼狽える。そんなに恥ずかしいのならやらなきゃいいのに。

「声をかけてくれたっていいじゃないか……」

エリスが抗議の意を示すように唇を尖らせた。

「凄く楽しそうだったから邪魔しちゃ悪いかなと思って」  
「うう、…頼む。このことは誰にも言わないでくれ……」

懇願してくるエリスに、セシルは苦笑しながら容赦のない事実を伝えた。

「いや、みんな知ってると思うよ……」

「え？」

「だって、この鍛錬場の位置からして屋敷のどこからでも丸見えだし……あれだけ声を張り上げてたなら、少し耳を澄ませば屋敷でも聞こえるんじゃない？」

「はづう」

どうやら見られていないと思っていたらしいエリスが、恥ずかしさのあまりその場で蹲ってしまった。

しばらくその姿勢のまま唸り続けていたかと思うと、ふと気がついたように顔を上げる。

「そういえば、あの妙な口調と獣のかぶり物は辞めたのだな」

「うん。サクヤがもう飽きたからいって」

以前の服が帰ってこないののでメイド服はそのままだったが、あの珍妙な口調で喋る命令は解除されていた。

次を考えておくとか不吉なことを言っていたが、今は考えないようにする。

その代償として、>気<の初步は教えてもらえたと、セシルの能力で>気<の動きも観測できるようになった。

なので>気<の技の実演を見ればだいたいその仕組みが理解できる。セシルが騎士団本部に行く前に、いくつかの技をサクヤに見せてもらってそのことを確認した。この分だと、独自の技も開発でき

そうだとセシルは感じている。

エリスは立ち上がると、コホンと一つ咳払いしてから改めてセシルのほうを向く。

「それで何だ？」

「ん？」

「私に用があったわけではないのか？」

そうだった。それで鍛錬場までエリスを探しに来たのだ。

無意識に話題を先延ばしにしようとしていたのを自覚して、セシルは頭を掻いた。

「うん……そうなんだけどね……」

「？」

言葉を濁すセシルに、エリスが首を傾げた。

そんなエリスを尻目に、セシルは少し顔を俯かせて考える。

セシルは迷っていた。

あることを、伝えるべきかそうでないか。

屋敷に帰ってから、すぐに出かけて確認してきた事柄。

伝えれば、彼女の何かを壊してしまうかもしれない。逆に、何かが改善されるのかもしれないし、結局は何も変わらないのかもしれない。

それを伝えることでエリスがどうなるのか、セシルに予測できなかった。

だが、きっと大きな影響は与える。これは勘でしかないが、エリ

スの生き方の根幹に関わっている気がするのだ。

もし、それがエリスに悪影響しか及ぼさないのなら、秘密裏にセシルが処理してもいい。

このまま放っておくと、今セシルが伝えなくてもいずれエリスの耳に入りかねない。

セシルが処理しても、多少の状況の変化は免れないかもしれないが、事実そのままを知ってしまうよりはいくらかマシだ。

でも、もしかしたらエリスに感じる危うい何かが改善するきっかけになるかもしれない。

それらを判断するには、セシルはもっとエリスのことを知る必要があった。

「一体どうしたんだ？」

急に黙り込んでしまったセシルの様子に、エリスが心配そうに顔を覗き込んでくる。

そのエリスの碧眼の双眸を見て、セシルは口を開いた。

「エリスは何でイルレオーネ守護騎士団つてところに入りたいの？」  
「……」

セシルの不意の質問に虚を突かれたのが、エリスは目を丸くして沈黙する。

だがすぐにそれは、困ったような苦笑に変わった。

「もしかして、騎士団本部で私が言われたことを気にしているのか？」

「うーん、そういうことにもなるのかな？」

「あれは凶星だ」

視線を逸らしながら言い切る。

それは薄々セシルも感じていたので、驚きはない。

エリスはセシルから顔を背けたまま、言葉を続けた。

「私が民衆の人気を欲しがっているのは事実だ。少なくとも、私があの騎士団に入りたいと思った動機に、他者への慈悲や正義感はないかった」

「……」

自嘲のような声色で語るエリスに、セシルは沈黙した。その沈黙をどう受け止めたのか、エリスが上目遣いでセシルを見る。

「……私を軽蔑したか？」

「うっん、全然。僕は別に善人じゃないし」

セシルがそう言うと、エリスにめちゃくちや懐疑的な視線を向けられた。一体なんだと言うのだろうか？

「お前は十分に善人というか、優しいと思うぞ」

「え？僕何かしたっけ？」

謙虚とかではなく本当に何も覚えがない。

そんなセシルの反応に、エリスは肩を竦めた。

「まあ私がそういう印象を受けたただけだ。気にするな」  
「うっん」

エリスがどうしてそう思ったのか気になる所ではあるが、今は別

に優先すべきことがあるので我慢する。

エリスのイルレオーネ守護騎士団へ入りたい動機。そこに嘘はないだろうと思う。それが本当なら、セシルが伝えようとしていることをエリスが知っても、問題はないかもしれない。

でも、自分を卑下するような気配が気になった。まだ何かがあるのだ。

セシルは更に一步、そこに踏み込むことにした。

「つまりエリスは、人気欲しいから騎士団に入りたいんだよね？」

「そうだ」

「じゃあ、何で人気欲しいの？」

「……」

思えば妙な質問である。人の欲求を満たすのに理由なんてない。

何で貴方は美味しいものが食べたいの？と聞くようなものだ。

だが、それにエリスが沈黙した。それもかなり動揺した表情で。

それに、セシルは笑ってしまいそうになる。

エリスは僕と同じだ。顔にすぐ出て嘘がつけないタイプ。

「それは……優越感が欲しいだけだ」

そんなうわずった声で言われても誰も信じないよエリス。

そう内心で呟く。

「嘘じゃなくて本当のことが知りたい」

「……」

質問から逃がさないように、エリスの揺れる瞳を見据える。

思えば、まだ短い付き合いでしかないのに随分と無遠慮なことだ。

なぜ僕はここまでする？ 僕がはじめて魔紋くを刻んだ相手だから？ 一年間の生活を保障してもらえる相手だから？ それとも、単なる気まぐれか？

それを考えた時、なぜか外界の女王の顔を思い出した。その女王の瞳と、エリスの瞳が被る。

それで理解した。

自分がここまでする理由。

おそらく、エリスの動機も。

「私は……私は……」

思い詰めた顔で、言葉を絞りだそうとするエリス。

もしかしたら、全部を話そうとしてくれていたのかもしれない。でも、もうセシルは詳細な事情を聞く必要性を感じなかった。

「もういいよ、エリス」

「駄目だ……よくない」

セシルの言葉に、エリスは首を振った。

どうやらかなり追い詰めてしまっていたらしい。

罪悪感が胸を刺し、セシルは頭を下げた。

「ごめん、無理に聞き出そうとしたのは謝る」

「違う、違うんだ。そうじゃない。思えば私は、お前を騙していたのかもしれない……いや、きっと騙していたのだ。だって私は……」

俯きながら、様々な感情をよぎらせるエリスの双眸。

そこに滲む涙を拭ってやることで、セシルはエリスの言葉を止めた。

「もういいんだよ、エリス。詳しい事情は知らないけど、何となく分かったんだ」

「……え？」

困惑した声を上げて、エリスが顔を上げる。

セシルはそれに、安心させるように笑いかけた。

「僕が、君の目指している場所に連れて行ってあげる」

セシルのその言葉に、またエリスは涙を溢れさせる。

本当に、すぐに赤くなったり泣いたり忙しい人だ。

偏屈で鬱屈した寂しがりや。

僕はどうも、そんな女性に弱いのかもしれない。

## 第十一話 光

産まれた時から、世界は私の敵だらけであった。

誰よりも愛されて産まれた私を、世界は愛してくれなかった。尊い人に愛されて産まれた私に嫉妬するように、私を嫌悪した。

世界の悪意から私を守ってくれるのは、実姉と実兄の二人だけ。

父は私を守ることにはなかった。その代わり、積極的に攻撃することもなかった。ただ、時折その瞳に憎悪が垣間見えるだけ。

当然だ。私は父が一番大切にしていたものを奪ったのだ。

父は優しい人物であり、私に憎しみを感じてしまうことを酷く苦しんでいたように思う。

それが、いつも申し訳なかった。

姉や兄だつて、私を憎んでいてもおかしくはない。もしかしたらいつか見捨てられるかもしれない。

私はそれに恐怖した。世界の悪意を阻んでくれる二人に、見捨てられることを何よりも忌避した。

だから姉が遠くに行ってしまうかもしれないと知った時、私は恐慌状態に陥った。

私にとって要塞であり、牢獄のような住処を飛び出し、走った。

街ですれ違う人々が、走る私に視線を向ける。

その視線は、禁忌、畏怖、嫌悪、そしてたまに憎悪。

そんな感情の洪水に流されるように、私は街の郊外にまで走った。途中で外壁の門を通りすぎたが、幸いにも誰にも止められることはなかった。

私を止めたがる人がいるとしたら、それは私に悪意をぶつきたい敵だけだ。その他は関わることを嫌がり遠ざかる。

この街の人間は、誰もが私を知っている。

それぐらいに、私を産んだ人は尊く愛された人だった。

その尊い人が足を踏み外した要因である私を、誰もが知っている。

私は逃げた。

その視線の届く場所から外へと。

世界から逃げるように、ひたすら足を動かした。

どれくらい走っただろうか？

小高い丘の上に辿り着いた所で、私の体力は底をついた。

郊外の外までは辿り着けていない。私の脆弱な体力と足は、そこに辿り着く前に限界を迎えてしまった。荒い息を吐きながら、耐え難いもどかしさに涙が溢れる。

逃げたい。

逃げたい。

逃げたい。

逃げたい。

その時の私は、それだけしか考えていなかった。

どこに逃げるかなど考えもせず、ただ逃げたかった。

私を産んでくれた尊い人も、私にはどうでもよかった。一度も顔を合わせたことのない人に、私は愛情を感じない。ただ、その人を愛した兄や姉に見捨てられたくないから、私もその人を愛してるふりをしているだけだ。

本当は、憎んでさえいるのに。

自分を守るようにうずくまり、懸命に涙を止めようと目を瞑る。

そこで、絶対に声は上げなかった。

私の泣き声で敵を呼び寄せるのが怖い。

敵は私が泣いた所で容赦などしないのだ。むしろ、喜ぶことが多

い。私が泣いていると、指を差して楽しそうに笑う。私が苦しむほど、敵は幸せになる。

しばらくしてやっと涙が止まってくれた時、私は痛みに気がついて自分の左腕を見た。

どこかで擦ったのだろうか？見ると裾が破れてしまっており、その下の肌を薄く血が滲んでいる。

白い服を纏った怖い人から、汚れた血と言われたことがあるものだ。

私の血は、そんなにも他の人とは違うのだろうか？

そんなことを思い、痛いのを我慢して傷口から血を掻きだしてみる。

汚れた血。

世界に不幸を呼ぶ血。

化け物の血。

兄と姉だけがそれらを否定した。

だがよく見てみると、たしかに少し薄黒いような気もする。

右手に付着した血を眺めていると、唐突に底冷えするような唸り声私に届いた。

「……………え？」

慌てて顔を上げると、真っ先にそれが視界に入る。

それは、今までの私の敵の中でも一番強力で凶悪なものだった。

闇を纏っているかのような黒いたてがみと、大人よりも高い体高をした魔獣。その頭に目と思しきものは三つあり、それは全て私の

右手に向けられている。

四つ足に光る爪は鋭く、私など簡単に引き裂いてしまいそうだった。

感じたことのない、圧倒的な威圧感が私をその場に縫いつける。

だが、私の中で渦巻いた感情は恐怖ではなかった。

私は理解してしまったのだ。

私の汚れた血が魔獣を呼び寄せた。

その証拠に、魔獣の視線は私の右手に注がれているじゃないか。

かつて魔獣と同類だと揶揄された時、それが違うことを確認したくて必死に調べたのだ。

魔獣は食欲で人間を襲うのではなく、人間を襲うこと自体が目的になっている。どんな種類の魔獣の体にも、消化器に相当するものが存在しないのだ。

食事どころか睡眠さえもしない。ただ人間だけを狙って襲う存在。人々に、魔獣が冥界の尖兵だと信じられている由縁である。食欲が存在しないのだから、動物や人間の血に誘われたりはしない。

でも、この魔獣は明確に私の血に誘われている。

私ではなく、私の血を凝視している。

なんだ、やっぱり私は呪われていたのだ。

兄や姉の言うことが間違っていて、他の人々が言うことが正しいかった。

私は世界の敵であり、世界は私の敵だった。

なぜなら私を産んだ尊い人は、私を愛しすぎて自ら悪魔になったのだから。

私は悪魔から産まれた子だったから。

私の中で、何かが決定的に砕け散る。

魔獣を前にして、私は笑っていた。

自分が滑稽すぎて。

何で私は、自分が人間だなんて思っていたのだろうか？世界は毎日のように、私に諭してくれていたというのに。

時間が、ゆっくりと流れるように見えた。私に向かって振り上げられる爪がよく見える。私はこれから、それに引き裂かれて死ぬのだろうか。

それは正しいことのように思えた。生きているだけで罪深いとされる私なのだ。

私が死ぬことは、世界の救済であり、人々の幸せになるのだ。

だが、その救済に身を委ねるのを、阻むものが介入してきた。魔獣の体に叩き込まれる、疾風のような一閃。その体内で、何かが砕ける音がする。

糸が切れた操り人形のように、魔獣が崩れ落ちた。

一撃で私の最大の敵を屠って見せたのは、一人の男だった。

後ろに流した金髪と、薄茶色の双眸をした大人の男。魔獣の真っ黒な返り血を浴びながらも、その佇まいは清浄で気高く見える。

その姿に、私はいつかどこかで読んだ英雄譚の主人公を連想させた。

その男は私の傍に跪くと、私の左腕を取った。そこに付着している私の血が、その英雄を汚してしまうのを恐れて、思わず腕を引いてしまう。

そんな私の反応に驚いた様子を見せたものの、それはすぐに爽やかな笑顔に変わった。

大丈夫だから。

そう言つて笑いかけると、もう一度私の左腕を取る。私の血を水で洗い流した後、細長い布のようなものを腕に巻いてくれた。

どうやら彼は私のことを知らないようだ。だから、人間を相手にしているように接してくれる。彼を騙しているみたいで、申し訳ない。

君の家に帰ろう。

男が手を引くと、私は逆らえなかった。

本当は帰りたくなかない。

でも汚れた私が、清浄な彼に逆らつていい道理はない。足取りを重くしつつも、あの視線が待つ街へと歩みゆく。

この男も、私に向けられる視線を知れば理解するだろう。私もその剣で貫かれるべき存在なのだ。

だが、街で私を待っていたのは違うものだった。

最初こそ、男に手を引かれた私に負の視線を向けたものの、すぐにその視線はその男へと注がれた。

その視線は、敬慕、感謝、羨望、そして数多くの憧憬。

男が放つ光は、私の呪いを塗りつぶした。誰も私など見なくなつた。

私に向かう悪意を打ち消し、尚かつその光は陰りもしない。

男は本物の英雄だったのだ。

すれ違つ人達が、口々に彼のことを囁き合う。

イルレオーネ守護騎士団。

この国が誇る英雄。  
人々を守る正義の騎士。

男の立つ位置は、まさに人々の太陽であった。ちっぽけな私の闇  
など、簡単に振り払ってしまえるような。

欲しい

そう思った。

もう私は世界の敵でいるのが嫌だった。限界だった。  
私もこの男のようになれば、世界に受け入れられる気がする。

だから欲しい。

その地位が。光が。英雄という偶像が。

それが手に入るなら、私は私でなくなってもいい。  
人々が望むように動く人形でもいい。

欲しい、欲しい、欲しい、欲しい、欲しい、欲しい、欲しい。

私の中に生まれた強い欲求が、私の中に火を灯した。  
それは私をはじめて感じた希望だった。

## 第十二話 アニス

夜空に浮かぶ月は、満月から少し欠けた状態でも十分にその場所を照らし出した。

その光量は、そこに立つエリスの影を作り出すほどである。今日の夜が、このように明るい日であったことに感謝した。

エリスは今、自分が何度も地に塗れた場所に佇んでいる。

イルレオーネ守護騎士団に入る条件である武芸大会が行われる会場。その試合場に立ちながら、エリスは剣を携えて人を待っていた。上から試合場を見下ろし、そこで行われる戦いに興奮して地面を揺らすほどに賑わう観客席も、今は誰もいるはずがなくただ夜闇に静寂を漂わせている。

長い時間を待ちながら、エリスは何度も自分の過去に思いを馳せた。正直、そのほとんどが辛いものばかりであり、自分本位なものである。

最初はひたすら逃げるだけだった。

目標を見つけてからは、みつともなく藻掻き続けた。

今日を終えた明日からは、違う未来が待っているのだろうか？

エリスは空に輝く月を視界に収める。太陽に比べて、その光は酷く頼りない。

やがてエリスの影がもっとも短くなった頃、待ち人の声が耳に届いた。

「こんばんわ、お嬢さん。年頃の女性が、真夜中のこんな場所に男を呼び出すのは、いささか警戒心が足りないのではないかね？」

「お気になさらず。生憎と、私のような者などを女性と扱う人は少

ないのです」

軽口を返しながら、その声の元へとエリスは視線を向ける。

その男は、試合場の入口に漂う闇から滲み出てくるようにして、その姿を月明かりの元へと現した。

後ろに流した金髪と、薄茶色の双眸をした壮年の男。この国の英雄、リチャード・ウインチエスタである。

その装いは鎧こそ着ていないものの、腰には剣が携えられていた。

エリスの言葉に、リチャードは困ったような笑顔を浮かべる。

「だとすれば、君の周りの男は相当な朴念仁か男色趣味の者ばかりということになるな……君は自分の器量を自覚したほうがいい。」

「……恐れ入ります」

全然承知していなさそうな声色で返事をするエリスに、リチャードは肩を竦めた。

「それにしても、ここに来るまでに随分な遠回りや手順を指定してあったが、あれは尾行対策でもしていたつもりだったのかね？ お陰でかなりの時間を食ってしまったよ。私はこれでも忙しいのだがね？」

一見何事もなさそうに苦笑するリチャードだが、その内からは凄まじい殺気が漏れ出しており、エリスの首をチリチリと掻いた。まるで首筋に剣を突き付けられているような気がする。

流石はイルレオーネ守護騎士団で最強を名乗る男。その殺意だけで人を殺せそうだ。

「どうしても、二人きりになりたかったのです」

「ほう？　それで、私に何の用かね？」

リチャードから表情が消えると、より一層研ぎ澄まされた殺気がエリスに突き刺さる。

そんな殺気に吞まれそうになりながらも、エリスは気丈に言葉を返した。

「私の用件の前に、確認させて頂きたいことがあります」

「確認？」

「貴方の体のことです」

「……」

リチャードが沈黙する。

エリスがその秘密を知っていることを、リチャードは理解しているはずだ。彼を真夜中のこんな場所に呼び出せたのは、それを利用したからである。それを出しにされると、彼は無視ができないはずだった。

「どうして分かった？」

「それは言えません」

リチャードの問いに、エリスは正面から応じる。

セシル談によると、私は嘘が下手らしいので変な小細工はしない。

リチャードが何かを言う前に、今度はエリスが質問した。

セシルからリチャードの体に視たものを聞いた時、もしかしたらと思っただ疑念。

「それは、もしかしてアニスという魔術師が発案し試みたものと同じものですか？」

「……そうだ」

あっさりと肯定の意を示すリチャードに、エリスは視線を鋭くした。

「何故、貴方は人間の形を保っていられる？」

そう、もしリチャードがその人物と同じ物に手を出したのならば、彼は彼でいられるはずがない。それは失敗作だ。アニスという魔術師はそれで死亡したのだ。

アニスとは、イルレオーネのホルミア領でその並外れた治癒魔術を駆使し、聖女とまで謳われた女性である。

様々な治療法を発見、開発した歴史に名を残すべき偉人。

その女性がとある事件に巻き込まれた時、自分の胎内の子供を助けるため、咄嗟に試した最後の手段。

それは、自分の肉体を少しだけ魔力素体に変化させるものだった。魔力素体とは、つまりは魔力でできた肉体のことである。

それは魔獣の体を構成するものと同質のものであるとも言えた。

この魔術が上手くいけば、人の欠損した体の一部を精製して補完することなども可能である。実用化すれば、それまでの経歴の中でも最大の偉業となるはずだった。

だがそれは失敗作だった。

原因は不明だが、生きている人間の体に癒着した魔力素体はその他の部分をも呑み込み、アニスを完全な異形の姿へと変化させたのである。

アニスは理性を失って街中で暴れ回り、その醜い姿を民衆に晒した後でこの世を去ることになった。その残骸で産声を上げた赤子を残して。

そして元から反対の姿勢だったキルストア教の者らが一斉にその

魔術を糾弾した。

そのまま、その魔術は禁忌とされ、ホルミア領の領主が全てを葬り去ったはずである。

「何故貴方が、抹消されたはずの魔術を入手できた!？」

思わず声を荒らげたエリスだったが、そっちは少しだけ見当がついている。

おそらく、六年前だ。リチャードが一人の少女を魔獣から救った日。ホルミア領に彼が訪れた日。

その日に、手に入れたのだ。何処かに残っていたその魔術の構成を。

リチャードは魔術師ではないので、誰かにその魔術の構成を教え使わせた可能性が高い。つまりは抹消された危険な魔術が、裏で拡散してしまっているかもしれない。そのことに、エリスは齒噛みする。

リチャードはエリスの問いには答えず、困惑した声を上げた。

「何故そこまで知っている？ お前は一体何者だ？」

「貴方の同類です」

エリスの返答に一瞬目を丸くした後、それを察したりリチャードが盛大な溜息をついた。

その体から放たれていた殺気が、あっさりと消失する。

「そうか……そういうことか。私も大概、間抜けだな。ジエディ・ムーアと共に現れたのだ。その名前も確認しておくべきだったよ。」

そう言って、恥じるようにその頭を搔くリチャードは、エリスへの警戒を薄めていた。むしろ、親しみを感じているようである。

「たしかエリス・ムーアだったな。アニス・ムーアの最後の娘で、私が六年前に助けた少女の名前だ。見違えたよ。外見もそうだが、何よりあの時の君は目に光がなかった」

「……」

リチャードの変化に、エリスは怪訝な顔をして押し黙る。

そんなエリスの警戒を解くよう、穏やかな声でリチャードは言葉を続けた。

「一つ、誤解があるようだ。私は別に、その魔術を手に入れたわけではない」

「……ではどうして？」

「私の体に癒着させた魔力素体は、魔術で新たに精製したものではない。君の母親の遺体にあったものだよ」

「母の遺体は全て念入りに処分されたと聞きましたが……」

母の亡骸の処分はキルストア教の修道士達が強行した。その時、私も危うく処分される所だったと聞いている。彼らは魔獣やそれに関わるものを徹底的に禁忌するのだ。

「残念ながら、一部分だけ処分できずに残っていたのだよ。燃やすことも砕くこともできなかった、魔力素体の結晶とでも言うべきものが。手に負えないそれを、修道士達は私が管理するよう騎士団に要請したのだ。自分で言うのも何だが、私は英雄視されていたからね。私なら安心できると、彼らは喜びながら託してくれたよ」

そう言っリチャードは、自身の上着の前を広げ、胸をはだけて

見せる。

そこには菱形の水晶のようなものが、リチャードの胸に根を張るようにして癒着していた。

「それは……」

「一年前に私は死に至る病を抱えてね。これのお陰で私は延命できたのだよ」

その水晶は月の光を反射するのではなく、明らかに自ら発光していた。外観は魔獣の核に酷似しているが、砕くことができないとなると硬度が違いすぎる。魔獣の核はたしかに硬いが、砕くことが不可能という程でもないはずだ。

もしかしたら、私の体内にも同じ結晶があるのかもしれない。

エリスはそんな推測をする。自分のこの異常な魔力がその証拠ではないだろうか？

「異形になったアニスの体と癒着していたはずの子供が無事だったことを思い出し、もしかしたらと思った。当時の私には、もう他の手段も時間も残されていなくてね。一か八かということで試したのだ。結果はご覧の通りだ」

生きるためだったと、仕方がなかったといった顔で、リチャードはエリスを見る。

リチャードはエリスを懐柔しようとしていた。

「どうやって私の体のことを知ったのかは分からない。だが、このことは秘密にしておいてくれないか？君になら分かるはずだ。これが一部の人間にどれほどの悪評を集めるかを。できれば騎士団に余計な口を付けたくないのだ」

そう言って、リチャードがエリスに真摯な眼差しを向ける。本当にそれだけであったなら、エリスは簡単に懐柔されただろう。

だがエリスは承伏しなかった。

この男はそれだけではないのだ。

騎士団に曰くを付けたくないと言いながら……

「ならば何故……」

「ん？」

エリスの震える声に、リチャードは小さく首を傾げた。その穏やかな表情も、事実を知っているエリスにはとぼけた顔にしか見えない。

「何故、貴方は何人もの人を攫って殺した？」

「……そこまで知っているのか」

リチャードが再び溜息をつく。その姿に、悪びれた様子は欠片もなかった。

「それも私が生きるためだ」

「生きるため？ 人をなぶり殺しにすることが？」

「成る程、あの地下室を見たのだから？ いつ侵入した？」

「……」

エリスは答えなかった。実際にリチャード邸に忍び込んで見てきたのはセシルだ。

エリス自身が確認したわけではないが、リチャードの反応で確信した。正直な所、今だ信じられない気持ちはあったのだ。

その地下室に、鎖に繋がれた人間の遺体がいくつも転がっていた。しかもそのほとんどが、一息に殺さずゆっくりと時間をかけて息絶えたものばかりだった。まるで拷問の跡である。

「何故、あのようなことを？」

「……」

エリスの質問に、しばらく沈黙するリチャード。やがてその視線を空の月へと向けると、自らへの憐れみを含んだ声でゆっくり語りはじめた。

「この結晶は、やはり魔獣の核と同質のものだったということだよ。この結晶が体内にあった君の母親は、魔獣になっていたと言っている」

「……」

その事実には、今さらエリスは驚かない。

だが、その後続く言葉にはそうもいかなかった。

「君の母親が理性を失って人間を襲ったのと同じだ。この結晶を体に癒着させてから、私には一つの欲求が加わった。人間をどうしようもなく襲いたくなるのだ」

「え……」

思わず声を上げたエリスへ、リチャードは視線を戻す。その瞳が、まるで人形のように冷たく感じられた。

「その反応を見るに、やはり君にはその欲求がないようだな。……それは例えると睡眠欲に近い。眠っていない日が続くと、眠りたい

という欲求に抗い難くなり、やがては限界を迎えるのと同じだ。我慢を続けると、やがて妄想や幻覚などが現れ、理性を破壊していく。そのままではいつ街中で理性を失って暴れてもおかしくはない。だから私は定期的にそれを発散させる必要があった。一人一人をなぶるようになってしまうのは、犠牲者の数を抑えるための私なりの抵抗だよ」

リチャードの話を聞く内に、エリスは底知れない恐怖を感じた。この男と同類である自分も、いつかそうなるかもしれないのだ。本当の意味での人間の敵に。

そして目の前のこの男は、それを自覚している。欲求のままに人を殺した時点で、もう完全に魔獣と変わらないのだ。それを自覚した上で、まだ生きようと足掻いている。

街中で暴れないように？犠牲者を抑える？何を馬鹿な、そうまでしてこの男は・・・

知らず、エリスは涙声になっていた。

「貴方はそうまでして！ そんなになってまで！ 生きていきたいのですか！？」  
「そうだ」

リチャードは事も無げに肯定して見せる。むしろ逆にエリスを鼻で笑った。

「生へ執着するのは当然だろう？それが分からないのだとしたら、私は前言を撤回しよう。君は六年前に私が助けた時と何も変わっていないかった。死を前にして笑っていたあの時とな」

エリスには分からなくなった。

私は生きていることに執着心が薄いのだろうか？ 私には、そんなにまで墜ちて生きていたいとは到底思えない。

でも本当は私が間違っていて、この男の生への執着は当然のことなのか？

悩んでも答えがでなかったが、エリスの耳に届いた合図で目を見開く。

それで、思い出した。

自分の目的を。その意味する所を。

「……六年前の私と今の私は違います」

「ん？」

「どこまでも私は、貴方と同類だったようですよ」

エリスのその言葉と同時に、観客席の端で魔方陣特有の青光りが走った。

途端に、白く眩い光がエリスとリチャードが立っている試合場を照らす。

「これは一体？」

リチャードが驚いて周囲を見渡すと、観客席のほうにぞろぞろと騎士達が突入してくる最中であつた。その中には副団長であるサイラスの姿もある。王都勤務である騎士達の約半数がその場所に入ってきていた。

試合場のほうに誰も入ってこないのは、あの三人が上手くやってくれたのだろう。

エリスはそれに感謝しながら、腰の剣を抜いてリチャードの方へと突き付ける。

「騎士としての貴方は今日、ここで終わる」

そして、強い眼差しでリチャードを睨み据えて宣言した。

「その前に、貴方の騎士最強の座をいただきたく思います」

### 第十三話 お膳立て

ほとんどの騎士達が、一度は通ったことのある試合会場の入り口。

今は眠っているかのように夜の静寂に包まれたそこで、一人の男がこめかみをぴくぴくと痙攣させていた。

短い黒髪に、目尻の尖った琥珀色の双眸をした痩身の男。その男の後ろには、困惑した様子の騎士達が多数控えている。

その騎士達を代表するように先頭に立つ男、副団長のサイラスは、怒りを押し殺した声を目の前の女性に浴びせた。

「それで、これは一体何のつもりだ？サクヤ」

「楽しい余興でございますよ。たしか、今はサイラス様でよろしかったですか？」

「……………」

サクヤの白々しい問いに、サイラスが沈黙する。その会話が示す意外な事実にも、セシルは驚いた。

「知り合いだったの？」

「同じ空気を吸い、同じ飯を食べ、同じ地で眠り、同じ水を飲みながら育った仲でございます。さあ存分に嫉妬して下さいませ」

「ただの同郷の顔見知りだ！ 妙な言い回しをするな！」

無表情のままのサクヤの言葉を遮り、サイラスが苦虫を噛み潰したような顔でセシルに答えた。

「横から口を挟まないで下さい。ええっと……………サイラス様？」

「ぐっ、この変態ドS女があ……」

わざとらしく名前を迷って揺さぶるサクヤに、サイラスの青筋が増える。

その変態ドS女という罵りの言葉に、セシルは妙な親近感を覚えた。

同士だ！似たような悲境を感じている同士がいた！

そう心の中で叫び、思わずニコニコと上機嫌な笑顔でサイラスを見てしまう。

そんなセシルの視線とサイラスの目が合った。

何故か、サイラスが目を見張って硬直する。

それは一瞬のことで、サイラスはすぐに我に返って視線を逸らし、コホンと小さな咳払いをした。

「……………可憐だ」

微かにボソツと呟かれた言葉を聞き取り、今度はセシルが硬直する。

セシルは今だメイド服のままだった。自分は男だと説明するのは、自分が変態だと説明するのと同義である。

何も言えなくなったセシルに、サクヤがそつと頬を染めた。

「セシル様も罪作りなお人ですね」

「誰のせいだと思ってるの!？」

「ご心配なさらず。私は全然ありだと思います」

「僕は全然良くないけどね!」

「あ、ですが私との情事の時に彼が参加なされるのはちょっと……」

「何の心配してるのかな!?　　っていつかこんなこと言い合ってる場合じゃないでしょ!?!」

変な方向へ脱線していきそうになっていたが、途中で今は急ぐべきだったことを思い出す。

騎士団員達にあれを見てもらわないと、わざわざ試合場の出入り口を封鎖した意味がなくなってしまう。封鎖といっても、リチャードが中へ入っていくのを見送ってから、適当に重たい備品を見繕ってセシルが急いで詰め込んだだけのものであるが。

それでも、常人の力でこれを解くには数刻以上はかかるはずだ。

サクヤはあっさりと話の軌道を修正し、騎士団員達に向けて上階の観客席に繋がる通路を促した。

「それではイルレオーネ守護騎士団の皆様、上階の観客席のほうへどうぞ。そちらの通路は塞いでおりませんので」

「だから、一体どうということなのだ?何をするつもりでいる?」

セシルの存在を意識してか、少しだけサイラスの口調から刺が抜けていたが、サクヤ達の行動に困惑しているのは変わらないようだった。

「先ほど申し上げた通り、余興でございます。あの地下室はもう、ご覧になられたのでしょうか?」

「ああ、ジエディ・ムーアに案内されてな。私も確認した」

リチャードが自宅を出た後を見計らって、ジエディに騎士達を連れて地下に踏み込んでもらったのだ。これには元々、宮廷魔術側で騎士団側に協力の要請をしていたのが幸いした。

地下の現場検証は、ジエディと共に事件を担当していた宮廷魔術

師に任せ、ジエディは改めて騎士団に魔獣の討伐を依頼したのである。

サイラスは最初、ジエディの話を通じてはいなかったが、さすがにあの地下の惨状を見せられると素早く対応してくれた。

ちなみにジエディは、サイラス達をここに案内するとすぐに観客席の方へ行ってしまった。我慢できずに先走ってないことを祈る。

「だからその犯人を……いや、魔獣を討伐しに来たのだ。何故その邪魔をする？」

「ご覧になってただきたいものが御座いまして」

「何だそれは？」

「最強の座が陥落する瞬間とでも言いましょうか」

「……」

これ以上の問答は無駄だと感じたらしく、サイラスが小さく溜息をついた。

部下の一部に出入り口に残るよう命じてから、サクヤが促す通路の先へと歩いていく。

セシルもそれに続くと、その隣に来たサクヤがエリスに合図を送った。

> 気くを乗せた音の無い咆哮。

同じ> 気くの使い手にしか感じ取れない振動波のようなものらしい。

昨日、エリスがサクヤの攻撃を弾き飛ばした技の応用だそうだ。もしかしたら、サイラスも> 気くの使い手かもしれないが、感知された所で大した影響もないだろう。

早足で観客席に向かいながら、サクヤがセシルにだけに聞こえる声で口を開いた。

「本当はあのサイラスという男を警戒して、セシル様にエリス様お嬢様とご同行するよう願ったのですが……これは、思わぬ収穫がありました」

「あの人、何か危ない人なの？」

「私の祖国がいささか狂っているというだけの話でございます。その出身者というだけでも警戒する必要があるという程度に」

「……」

サクヤもサクヤで、何やら色々複雑な事情がありそうだとセシルは思った。

だが、とりあえず今はエリスである。

今回のことを考えたのは、セシルだった。

即興で考えたものだったので、かなりの無理があったが、何とか上手くいってよかったと思う。なるべく劇的な状況でエリスの強さを騎士団員達の目に焼き付けたかったのである。

本当はもっと多くの人に見てもらいたかったのだが、それで民衆達にリチャードの所業を知られてしまえば、騎士団の株はガタ落ちになる。それでは本末転倒だった。

リチャードのことは内々に揉み消すことになるだろうとはジエデイ談である。さすがに公表できない情報が多すぎるのだとか。

ならばせめて、事件に関わることになる騎士達には見てもらおうと思ったのだ。要するに、騎士団にエリスを宣伝するのである。

セシルはこれを、エリスが新たな英雄になるための第一歩にしたかった。

セシル達が観客席のほうに入ると、既にジエデイが光く系の中級魔法で、眼下にある試合場を照らしていた。

魔法の制御を保ちつつも、入ってきたセシルとエリスを見てその唇を尖らせる。

「サクヤちゃんもセシルちゃんも、遅い〜」

「遅れて申し訳ございません」

そう言っただけサクヤが頭を下げるが、ジェディの視線はもう試合場のほうに注がれていた。その横顔は、今にもエリスの元へ飛び出していきそうなほど深憂に染まっている。

「ねえ、本当に大丈夫なの？ エリスちゃんは勝てるの？」

「うん、大丈夫だよ」

あつさり肯定するセシルだが、それでもやはりジェディの心配は消えないようだ。

そんなジェディを慰めるように横に立つサクヤを尻目に、セシルも試合場に立っている二人の姿を視た。

リチャードの体は、そのほとんどが魔獣と変わらないものになっている。彼が理性を保っているのは、おそらく元々魔力を全く持っていないかったのが幸いしたのだろう。

エリスが言っていた魔力素体に関する技術は、似たようなものが外界にもあった。

魔力素体を癒着させた者が異形になるのは、そこに含まれる魔力が体に流れ、元々人が持っている魔力と反発しあって暴走を起こすのが原因だ。

だがリチャードはその体に魔力を持つておらず、魔力素体の魔力をそのまま受け入れることができた。

だがそれは無事を意味するのではない。抵抗する魔力がなく、魔力素体の魔力を受け入れるということは、自分の体が魔力素体と同

じものなることを受け入れるということだ。

魔力を持つものならば、受け入れられずに抵抗するからこそ魔力素体への変移を中途半端に阻害し醜い姿になる。

リチャードは抵抗がなかったから、限りなく人間の形を保ったまま肉体の構成情報が書き換わったになっただに過ぎない。

彼はそういう意味で、もう人の魔獣と呼んで差し支えなかった。

魔力素体に侵されたもの、延いては魔獣がなぜ人を襲う本能を持つかは外界でも未だ説明されていない。

ただ、分かっているのはそれが完全に人間の敵だということだ。人間の敵となつた彼を放置しておくわけにはいかない。それは外界の人間全てに与えられた使命だ。

リチャードの核が持つ魔力は、結界を素通りできる下位魔獣の上のほうといった所である。その核の器自体は中位クラスだが、>マナ<の薄い内界にあつた影響なのか魔力が溜まりきっていない。

エリスに>魔紋<を刻んでからだいたい丸二日、今の彼女なら下位程度の魔獣ならもう勝てるはずだ。

ただ一つだけ懸念があるが、確立は低い。

だがもしも、その懸念が的中したら……

セシルは念のための心構えをしながら、試合場で剣を向け合う二人に視線を送り続けた。

## 第十四話 最強の証明

自分の窮地を悟ったりリチャードは、笑っていた。それはともすると、泣いているようにも聞こえる乾いた笑い声だ。

今まで築き上げてきた地位や名声が全て崩れたのだ。

自身の末路を思えば自棄になったとしてもおかしくはない。

そんなリチャードに剣を向けたまま、エリスはじつと彼の両眼を見つめた。

そのエリスの視線に応じて、リチャードも剣を抜く。

「騎士最強の座をいただくかと？」

そして嘲るような声をエリスに浴びせた。

「未だその騎士になることさえできない分際で何をほざく」

「……あまり私を見くびらないことです」

そう、見くびって油断している状態のリチャードに勝っても意味がない。

欲しいのは最強という称号。その手段は現最強の全力を正面から叩き潰すこと。

それにはまずリチャードの侮りを消し、本気にさせる必要があった。

そんなエリスの思惑とは裏腹に、リチャードは軽く剣を構えて見せる。

「どこまでも愚かな娘だ。だが、君の貴族の娘という身分は役に立つ。君を盾にすれば、或いは私にも活路ができるかもしれん。君に

は私と一緒に王都を脱出してもらつことにしよう」

この期に及んでまだ生へと執着を見せて足掻くリチャードに、エリスは自分を重ねていた。

先ほどサクヤからの合図が聞こえた時に悟つたのだ。

今私がやるうとしてしていることは、リチャードという男を踏み台にすることじゃないか。

結局、何人も人間を犠牲にしたこの男と何も変わらない。私とこの男の違いは許容できる限度の違いでしかなかったのだ。

この男の足掻きは私の許容範囲を越えていたが、その本質は同類。自分の鏡のような男。

だからこそエリスはもう容赦する気がなかった。自分に似ている者ほど憎々しい相手はいない。なぜなら自分自身もつとも嫌悪するべき対象だからだ。

リチャードが剣を構えたのを確認してから、エリスはその体の魔紋くを発動させた。

月明かりがあるとはいえ、夜の闇の中に浮かび上がるそれは、かなり目立つ。

その正体不明の光の紋様を纏うエリスに、リチャードは少し狼狽えたようだ。

「……何だそれは？魔術か？」

「……」

リチャードの疑問にエリスは答えない。

実はエリスも未だよく分かっていないだけなのだが、リチャードはそれに警戒を高めたようだ。その手に持つ剣の握りを変え、改め

て構え直す。

しばし両者見合った後、先に動いたのはリチャードだった。状況的に急がなければならぬのはリチャードなのだから、それは当然の流れだったとも言える。

剣を小さく振りかぶり、エリスとの間合いを詰めてきた。

エリスを生かしたまま人質に取るためだろう。その手に持つ剣は、刃ではなく腹の部分をこちらに向けている。その狙いはエリスが剣を持つ手。

それらがはつきり見えてしまうほど、リチャードの動きが鈍く見えた。

その剣が手に到達する前に、リチャードを二度斬り伏せてしまうことも容易そうに感じる。

だがすぐに終わらせるつもりはない。

エリスは肺の中で溜めて練り込んだ>気くを、咆哮によって一気に前方に吐き出した。

「喝っ！」

昨日のサクヤとの戦いでは、飛んできた武器を全て吹き飛ばした>気咆くという技だ。あれからさらに増幅されたその威力は、リチャードの体をも吹き飛ばした。

リチャードにとつては突風の塊にでも衝突した気分だろう。地面に尻餅をつき、目を白黒させている。

>気咆くと共に動きだしていたエリスは、その眼前に剣を突き付けてやった。

「これで一度、貴方は私に負けた」

「っく！」

エリスが剣を引くと、リチャードが慌てて後ろに下がって間合いを空ける。

「調子に乗るなよ。そんな手品が何度も通用すると思うな！」

叫びながら、再度斬りつけてくるリチャード。今度はその手に持つ剣も、腹ではなく刃のほうを向いている。剣を振る動きも、先ほどよりさらに加速していた。

だが、それでもエリスにとっては遅い動きであることに違いはない。

エリスはそのリチャードの斬撃を、最小限の体裁きでことごとく避けてみせた。

時折フェイントも織り交ぜているようだが、緩慢すぎる動きでそれをやられても意味はない。リチャードの顔に微かな焦りが過ぎった所で、エリスは斬撃を打ち払い、再びその眼前に剣を突き付けた。

「これで二度目」

「っ！」

驚愕のあまり、声が出ないリチャード。

その腹を、エリスは押し出すように蹴った。

リチャードの体が宙を舞い、エリスとの間合いが空いた所で地面に転がる。

「ぐっ……があ……」

「さあ、もう一度」

苦悶の声を上げるリチャードに、エリスは次の斬り合いを催促した。

リチャードが何とか立ち上がり剣を構えた所で、今度はエリスから間合いを詰める。

相手が何も動けないでいるうちに、わざとその構えた剣に打ちかかった。剣と剣が衝突した反動で、相手の剣を持つ手が浮き上がる。辛うじて剣を放していないのは流石というべきか。

だがその隙だらけになった胴に、エリスは剣の腹を叩きつけた。リチャードの体がまた後方に吹き飛んでいく。

いくら斬っていないとはいえ、込めた力は下手をすると致命傷にもなりえる一撃だったつもりだ。相手が普通の体ならばだが。

リチャードの体はもう普通ではない。だが、それでも相当なダメージはあったようだ。腹を押さえて蹲ったまま、立ち上がれないでいる。

「これで三度目」

エリスはリチャードが立ち上がるのを待つことなく、無造作に歩み寄った。エリスがその間合いに踏み込んだ所で、蹲っていたリチャードが跳ね上がるようにしてエリスに攻撃を仕掛ける。

不意をついた攻撃だったが、それが相手に届くよりも先に、エリスの足がリチャードの顎を打ち上げていた。

宙に舞ったりリチャードの背中が、エリスとの距離を存分に空けて壁に叩きつけられる。幾度もエリスに吹き飛ばされた結果、リチャードの体は試合場の壁際にまで追い込まれていた。

「これで四度目です」

「……」

「……さあ、もう一度」

エリスは相手の戦う気力が萎えないなら、何度でも繰り返すつも

りだった。

そんなエリスに、リチャードは息も絶え絶えになりながら声を絞り出す。

「ふ、ははっ……まだ満足できないのか？化け物め」

その言葉に反応を示さず無表情で剣を構えるエリスを見て、リチャードはやがて疲れた様子で頭を振った。

「君の強さはよく理解した。……もう一思いに殺してくれ」

そう吐き捨てて、剣を手放す。

あれだけ生に執着した男にしては、あっけない幕切れ。

エリスは少しそれに逡巡した後、自身も構えを解いた。

「それは断る。貴方を討つのはイルレオーネ守護騎士団であるべきだ」

そう言つて剣を納めようとするエリスを、リチャードは手を上げて制止した。

「私は君にお願いしたい。せめて最後は魔獣として騎士団に討たれるのではなく、決闘に負けた人間として屠らりたいのだ。……君になら分かるだろう？」

その哀愁を湛えた瞳が、エリスを捉える。そう言われてしまうと、エリスには断れなかった。

壁際に座り込んでいるリチャードに、エリスは歩み寄る。今度は先ほどのような不意打ちはなく、リチャードは大人しくその首を差

し出した。

それに向かって、エリスは大きく上段に剣を構える。

「……何か言い残すことは？」

「何も無いさ」

自嘲するようにリチャードは笑った。

その自分自身を嘲笑う笑顔に、エリスは過去を思い起こしてしま  
う。それは魔獣に爪を振り下ろされる寸前だった少女の姿と全く同  
じように見えた。

リチャードの姿を、幼き日の自分の姿を見ているように錯覚し、  
振り上げた剣先が無意識にカタカタと震える。

エリスはその迷いを断ち切るように、その剣をリチャードの首に  
振り下ろした。

が、その剣先は首に到達する寸前で止まる。

幼き日の自分の姿に同情したのではない。

その自分を斬ろうとしている自分と、あの日に爪を振り上げてい  
た魔獣とを重ねてしまったのだ。

気がつけば全身が震えていた。エリスは人の命に手をかけたこと  
がない。今までそんな機会がなかったから自分でも気がついてなか  
った。

エリスは普通の人以上に、人を殺すことを禁忌していたのだ。

自分がそうすることは、普通の人々がそうしてしまうのとは訳が違  
う。人間でない自分が人を殺めるのは、人間と完全な決別を意味す  
るのではないか。

そんな思いに囚われて、少しも剣を動かすことができなくなる。

剣と止めたエリスを見て、リチャードがニヤリと笑った。

「やはりな」

エリスがその言葉に反応する前に、突き付けられた剣をはね除けて大きく口を開ける。その口内には、人の犬歯と言うには異常に太く、尖った歯が生えていた。

もはや牙と言うべきものが、エリスの首に目がけて迫る。動揺して判断に迷い、動きが遅れたエリスはそれを咄嗟に左腕で防いだ。リチャードの牙が深々とエリスの左腕に食い込む。

「ぐうっ！」

激痛と共に吹き出した血がリチャードの口を濡らした所で、エリスは剣を手放して右手でリチャードを殴り飛ばした。

リチャードの口からエリスの左腕が解放される。地面に転がったリチャードから間合いを取りながら、エリスは素早く自分の服を破いて簡単な止血をした。

見抜かれていた。

先ほどのリチャードの言葉で、エリスはそう判断した。エリスが人を殺せないことを、自分でも理解していなかった事柄を、この男は見抜いた。攻撃に手心を加えたつもりはなかったのだが、どこか無意識に現れていたのだろうか？

「簡単な話だ」

困惑した表情で頭に疑問符を浮かべているエリスに、リチャードは立ち上がりながら答えた。

「君には最初から殺気がなかったのだよ。戦っている時はおろか、私の首に剣を振り降ろすその瞬間までもな」

口をエリスの血で盛大に濡らし、それはリチャードの首筋を流れて胸元にまで達していた。その血が胸にある核を僅かに濡らす。それがきつかけになった。

「……？ なん…だ？これは」

自らの異変に辛うじて声を絞り出したのも束の間、リチャードは絶叫のような悲鳴を上げはじめた。

突然のリチャードの豹変に、エリスはどうしていいか分からずに戸惑う。

次の瞬間、不可視の振動が猛烈に耳に流れ込んできた。

「っ！」

頭の中で暴れ狂おうとするそれを、咄嗟に口から吐き散らすことに成功する。

痛む耳を押さながら、エリスは考えた。間違いない。先ほど耳から入り込んできた何かは、>気<の技だ。だがこんな技はエリスも聞いたことがない。

一体誰が？

そう思い、辺りを見回そうとするが、その余裕はすぐになくなった。

リチャードの体が、変異をはじめたのである。

体がどんどん膨れあがり、それに追従するように骨格が成長していく。肌の色がどす黒く変色し、絶叫のように上げ続けていた悲鳴

が重低音に変わって獣の咆哮のようになっていた。

やがてその変異が終わった時、現れた姿にエリスは絶句した。

それはもうリチャードの原型を留めていなかった。辛うじて人型ではあるものの、ただそれだけだ。

何がきっかけかは分からないが、リチャードが変異したのはエリスの母が辿った末路と同じものだろうと思う。問題は、その巨大さだった。

見上げるほどに大きくなったその体躯は、エリスの身長の数倍以上はある。このような巨大な魔獣の存在は聞いたこともない。その体は夜の闇に溶け込みそうなほど黒く、顔と思われる部分には一つの大きな口と無数の目が赤く光っていた。

その魔獣が、おもむろに腕を振りかぶる。どこか他人事のようにそれを見ていたエリスに向かって、その腕が凄まじい速度で振られた。

辛うじて目で追えたものの、まるで避けることができなかった。咄嗟に>気くで衝撃を緩和しようとしたものの、全然歯が立たずにエリスの体が吹き飛ぶ。

その推進力は、エリスの背が試合場の壁に叩きつけられるまで消えなかった。

「あぐう！」

凄まじい衝撃が背中を襲い、エリスが悲鳴を上げる。

魔獣がそれを喜ぶように、咆哮を上げた。

ビリビリと地面を揺らすほどの莫大な音量の咆哮が、会場内に響く。

圧倒的だった。

その巨大さも、威圧感も、六年前にエリスが見た魔獣とは桁が違  
う。

その魔獣が、明確な敵意を持ってエリスに歩み寄ってくる。

戦わなければ。

そう思い、足に力を込めて何とか立ち上がった。だが、すぐに膝  
を突いてしまう。エリスの体は、あの魔獣のたった一撃でボロボロ  
になっていた。

構えるべき剣も、リチャードに噛みつかれた時に手放してしまっ  
ている。エリスはただ魔獣が再び腕を振り上げるのを見送ることし  
かできなかった。

死ぬ

そう思った。だが、以前の時のように笑いはしなかった。その事  
で六年前とは変わったことを実感する。

とてもじゃないが、笑う気にはなれない。エリスは凄まじく悔し  
かった。足掻き続けたことが全て水泡に帰すのが哀しかった。

魔獣がその腕を振り下ろす前に目を瞑る。

死を受け入れるためではなく、目から溢れ出そうになるもの堪え  
るために。

その数瞬後には、ズンツと腹の底に響くような衝撃音が鳴った。

「……？」

だが、エリスの体には何の衝撃も感じなかった。

まさか何も感じる暇もなく死んだのだろうか？

エリスは死後の世界のことはよく知らない。キリストア教の者達の言うことが本当であれば、天界か冥界に魂が運ばれるのだとか。

ならばやはり私は冥界に行くのだろうか？

そんなことを思い、目を開けるのが怖くなった。死んだ後も、より過酷な世界が待ってるなど考えたくもない。

「エリス」

目を閉じたまましていると、聞いたことのある中性的な声がエリスの耳に届いた。

その声に促されるように、エリスはゆっくりと目を見開く。

「え？」

思わずそんな声が漏れる。そこは冥界でも天界でもなかった。

だが目の前にいる銀髪の少年の可愛らしさは、天使だと言われても信じてしまいかもしれないと内心で思う。

その天使は、片手で魔獣の攻撃を受け止めていた。

## 第十五話 決着

ジエデイの魔法によって照らし出された場所で、エリスとリチャードの斬り合いが始まる。

試合場で繰り広げられるその戦いに、騎士達の誰もが絶句した。自分達が最強だと信じていた男が、為す術もなく圧倒され蹂躪されているのだ。驚くなというほうが無理だろう。

そんな騎士達の反応に、セシルは満足げに頷いた。

「うん。反応は上々かな」

「エリスちゃんってこんなに強かったんだ」

ジエデイが魔法の構成を維持したまま、感嘆の声を上げる。

その隣に立っているサクヤは、魔紋<のことを知っている為か、大きな驚きはないようだった。

「もう今のエリスお嬢様には、私も勝てる気がいたしません」

無表情の起伏のない声で語るサクヤだが、セシルはなんとなく彼女は嬉しがつてるような気がする。エリスとサクヤがどのような関係なのか、セシルは知らない。だが他の使用人達と違い、エリスとサクヤの関係には何か特別なものがあるようにセシルは感じていた。

そしていよいよエリスが、リチャードに引導を渡すべく剣を上段に構えると、騎士団員の間で微かに悲壮感が漂うのをセシルは感じ取った。

リチャードという男は、どうやらそれなりに慕われていた人物だったらしい。

セシルはエリスに敵意が向くのを防ぐために、それとなくリチャ

ードにとどめを刺すのを止めるよう言っただけであつたのだが、どうやらリチャードのほうから介錯を要求したようだ。

この流れもセシルには予想外だったが、エリスが振り下ろした剣を止めてしまったのはもつと予想外だった。

リチャードがエリスの腕に噛みつくのと、ジエデイが半狂乱になつた。

「いやああああああ、エリスちゃんがああああ」

それでも魔法の構成を崩さないのは流石だが、無謀にも生身で試合場へ飛び降りて行くこととする。

「待つて、あれぐらいなら大丈夫だから！」

そう叫びながら、ジエデイをサクヤと二人がかりで止めた。だが、止める側に回つたサクヤも気が気でないようである。

「ですが、恐らくエリス様お嬢様は人を殺すことができないようです。このままでは……」

そのサクヤの言葉が終わる前に、リチャードの絶叫が響き渡つた。セシルはそれに嫌な予感を覚え、慌てて試合場のほうを視る。

リチャードの胸にある核が、エリスの血から分解されて発散する高濃度のマナを吸収している様子を確認した。

それはセシルが懸念していたことが的中したことを意味する。

「サクヤ、ジエデイ！ 耳を塞いで！」

セシルの突然の要求に首を傾げるも、サクヤは素直に耳を両手で

塞いだ。混乱して聞こえていない様子のジェディの耳はセシルが塞ぐ。

セシルは肺にありつたけの>気<を練り込むと、試合会場を覆い尽くす範囲で>気咆<を吐いた。

通常よりもずっと薄く拡散したそれは、一部の例外を除く人物以外を全て気絶させることに成功する。奇しくもそれは、サクヤが合図に使った>気咆<の応用と同じものだった。ただ威力が段違いであるが。

「今のは>気咆<？ まさか、たった一日で習得なされたのですか？ しかもこの威力……」

流石にサクヤはすぐにそれに気がついたようだった。>気<を知らないジェディは、突然騎士達がバタバタと倒れたことにより、逆に冷静さを取り戻してキョロキョロと辺りを見回している。

見るとサイラスも気絶せずに立っていたが、今はそれを保留した。

試合場から響いていた絶叫の調子が変わり、観客席に立っていた四人の視線を集める。

その姿が変化し巨大になっていく様に、セシルを除いた三人が絶句した。

それもそのはずだろう。

あれは内界では見たことがないはずだ。

結界から弾かれる中位の魔獣。その大きさは人の身長の数倍以上にまで達する。それでいて、その俊敏さは下位の魔獣とは比べものにならないぐらいに速い。

今のエリスでは荷が重いか。

セシルのその思いを裏付けるように、エリスが為す術もなく弾き

飛ばされた。

「 × ــــــــــــــــ!!!?!? 」

再び半狂乱になって言葉にならない悲鳴を上げるジェディ。今度は彼女だけでなくサクヤまでもが試合場に飛び込もうとする気配を見せるが、セシルがそれを制止した。

「セシル様?」

「僕が行くから、サクヤはジェディを止めてて」

セシルがそう言うと、しぶしぶジェディを預かるサクヤ。

「お気を付けて」

サクヤのその言葉には答えず、セシルは床を蹴る。

足跡と共に爆音を残して、そこからセシルの姿が掻き消えた。

腕を振り降ろそうとする魔獣とエリスの間に一瞬でセシルが割り込むと、その魔獣の攻撃を片手を掲げて軽々と受け止めてみせる。

その体勢のまま、セシルはエリスの顔を覗き込んで呼びかけた。

「エリス」

「え?」

セシルの顔を見てキョトンとした様子になるエリス。

その目に溜まっていたものを見て取り、セシルはエリスに意地悪そうに笑いかけた。

「また泣いてたの?」

「あ……いや！これは……」

慌てて流れ落ちそうになっていた涙を手で拭うエリス。

今さら取り繕っても泣き虫なのは知ってるのに  
と、セシルは心の中で呟く。

そんなやりとりの間にも、魔獣はセシルを叩き潰そうと反対側の腕を振り下ろしてきた。

セシルはそれも簡単に受け止めて見せる。上から押しつぶそうと、両腕で圧力をかける魔獣だが、セシルは涼しい顔でそれを受け止めていた。

「とりあえず、こいつをどうにかしないとね」

「ま、待ってくれ！」

その力に驚愕しつつも、エリスは焦ったような声でセシルに制止をかける。

「こいつは、私が倒さないと！」

「大丈夫。エリスの強さはもう十分に騎士団に伝わったよ」

セシルがそう言うと、エリスは素直に安堵した表情になった。

エリスには言わなかったが、強さを見せるべき観客達は数名の例外を除いて気絶しているので、これ以上エリスが戦っても意味はなかったりする。

騎士団員達に気絶してもらったのは、これからする戦いを見せてエリスの印象を薄めてしまわないための配慮だ。

セシルはエリスに自分から離れるように言いかけたが、見るとエリスはもうそこから一步も動けそうにない様子である。

ならば巻き込まないようにこの魔獣を攻撃するしかない。

セシルは魔獣の腕を掴んでいる手に力を込めると、無造作に上へと放り投げた。

軽いセシルの仕草とは裏腹に、魔獣の巨体は凄まじい速度で会場の上空へと昇っていく。その一連の流れに、エリスが口を開けたまま茫然としていた。

セシルは苦笑しながら、そんなエリスに言葉をかける。

「エリスもいつか、これぐらいできるようになるよ」

そう言ってセシルは空へと飛んでいく魔獣に視線を戻した。

上空へと押し上げる推進力が切れ、丁度空中で静止するタイミングを見計らって拳を固める。

思えば>気くは、徒手空拳が得意な自分には相性がぴったりだと改めて思う。

エリスは>遠当て<の強化版を>指弾<と言っていたがこれは何て名付けようか？

そんなことを思いながら、セシルは自身の拳を魔物の方角へと打ち出す。

膨大な>気<と絶大な臂力による超遠距離の>遠当て<。

風圧だけで試合場の土埃を盛大に巻き上げたそれは、遥か上空にいる魔獣の体を粉々に打ち砕いた。

文字通り一片の跡形もなく消し飛ぶ魔獣の体。それを確認すると、セシルが視線を前に戻す。そこには、上空を見つめたまま放心したようになっているエリスの姿があった。

その目が空からセシルの双眸に移り、しばし視線が絡み合う。

呆けたようにセシルを見つめるエリスに戸惑っていると、やがてその口からポツリと言葉が呟かれた。

「……セシル、お前は一体何者だ？」

その声色には疑心や畏怖がなく、むしろどこか陶醉したような響きを持っていたことが気になり、セシルは質問で返してみる。

「何者だと思う？」

セシルの切り返しにエリスは少し躊躇った後、上目遣いでおおずと答えた。

「て、天使……とか？」

「へ？」

予想外の答えに目を丸くした後、セシルは盛大に笑い声を上げてエリスを真っ赤にさせた。

「わ、笑うなあ！あんな凄い力を見せられたんだ！ちょっとそう思っってしまったかもしれないだろ！」

「だからって……て、天使って……あはははは」

「だから笑うなあああ！」

叫びながら、さらに顔を赤くするエリス。

そんな二人の会話の横から、割り込む声があった。

「だが、お前の正体には私も興味がある」

その無骨な声の主はサイラスである。

いつの間にか彼も試合場に飛び降りて来ていたらしい。エリスとは違い、サイラスの声には存分に警戒心が表れていた。まあ警戒心だけではなく、妙な感情も含まれていたようだったが、そっちは気にしないことにする。

どう答えたものかとセシルが頭を悩ませると、違う方向からサイラスを窺める声が響いた。

「相変わらず空気が読めないお方ですね。そんな無粋な質問は、今の二人の間に割って入ってするものではないでしょう」

見ると、ジエディを横抱きに抱えたサクヤが、観客席から飛び降りてきた所だった。サイラスがそれに、苦々しい顔で反論をする。

「お前にだけは言われたくない……」

……何やらかなり実感が込められた声だった気がした。そんなサイラスを無視するように、サクヤから降りてもらったジエディが慌ててエリスの元へと駆け寄る。

「ああ、痛そうな怪我がこんなに！？ もう、心配かけさせて！」

「ね、姉さん」

今にも泣き出しそうな様子で治癒魔法を構築するジエディと、それを見守るセシルとサクヤ。

その三人の様子に、サイラスは氣勢を削がれたようだった。

「まあいい。今は引き下がるとしよう。……部下達も起こさねばならんしな」

そう言い捨てて背中を見せる。

出入り口はセシルがいろいろ詰め込んで通れなくなってるので、サイラスは試合場の壁を駆け上って観客席のほうへ戻っていった。その時の足場に、>気<の技が使われていたのを視て、サイラスが>気<の使い手であることを確信する。

「では、私どもは帰りましょうか」

ジェデイの魔法でエリスの傷が治ったのを見届けると、サクヤがそう提案した。

「うう、私はまだ帰れないのよね」

頭を抱えて愚痴るジェデイ。まあ事件の後始末とかがあるんだろ  
うなあと考えていると、セシルもすぐには帰れない用事を思い出した。

「あ、出入り口を封鎖している荷物を片付けなきゃ」

セシルの力であれば造作もないことだが、全てを元の位置に戻す  
作業は骨が折れそうだ。そんなことを思っていると、サクヤがセシ  
ルの言葉に首を振った。

「いえ、そちらは私にお任せ下さい」

そう言いながら、傷は治っても未だ立てそうにないエリスを横抱  
きに抱える。そして、そのままの体勢でセシルに渡した。

自然とセシルがエリスを横抱きに行っている構図が出来上がる。

「ふえ？」

突然のことに、エリスが素っ頓狂な声を上げた。その顔が、みるみるうちに赤くなっていく。

「今夜だけは、その場所をお譲りいたします。エリスお嬢様」

何やら不穏な言葉をかけるサクヤ。反面、未だにセシルを女性だと勘違いしているジエディは、エリスの反応に首を傾げるばかりだった。

いきなりのことに戸惑ったセシルだが、腕の中で真っ赤になって慌てふためくエリスを見てどうでもよくなる。

「じゃあ、帰ろうか？」

顔を上気させたまま頷くエリスに、セシルは笑いかけた。

その両腕にエリスの重さを感じながら、セシルは思う。  
今日のことエリスは変わったのだろうか？

漠然とした期待と一抹の不安を胸に残したまま、その日の夜は幕を閉じていった。

## 第十六話 一人の英雄のプロローグ

リチャードとの戦いが終わって数日後。

綿のような雲が太陽の日差しを遮り、暗がりを感じて落としている昼下がりの鍛錬場で、エリスは一振りの剣を手に持ったままずっとそれを眺めていた。

全体的に地味ではあるが、剣身を納める鞘には赤い獅子をかたどった意匠が施されたている剣。

この国の独自の技術で対魔獣用に作られた特別な代物。  
イルレオーネ守護騎士団の騎士である証。

昨日、エリスはサイラスからこの剣を受け取っていた。

それはイルレオーネ守護騎士団への入団を、認められたことを意味する。正式な採用は、一月後の式典で大会からの採用者と一緒にとのことだが、エリスはもう騎士の一員だと言ってよかった。

聞けば、このような特例はたびたび行っているのだとか。今の採用方法だけだと、人材不足が著しいらしい。将来的に大会での採用枠を増やす案もあるとサイラスは言っていた。

エリスはその剣を掲げて、朝からずっと眺めている。

それは、エリスがずっと欲しかったものだ。

だというのに、その剣を眺めるエリスの心は晴れない。

そんなエリスの背中に声がかかった。

「何だか、祝っていいのか迷う顔だね」

エリスには、視線を向けなくてもそれが誰か分かった。

少し前からこの屋敷に居候しているセシルである。

「ずっと入団したかったんじゃないの？」

「そうだ」

「……嬉しくないの？」

「嬉しい……嬉しいはずなんだ」

実際、この剣を贈られた昨日は歓喜した。嬉しさのあまり、この剣を抱いて寝ようとしてサクヤに窘められたぐらいだ。

だが今日になって、何か胸にポツカリと穴が空いたような気分になっっていた。

あれだけ渴望していたはずの剣に、妙な虚しさを感じる。その正体が分からず、朝からずっと剣を眺めていたのだ。

「まあ、こうなるのはちょっと予想してたんだけどね」

「そうなのか？」

「だって、多分エリスにとって騎士団は、目的じゃなくて手段でしょ？」

「……そうだな」

セシルに言われ、エリスは何となく自分のこの気持ちの正体が見えてきた。

エリスは世界に受け入れられなくて騎士団を目指すようになったのだ。希望に向かって走ることがエリスの中に火を灯していた。

だが実際に入団する夢が叶うと、これまで自分を支えてきた熱量が消えてしまった。そして冷静になってしまう。

結局、自分自身にある事実は何も変わっていないのだ。自分が人間ではないという事実が。

目標に到着したことで足を動かす理由を無くし、そして目標とした場所は幻だった。

エリスは理解すると、今度は理解したことを後悔した。これまで生きてきた支えを一度に全て失った気分である。

酷く気を落ち込ませると、今度は数日前のリチャードの末路を思い出す。

忘れようと思っても忘れられるはずがない、自分の同類の末路。エリスは不安に駆られて、セシルに話しかけていた。

「セシル」

「ん？」

「私もいつか、リチャードと同じように……人を襲いたいと思うようになってしまふのだろうか？」

「え？　なんで？」

セシルは気を遣っているのだろうか？本気で分かっているなさそうな顔で首を傾げる。

「リチャードを見抜いた能力だ。お前なら視えるのだろうか？　私の身体のことか」

「うん、視えるけど……それでエリスの魔力のことが分かったんだし」

「……ん？」

何か変ではないだろうか？妙な違和感というか矛盾がある気がする。

どうにもセシルと会話が噛み合わない。

そこでエリスは一つの可能性に思い当たった。  
長年に渡る盛大な勘違い。

それを確かめるために、エリスはセシルにそれを聞いてみることにした。

「なあ、セシル」

「うん？」

「……私は人間か？」

「どう見ても人間だね」

あっさりと返ってくるその答え。

その答えに、エリスは胸の中で様々な感情が爆発した。

「なっ、なんでまた泣いてるの!？」

エリスが突然号泣しだしたことに、セシルが狼狽える。

「ひ、ひひゃうんだ(ち、違うんだ)」

「何言ってるか分からないよ……」

上手く喋れないぐらいに自分の中で感情が暴れる。

エリスは喋るのを諦め、その激情が収まるのを待った。

でも、無理だ。セシルには悪いが、この涙は当分止められそうになかった。

ひとしきり泣いた後、やっとエリスの涙が止まったその時まで、セシルは何も言わずに傍にいてくれた。

自分ではそんなことないと否定していたが、やっぱりエリスには

セシルが優しく思える。

それに

.....。

ふと雲の隙間から太陽の光が射し込み、二人を照した。  
それにエリスが目を細めながら、声を上げる。

「セシル」

「うん」

「私は、とりあえず騎士団で頑張ってみようと思う」

「うん」

「騎士の模倣じゃなくて、騎士になるんだ。演技ではなく、私が本気で人を助けたいと願えるようになったら、私は……」

風が吹き、その続きの言葉が空へと掻き消える。

日溜まりの中に立つエリスは、その太陽が再び雲に隠れるまです  
っと眺めていた。

## 閑話 内界に届け

地上の遙か上空を漂う国、アースガルズ。

その中心点にそびえ立つ城、グラスヘイムには衛兵がいない。

その城の主の影響により、そこに一歩足を踏み入れれば死が待っているのはこの国の誰もが知っていることである。

わざわざ自ら死地に飛び込むような愚かな侵入者は皆無だった。

故に衛兵を置く必要がない。たとえ置いたとしても、その衛兵さえ城の中に入れば息絶えてしまうだろう。

この城で生きていられるのは、たった一四人の例外だけである。

そんな城の回廊を、悠々と歩む一人の女性の姿があった。

濡れた黒髪をその豊富な胸に張り付かせ、なめらかな褐色の肌には微かに蒸気が立ち上っている。金色の双眸を弛ませ、上機嫌に鼻歌を歌いながら闊歩する姿には、本来あるべき肌を隠すものを一切身につけていなかった。

つまりは全裸だった。

「陛下あ！ 陛下あ！」

その女性を慌てて呼び止める壮年の女性が一人。

その顔に深いしわを刻み、実年齢以上に老け込んでしまったような白髪の女性は、自身が陛下と呼んだ女性の前に回り込んだ。

「なんじゃアイリス？ 妾は風呂上がりの散歩中じゃぞ。妊娠報告なら後にせい」

「違います！ 私の歳を考えて下さい！」

「む……まさかその歳にしてもう止まっ」

「まだ私は止まってません！ ………………じゃなくて！ どうか服を

お召しになって下さい！ 城内には男性の>数字持ち<の方もおられるのですよ!？」

そう諫めながら、持ってきた衣服を差し出そうとするアイリスに、陛下と呼ばれた女性はニヤリと笑った。差し出された服を無視して、逆にアイリスの服を引っ張り始める。

「よいではないか。一緒に見せつけてやろうぞ。お主も、体のほうはまだまだ捨てたものではあるまい？」

「ふ、服を脱がそうとしないで下さい!あ、やめっ」

必死な抵抗と静止の声も届かず、アイリスの衣服が力に耐えられずに破れてしまった。

「つぎええええええええ!？」

「……もつと可愛い悲鳴をあげよ」

「それはちよつと躊躇う歳なんです……」

意外と冷静に返しながら、破れてしまった衣服を何とか取り繕うアイリス。ポロポロになりながらも、今は陛下に服を着せることが先決とばかりに、もう一度彼女の服を差し出した。

「とにかく服を着て下さい! 陛下は女性なのですよ!？」

しつこいアイリスの諫言に、陛下と呼ばれた女性は不満そうに唇を尖らせる。

「むう、心配せんでも妾を押し倒せる奴がおると思つてか?それに、子作りは常に推奨されておるぞ。妾もそろそろ跡継ぎを産んでもいい年頃じゃ」

「そういう問題ではありません！もつと恥じらいを持って下さい！」  
「恥じらいなら誰よりも持つておるぞ？なんとまだ生娘じゃ！」  
「…………え？」

何とも反応に困る告白を聞き、アイリスの時間が止まる。

虚しい風が吹き抜け、陛下と呼ばれた女性がくしゅんと鼻を鳴らした。

「ほら、風邪を引かれますよ」

「阿呆、妾が病気になるわけなかるう」

鼻をすすりつつも、顎に手を添えて目をつむる。そんな思慮深そうな仕草をしながら、この国の頂点に立つ女王は断言した。

「これはあれじゃ。きっとセシルが妾のことを思っているのじゃ」  
「はあ…………」

「まだ六日しか経っておらぬというのに、もう妾が恋しいか」

嬉しそうに言い切る彼女には悪いが、アイリスにはあのセシルが陛下を恋しがるようには思えなかった。むしろ恋しがってるのは陛下のように見える。

「愛いやつよの、愛いやつよの…………やはり一年は長すぎたと思  
うんじゃが、どうしたものが…………」  
「陛下…………」

遠い目をしながら、少し寂しげに回廊を歩きはじめる女王。  
その背中に、アイリスは言葉をかけられなかった。  
思わず、そんな湿っぽい空気に流されかけ

「そついえば奴も、妾がこうして歩いておつた時は大騒ぎしておつたの」

さりげなく全裸のままバルコニーのある方向に歩んでいく女王。  
外部の民衆にもよく見える場所に出て行こうとする彼女に、アイリスは再び声を張り上げた。

「へ、陛下あああああ！ それだけはあああああああああ」

内界とは比べものにならないほどの強力な魔獣が跋扈するはずの外界にして、アースガルズは今日も平和だった。

## 第十七話 舞い降りる天災

地上より遙か上空。

雲一つ見当たらず、清々しい快晴であるはずのそこには、人々の悪夢が存在していた。

不幸にもそれを目撃してしまった者は、世界の終わりを予感する。ある者は恐怖に駆られて姿を隠し、ある者は膝を折って救いを求める祈りを捧げた。

皆が、その世界の敵と言つべきものに恐怖した。

皆が、その存在に絶望的な力の差を感じた。

皆が、その正体を漠然と察した。

空に蠢く漆黒の塊。それは地上のどんな城よりも巨大な魔獣だった。

地上からは雲と区別のつかない高さに存在する不可視の結界を足場にして、それは四本の足で悠々と闊歩する。そこに追従するすのかのように、無数の魔獣達がそれを取り囲んでいた。

地上から見れば、それは魔獣の軍隊のようにはしか見えない。

あれは今から天界に攻め征くのだ。

とうとう冥界が本格的な戦争がはじめたのだ。

それを目にした人々は、口々にそう囁き合う。

内界でそんな噂になっていることもつゆ知らず、結界の上ではその巨大な魔獣に立ちはだかる者がいた。

長い亜麻色の髪に、過剰なほどにフリルの付いた豪華なドレスを

身に纏った少女。

その赤いドレスは、淑やかな印象の落ち着いた面差しによく似合っ  
てはいたが、凶悪な魔獣達と対峙するにはあまりに場違いな格好  
だった。

しかもその少女の体は、戦う者というにはあまりに細く心許ない。  
ましてや多くの魔獣を取り巻きにし、あたかも王者のごとく振る  
舞っている巨大な魔獣と対峙するには、少女はあまりに脆弱に見え  
た。

いや、その魔獣に比べれば人間全てが脆弱に見えるだろう。  
人間の大きさでは、その巨体の足先程度でしかないのだ。

だがその巨体を前にして、その少女に臆した様子は微塵もない。  
むしろ、その魔獣を視界に収めている緑の双眸には余裕が浮かんで  
いた。

社交に慣れた女性が、さえない男をダンスに誘う気軽さで、その  
少女の後方に控えていた数人の男達に声をかける。

少女とは違い、その男達はいずれも統一された外套を羽織ってい  
た。

「残念ですわ。最上位クラスにしてはたいした大きさではないよう  
ですの」

事も無げにそう言ってみせる少女に、男達は誰も答えなかった。

少女が言う最上位クラスがどれ程のものなのか、男達には分から  
ないのだ。

その一つ下のクラスである、上位クラスの魔獣でも一人では敵わ  
ないのである。最上位クラスと直接戦うことはなく、さらにはそれ  
を目撃する機会さえ今までなかった。

男達の反応がないことに少女が小さく肩を竦めると、予め決めて

いた指示を改めて伝える。

「あの本命はわたくしが仕留めます。貴方たちは周りの露払いをお願いいたしますわ」

男達は、誰もそれに異議を唱えずに頷いた。

最上位クラスと戦って勝てるのは>数字持ちくだけ。

それが彼らの常識である。

異議があるはずなかった。

実はその>数字持ちくである少女にとっては、露払いさえも必要なかったりする。むしろ近くでうるちよろされると、戦いに巻き込んでしまいそうであり辛いぐらいであった。

だがこれは、>魔紋くを刻んだ若い兵士達の訓練代わりでもある。

その男達の誰もが、はじめて見る>数字持ちくの戦いに興奮していた。その様子に、少女は苦笑せざる得ない。

「余所見のしすぎで、死なないように」

念のため、それだけは言っておいた。

それ以上は何を言っても無駄であると、そのキラキラした瞳らを見て悟っている。

男達が少女の言葉を受けて散開すると、改めてその巨大な魔獣を視界に収めた。

相手の動きに注意しながら、少女は右手を上空に掲げる。

その少女の右の手の平に、小さな黒い球体が生まれたかと思うと、

みるみるうちにそれが巨大化していった。

やがてその球体の大きさが少女の身長軽く数倍以上にまで達すると、今度はそれに線材を環状にしたものが付随していく。

いわゆる、無からの金属精製。それが少女の能力だった。

「……皆さんには悪いけど、あれならすぐに終わってしまいますわ」

あえて男達に聞こえない声量で呟き、謝罪する。

あつという間に鉄球を作りだした少女は、それを力の限り魔獣へと投げつけた。

鉄球が飛来する速度に魔獣は反応を見せたものの、まったく避けられずに衝突する。そのあまりの威力に、凄まじい轟音を上げて魔獣の巨体が浮き上がった。

投げた鉄球が魔獣の体内へと埋没する。

そのタイミングを見計らって、少女は鉄球の形状を、無数の針が放射線状に突き出したものへと変化させた。

巨大な魔獣の内側から、無数の針が体を突き破って外に現れる。まるでハリネズミのようになった魔獣を見て、少女は首を傾げた。

手応えがなさすぎる。

そう思ったのも束の間、少女が攻撃した魔獣が急激に膨張した。

「……っ!?!? 皆さん! 避けて下さいまし!」

強化された肺から生まれる巨大な声量で、少女は離れた場所にいる男達に警告する。

その直後に、その巨大な魔獣が派手な轟音を鳴らして四散した。それは周囲を取り巻いていた魔獣をも巻き込み、広がっていく。

少女は咄嗟に、等身大の盾を精製してその衝撃波を防いだ。

相手の外観だけを見て自分が油断していたことに、内心舌打ちをする。

あの銀髪の少年の能力でない限り、その魔獣の本質など見抜けないというのに、少女は勝手に見切った気になってしまっていた。

ごくたまにだが、最上位クラスの魔獣は特殊能力を備えている場合がある。話には聞いていたが、少女はまだ遭遇したことがなく、その可能性を失念していたのだ。

酷い失態である。自分一人ならば簡単に無傷で乗り切れるだろうが、今回はそれだけじゃない。

少女は男達の安否が気になったが、すぐにそれを気にしている余裕のない事態が襲いかかった。

内界へと落ちていく魔獣の残骸。

それが、生きて体を動かす様を少女は視界の端に捉えた。

四散した魔獣のその破片の一つ一つが、小さな魔獣となって内界へと入っていくのだ。

「まさか、分裂しましたの!？」

そんな特殊能力を持つ魔獣は初耳だった。

その予想外の事態に、少女は嫌な予感を覚える。

多くの魔獣が内界へと侵入してしまったが、それが結界を素通りできる下位魔獣のままなら問題はない。

だがもし、四散した後で再結合が可能なら？

それは最上位クラスの魔獣が内界へと侵入してしまったことを意味する。

だが少女は内界へと入ることができないので、それをただ見送るしかなかった。

齒噛みしながら内界を見下ろす少女の元へと、散開していた男達が戻ってくる。

全員無傷ではなかったが、重症の者は誰もいなかったようだ。その事実、少女はひとまず安堵の溜息をつく。

だがすぐに、その少女の表情が凍り付くことになった。まるで天啓のように空から降ってきた言葉によって。

『大失態、おめでとうじゃの〜』

「へ、陛下……」

あのドS女の声に、少女は内界の人々の行く末ではなく、自分の行く末に絶望した。思わず体から力が抜け、結界の上で四つん這いになってしまう。

『何やら期待されているところ悪いのじゃが、お仕置きは後じゃ。』

今すぐ落ちていった魔獣を追え』

「……………え？」

女王のその言葉に、少女は驚いて顔を上げた。

「よろしいのですの？」

『よろしいも何も、あれを放置したら内界の人間はほぼ全滅じゃろ』

……………

「ですが陛下は……………」

『いいから行けい。妾が今から入り口を作ってやる』

少女の言葉を遮り、女王がそう言い切る。

やがてこの場所よりさらに上空から、光で構成された文字の塊と  
いべきものが少女達のほうへと飛来してきた。

『隙間ができるのは一瞬じゃぞ。そこに飛び入れ。ちなみに失敗し  
たら数日は入れん』

「それを寸前で言わないで下さいまし！」

光の文字列の塊が結界に着弾すると、その部分に文字の輪が出来  
上がるのを少女の目が捉えた。

その輪の中心に体を躍り込ませる。

わりとギリギリのタイミングで穴が消失するが、それを見送って  
いた男達には少女の動きがまるで見えなかった。

少女が逆さまになって落下してくと、その途中である者達と遭遇  
した。

魔獣でいうと中位クラスから上位クラスの間ぐらいの巨躯。その  
大きな体を二枚の翼で空に舞わせる、爬虫類によく似た生物だ。

少女が外界で得た知識によると、彼らは内界の空の守護者である  
ドラゴンと呼ばれる種族である。

空から落下してくる魔獣の群れを掃討しはじめたドラゴン達に、  
少女は手を振った。

「皆さんこんにちわ。よろしければ、わたくしを回収して下さい

まし〜」

このまま地上に着地しても無事である自信はあるが、それよりはその背中に乗せてもらったほうがいいと思ったのだ。

優雅に手を振る少女にドラゴンが気がつき、その口を大きく開いて応じる。

少女はそのドラゴンに、なるべく淑やかさを心がけて笑いかけた。

直後、そのドラゴンの口から強力なブレスが吐き出された。

自由落下中の少女はそれを避けることができず、その火を全身に浴びる。

> 魔紋くによって強化された体には火傷一つ付かなかったが、その身に纏っていたドレスは全て消し飛んだ。下着も一緒に含めて。

「……ゴホッ」

軽く咳き込むと、口から肺に溜まった煙が吐き出される。> 魔紋くでは汚れまでは防げないので、髪の毛が煤だらけになっていた。口の中も真っ黒である。

余談だが、消し飛んだドレスは少女にとってお気に入りだった。

さらに余談だが、艶やかに仕上げた亜麻色の髪と白い歯は、彼女の自慢だった。

さらにさらに余談だが、彼女は外界ではある異名で呼ばれていた。

全裸で自由落下する少女は、自分の攻撃が効かなかったことに困惑しているドラゴンに再び笑いかける。

そして叫んだ。

「死にさらせやこのトカゲどもおおおおおおおおおおお  
おお!!」

一瞬で鉄球を作りだした少女は、それをドラゴン達に向かって投  
擲する。

鬼の形相をした淑女の一方的な蹂躪がはじまった。

曰く、限りなく破れやすい面の皮

曰く、導火線の短い爆弾

曰く、なんちゃってお嬢様

外界から、天災が内界に舞い降りた。

## 第十八話 危険な温泉宿 ？

イルレオーネの王都から北へ、馬車で約三日から四日はかかる場所  
所にその街はあった。

トランテスタという小国の中でも随一の大きさを誇るロスラヴリ  
という街。山を切り開いて築き上げられたその街は見渡す限り、い  
たる所から蒸気が立ち昇っている。

ロスラヴリは、近辺では珍しい温泉が沸く観光都市だった。

毎年沢山の観光客で賑わうこの街は、売りとしている温泉の性質  
上、春売りが多い都市である。街の中ではそれ専門の宿と通常の宿  
は明確に別れるよう配慮されているが、キルストア教徒などからは  
ロスラヴリ全体を指してふしだらな街だと揶揄されやすい嫌いがあ  
った。

だがそれでも全く廃れないどころか、春売りの専門店のほうが繁  
盛していたりする。公的にゆるい下半身を発散できる場所に、つい  
足を運んでしまうのは男の性と言えよう。

「ですが、今回私が案内させていただく店は通常の宿のほうです。  
セシル様には非常に申し訳ないのですが」  
「僕が下半身ゆるいみたいには言わないでくれるかな……」

夕方にその街に到着して、開口一番に放たれたサクヤの言葉にセ  
シルは頂垂れた。

そんなセシルとは裏腹に、エリスは少し疲れを見せながらも感動  
した様子でその街を見回している。

「まさか、この場所に来るのに自分の足で一日とはな……」

エリスは街の外観ではなく自分の力に感動していたようだった。セシルとエリスは、王都から馬車で三日かかる距離を走ってきたのである。ちなみにサクヤはセシルが横抱きにして走った。

エリスが騎士団への入団を認められてから約半月。

正式な騎士になる式典の前祝いとしてこの街に遊びに来ることになったのだが、王都を離れられる期間の半分が馬車の上では勿体ないということで、セシルは走っていくことを提案したのだ。

ジェディは宮廷魔術師の仕事があるために来られなかったもので、ここにはいない。本来来るべき人がおらず、自分がこの旅行に同行していることに、セシルは少し心苦しく感じていた。

「ねえ、本当に僕も来てよかったの？」

「何を言うか。友人を旅行に誘うのは普通のことだろう？」

「いや、その費用が全部エリス持ちなのは普通じゃないと思う……」

「そうとも限りませんよ。セシル様のような殿方を巷では>ヒモ<と敬称して、大陸中のあらゆる女性が匿って愛でているという噂を耳にしたことがございます」

「ヒモ？」

「サクヤ、それ知っててわざと言っててるよね？」

今日は、どうも朝からサクヤのドSぶりに磨きがかかっている気がするセシルである。

今回、滞在することになった宿はそのサクヤの紹介だった。何やら通常の宿とは一風変わった所だそうだ。サクヤのお勧めということで、その宿の変わり具合にも凄く不安を感じるのだが、エリスは何故か全面的に信用しているようである。

一体どんな場所が待ち受けているのか怖くなり、足取りを重くす

るセシルだったが、案内された宿は事前の予想とは違う変わり具合だった。

その構成に通常よりも多くの木材が使われ、屋根は瓦と呼ばれる漆黒の建材に覆われた旅亭。イルレオーネとも外界のアーヌガルズとも全く趣の種類が異なるその建物は、立ち並ぶ温泉宿の中でも特に異彩を放っていた。

「私の祖国のものを、模倣して建てられたものでございます」

サクヤが軽くそう説明すると、その宿の入り口らしき場所の扉に手をかけた。その扉にドアノブはなく、サクヤはそのまま横にずらすようにして入り口を開く。

その様子を眺めて、セシルは少し楽しくなってきた。

物珍しいものを見て、好奇心がくすぐられたのである。セシルは早速サクヤの後に続いて中に入ると、その内装をキョロキョロと見回した。

派手な装飾こそないが、元の木材の色を生かして上品に仕上げられたそこは、外の喧騒とは切り離されたように静寂が漂っている。木の柔らかい印象と、この街全体を包む温泉の匂いともあいまって、それはどこか心が落ち着くような静けさであった。

セシルに続いて中に入ってきたエリスも、同じ印象を受けたようである。

「いい雰囲気だな。何かこう、気持ちがやわらぐというか……」

「うん。僕こつというの好きかも」

「気に入っていただけで何よりです」

三人が中に入ると、異国風の衣装に身を包んだ壮年の女性が出迎えてくれた。その衣服とは裏腹に、髪の色はイルレオーネでよく見かける金髪である。どうやら別にサクヤの故郷の人間が働いているわけではないようだ。

「ようこそいらっしやいませ、エリス・ムーア様御一行ですね。お待ちしております」

姿を見ただけで客が誰なのかを理解したその対応に、セシルは首を傾げた。

そんなセシルの反応に、サクヤが補足をしてくれる。

「今日から私達が滞在する間、この宿は貸し切りにさせていただきますました」

「いつのまにそんな手配を……」

「できるメイドの嗜みでございます」

さり気なく自分を称賛するサクヤに、呆れ顔になるセシル。だがエリスは、素直にサクヤに感心していた。

「わりと急に決めたつもりだったから、最悪空いている宿を探し回るハメになると思っていたのだが……凄いなサクヤは」

「それほどでもございません」

無表情で応じるサクヤに一瞬、ん？とした顔になるエリス。

この時にセシルは察するべきだった。今日のサクヤは、何かがおかしいと。

だが今は何の疑心も抱くことはなく、セシルはこれから入ることになる温泉のことを考えて、期待に胸を膨らませていた。

「ねえ、サクヤ。この街の温泉って珍しいんでしょ？一体どんな効能があるの？」

「主なものは美容と健康。後は精力増強でしょうか」  
「……え？」

何やら聞き捨てならない効能が混じっていたような気がする。  
セシルは恐る恐る、もう一度サクヤに聞き返した。

「ごめん、もう一度お願い」

「美容と健康。そして精力増強でございます」

「何それ!？」

思わず声を大きくしたセシルだったが、エリスはその反応に不思議そうに首を傾げた。

「何か変なのか？」

「セシル様はどうやら、精力増強に卑猥なものを連想なされたようです。別に精力増強がそれに繋がるとは限りませんが……セシル様もやはり殿方なのですな」

「え……あ……」

それもそうだとセシルは考えを改めた。どうも最近サクヤに毒されすぎている気がする。自分にとってこの休養はいい機会なのかもしれない。

エリス達を出迎えた壮年の女性の案内で、セシルは畳と呼ばれる床が広がる部屋に入った。

その部屋の端にある、壺が飾られた一角。その上にある掛け軸の、闘魂一発という文字にさえセシルは妙な卑猥さを感じ、やはり自分

がおかしくなっているのだと自覚する。

これは早々に風呂に入って気を休めるべきだ。

セシルはそう思い、案内をしてくれた女性に宿の温泉の位置を聞いた。

それを確認したサクヤが、素早くエリスの傍へと寄る。

「エリスお嬢様。私達も温泉へと赴きましょう」

「え？私はもう少しこの宿を見て回りたいのだが……」

「いえ、まずは温泉に入るべきです。宿を見回るのはその後がよろしいかと……」

サクヤの不自然な行動に、セシルの中で眠りかけていた警戒心が復活した。

念のため、目の前にいる壮年の女性に確認をする。

「まさか、この宿のお風呂って混浴だったりしないよね？」

「いえ、違いますよ。売春宿との区別をはっきりさせるため、この街の通常の温泉は男女別に分けるよう規定されております。それに、何より今日は貸し切りですので、裸体を男性の方に見られる心配はございません。どうかご安心下さい」

「う、うん。ありがとう」

どうやらこの人もセシルのことを女だと勘違いしているようだ。

まるで淑やかな少女を微笑ましく見るように、その琥珀色の瞳が細められている。

まあ例によってセシルの服装はメイド服のままなので、仕方がないことだとは思うが……。

セシルが落ち込む前に、いつの間にか風呂場に行く準備を終えたサクヤがそつと新しい衣服を手渡してきた。

この宿のものだろうか？

異国風の衣装を手渡されたセシルが、サクヤの顔を見る。

「浴衣と呼ばれる服です。そのお姿のまままで男湯に入るのは気が引けることでしょう。この宿に滞在する間は、それを着用になって下さい」

久しぶりの女物じゃない衣服に、セシルは泣きそうになった。

サクヤはセシルに衣装を手渡すと、エリスを連れてさっさと風呂のほうへと歩いていってしまう。

そのお陰で、復活しかけた警戒心がいくらか落ち着いた。先に女風呂に入ったのなら、少なくとも後から男風呂に突入してくるということはなさそうだ。

そう思うと、セシルは再び温泉への期待が膨れていくのを自覚した。

セシルはわりと風呂好きだったりする。

だが外界にいた時も女王の乱入にビクビクして心休まる入浴がなかった。

セシルは鼻歌を歌いながら男風呂にまで来ると、その脱衣場にかでかかと掲げられた文字に沈黙した。

布類は絶対に持ち入らないで下さい。マナー違反です

湯に浸けるなどというのは聞いたことがあるが、持ちはいるなどは初耳だ。

「……」

セシルは少し迷った後、しっかりと腰に布を巻いて入ることにした。

なぜかよく分からない。

だがセシルの本能がそうしると囁いた。

## 第十九話 危険な温泉宿 ?

女性側の風呂場に繋がる脱衣場。

そこで服を脱いでいたエリスは、胸に巻いたサラシと女性用の褌という出で立ちのまま中で入っついていこうとするサクヤに、戸惑った声を上げた。

「サクヤ？ 布類を持ち入るなど書いてあるのだが、その格好はま  
ずくないか？」

「ああ、それは偽物ですのでお気になさらず。それよりも、お急ぎ  
下さい」  
「？」

エリスは首を傾げつつも、サクヤが何やら企んでそうな気配を感じ取る。だから念のため、自分も広幅の布でしっかりと身体を隠すことにした。

急かされるままに風呂場に入ると、サクヤは早足で露天風呂の方  
へと移動しようとする。

「サクヤ、ここに『露天風呂に行かれる前に掛け湯を念入りにして  
下さい』と書いてあるのだが・・・」

「それも偽物です。時間がありません、お急ぎを」  
「??？」

先ほどから一体なにを急いでいるのだろうか？

サクヤの行動が理解できない内に、エリスは促されるまま露天風呂にまで来てしまった。

輝くような白濁色の湯に感動する暇もなく、サクヤが奥の壁際の

部分にまで歩み寄る。

壁の向こう側も湯気が立ち上っていることから、あつちは男性用の露天風呂になっているらしいとエリスは推測した。

その男風呂と女風呂を隔てる壁にて、サクヤがエリスを手招きする。

エリスが傍に寄ってきたのを確認すると、サクヤはその壁を軽く押して見せた。

その壁の一部分が、横に回転するように浮き上がる。丁度、一人分が通れる隠し通路と言つべきものがそこにはあった。

「な、何だこれは!?! この宿は何を考えている!?!」

「お静かに。これは私が事前に作らせておいたものです」

「ええ?」

その頃には何となくサクヤがやるうとしていないことに察しがついた。だがこれは、あまりに度が過ぎていてのではないかと思い、エリスはサクヤを窘めようとする。

「サクヤ、これはいくらなんでもセシルに悪いだろ」

「そうでしょうか? 殿方とは、異性との混浴は大変喜ばれるものかと」

「そ、そういうものか? だがそれなら、まずセシルの同意を得てだな……」

「ですが、殿方とは見栄を張って素直になれぬもの。紳士を気取られるあまり、本当はご一緒したくても断ってしまわれるのです」

「……むう」

そっちの知識にうといエリスは、結局言いくるめられてしまった。だがそれでも、向こう側に自分まで一緒に行くことは拒否する。

「は、恥ずかしいから私はいい。サクヤだけで行ってくれ」

「エリスお嬢様がおられるなら、セシル様は一層お喜びになられると思いますよ？ 丁度、お礼もしたかったのではないですか？」

「そうか？ で、でも……」

「それに、エリスお嬢様も興味がおありでは？ セシル様のお体に

……」

「かつ、かかか……か」

思わず想像してしまい、顔が熱くなってしまう。

でも正直な所、セシル限定ならば興味がある。それはもう凄く興味がある。

でもそれは、エリスもセシルに見られることを意味するのであり・

・

と、その場面をも想像してしまい、エリスの羞恥心が限界に達した。

「む、無理だ！ 恥ずかしすぎる！」

「ならば、見られなければよろしいのです」

「へ？」

その言葉が理解できず困惑している隙に、サクヤがエリスの手を引いて向こう側へと入ってしまった。

「さあ、急いでこちらへ」

「お、おい？」

そのまま露天風呂に設置された大きな岩の影へと二人は身を潜める。セシルはまだ中に入って来ていないらしく、サクヤの視線は露

天風呂の入り口へと注がれていた。  
しばし、二人とも沈黙する。

「……」

「……」

「……あの、サクヤ？」

「なんでしょう？」

「これでは混浴ではなくて覗きではないか？」

「気のせいです」

「そ、そうか？」

「気のせいです」

力強く断言されて、エリスも気のせいかと思ってしまった。

それでも、半裸の女性二人が物陰に隠れて様子を伺っているこの  
構図はなんとも……

「サクヤ、私は女性として何か間違っている気がするのだが」

「気のせいです」

「そ、そうか？」

「気のせいです」

そうか。気のせいか。

風呂に入る前に上せてしまったエリスの頭は正常な判断力を失っ  
ていた。

やがて鼻歌を歌いながらセシルが中に入ってくると、二人はそれ  
を凝視する。

細身ながらもしっかりと引き締まったその体を見ただけで、エリ

スが卒倒しそうになった。その反面、サクヤはその腰に巻かれた布に舌打ちをする。

「あの文字は逆に警戒心を煽ってしまいましたか。これは失策でした」

「サ、サクヤ？ 何を？」

「……エリスお嬢様、セシル様のあの布の下をご覧になりたくはありませんか？」

「ふえ？ ……！ ……？」

思わず大声を出しそうになったエリスの口を、サクヤの手が素早く塞ぐ。

「お静かに。勘づかれてしまいます」

「つぶは。だ、だがそれはいくら何でも……」

解放された口から出る抗議の声を、途中で遮ってサクヤは言った。

「ですが、よくお考えになって下さい」

「何を？」

「エリスお嬢様は一度、セシル様に全てを見られておられるのですよ？ これでは不公平ではありませんか？」

「……」

エリスはセシルに、魔紋くを刻んでもらった時のことを思い出してしまった。

そうだ、あの時は痛みを我慢するのに必死でよく分かっていたが……思い返すと姿勢が崩れていた上に、全く身体を隠してなかった気がする。つまりそれは、もう隅から隅まで見られてしま

った可能性が高いわけで……とそこまで考えてしまった所で、エリスが壊れた。

「けはあ……」

「奇声を上げている場合ではありません。『やられたらやりかえせ』の精神でございませぬ、エリスお嬢様」

「ヤラレタラヤリカエセ……」

「そうでございます。ですが、あの布を取り払うのは困難……まずはセシル様に湯の効能が表れるのを待ちましょう」

セシルが鼻歌を続行させながら湯に浸かる様を、二人でしばらく眺める。

その間に、エリスの頭が若干冷えたようだった。

思えばエリス達はまだ一度も湯に浸かってないのだ。

「……サクヤ、寒いのだが。もう色々な意味で」

「我慢して下さい」

隠れている岩から女湯に戻ろうとすると、セシルに姿を晒してしまつので引き返すことができなかつたりする。まさかここまでサクヤは計算していたのだろうか？

半ばヤケになってきたエリスは、サクヤが一体どうするつもりなのか質問してみた。

「湯の効能が表れるまでと言うが、それが何か打開策に繋がるのか？」

「精力増強の効能は殿方を元気にします。つまりそこに少しの刺激を与えてやれば……」

「やれば？」

「小さな布では隠しきれぬものが姿を現すはずでございます」  
「ふむ？」

エリスはそつち方面の知識がかなり間違っているのも、漠然とセシルの全身が狼のような毛皮に覆われ、凶暴化する様を思い描いた。

「……………危険ではないか？」

「……………エリスお嬢様は追々、正しい性教育をお受けになる必要があります」  
「りそうです」

そんな会話をしていると、やがて断続的に聞こえていた鼻歌が止まり、セシルが湯から腰を上げた。

「今です！」

「え？」

その鋭い声と共に、サクヤが唐突にエリスの体を担ぎ上げる。

「サクヤ、何を」

「破っ！」

エリスの言葉が終わる前に、サクヤが力を込めてエリスを投げ飛ばした。

盛大に水柱を上げて湯に飛び込むエリスに、当然セシルが驚いてそこに視線を向ける。

期せずして目が合うセシルとエリス。

「エ、エリス？ 一体なにを……………」

「ち、違うんだこれは！」

慌てて言い訳をしようとして立ち上がるエリスに、セシルの声が止まった。その視線が、エリスの目からやや下へと移動する。

それにつられて、エリスも自分の姿を見た。

投げ飛ばされた反動で、当然のごとく巻いていた広幅の布は取れてしまっている。

その下には何も付けていなかったの……

「はきゅ〜」

エリスは奇声を上げると、全身を真っ赤にさせて気絶した。

「まったく何をやってるんだか……」

セシルは、俯せの体勢で湯にぶかぶかと浮かんでいる状態のエリスを見て、呆れたようにぼやいた。

一体何がどうなってエリスがここにいるのか理解できない。  
だが、このままエリスを放っておくわけにはいかなかった。  
とりあえず湯から引き上げようと、歩み寄ってその身体を抱き起  
こそうとする。

「う……」

手に直接感じる柔らかい肌の感触と、白濁色の湯の中から引き上  
げられ露わになったエリスの裸体に、セシルは小さく呻いた。

その扇情的な姿と感触は、湯の効能も手伝ってどうしようもなく  
こみ上げてくるものがある。

頭を振って雑念を払おうとするが、そこでトドメが襲ってきた。

頭にはさりと何かが乗せられる。情欲を掻き立てられる微かな匂  
いが、セシルの鼻をくすぐった。

思わずそれを手に取ると、それはまだ若干温かさを残すサラシと  
女性用禪。

セシルは、まさかと思い視線を上げてしまう。そこには、意外と  
大きい胸を晒けだしたサクヤが立っていた。濡れた長い黒髪を身体  
に張り付け、より扇情的に演出された姿を全て視界に納めてしま  
う。

サクヤが恥じらう様子を欠片も見せないで、セシルは不覚にも  
我を忘れてその姿に見入ってしまった。

立て続けに色情を刺激され、セシルは下半身が起き上がってしま  
うのを感じる。力強く立ち上がったソレは、腰に巻いていた布が外  
れてしまうほどに膨張した。

その一部始終を、目の前のサクヤが見届ける。

その顔は無表情のままに、ポツと頬を赤らめて見せた。  
そして眩く。

「すごく……大きいです」

色々とひどい状況になっている露天風呂にて、セシルの黄色い悲鳴がこだました。

## 第二十話 危険な温泉宿 ?

「まさかあれだけやられて、まだ私に手をお出しにならないとは……これはやはり紳士を通り越してヘタレと言って差し支えありません」

「どうせ本気じゃなかったくせに……むしろ、僕の理性に感謝して欲しいね」

サクヤの平坦な声対して、セシルは若干怒りを込めた声で応じる。

一騒動あった入浴の後、セシル達は一つの部屋に集まって畳の上に座っていた。

今は夕食の準備が整うのを待っている状況である。

ちなみにエリスは、まだ気絶して畳の上で寝ていた。裸のままではいろいろと都合が悪いので、今はサクヤによって浴衣を着させてある。

セシルの返答に、サクヤがほんの少しだけ視線を泳がせた。

そこにどういふ感情が含まれているのか、セシルには読み取れない。

だがそこに、何か複雑なものがあるように感じた。

サクヤの唇が、それを表現するべく動く。

「……何か……」

「え？」

小さく呟かれたその言葉が聞き取れず、思わずセシルが聞き返してしまった。

サクヤがその鳶色の瞳でセシルの双眸を見つめると、今度ははっきりとセシルに届く声で言葉を発する。

「セシル様のお心に、何かの影を感じます」

その意味がよく分からず、セシルは頭に疑問符を浮かべながら再度聞き返した。

「何それ？」

「何か……というよりは誰か、かもしれませんが。例えば、心に決めた思い人がおられるとか？」

「いないよ、そんな人」

本心からの返答のつもりだったが、サクヤは納得しなかったようだ。少し考えるような素振りを見せながら、ゆっくりと言葉を続ける。

「少なくとも、何かに囚われておられる気がします。ご自分でも気づかれておられない何かに。……それが原因になって、私やエリスお嬢様に手をお出しになられない」

「何でそんなことが分かるの？」

「愛の力でございます」

「はあ」

捉え所のないサクヤに、セシルは溜息をついた。

何が本心なのか、無表情のその顔からは読み取れない。

どこか微妙な空気が漂いかけたその部屋で、救いの風を送りこむかのようにエリスが目を覚ました。

「あれ？ 一体私は？」

「風呂場で倒れていらしゃったのです。長く湯に浸かりすぎたのが原因ではないでしょうか」

「そうなのか？ ……何か酷く恥ずかしい夢を見たような」

「そのような夢はお忘れになったほうがよろしいかと」

「むう……」

釈然としない様子で頭を悩ませるエリス。

そんなエリスに聞こえないように、セシルはサクヤに小声をかけた。

「嘘ばかり」

「また気絶なされても困りますので」

平然と返すサクヤに、セシルは呆れを通り越して苦笑する。

それにしても、何だか今日のサクヤはいくら何でも羽目を外しすぎだと思った。だがそう思ってしまうと、すぐにその理由に気がつく。

その推測に、セシルはさらに苦笑を深くした。

要するに嬉しいのだ。エリスが騎士団に入団することが。

お祝い代わりの旅行で、誰よりもはしゃいでいるのがサクヤだったということだ。そこに考えが至ると急に微笑ましくなってしまう。

「しかしセシル様の笑顔はいつ見ても悩殺されます」

「……サクヤ？ 朝から思っていたが、今日のお前は変だぞ？」

「……？ 私はいつも通りですが？」

「ぬう」

だがすぐにセシルの苦笑は凍り付いた。よく考えたら……いや、よく考えなくても、サクヤの暴走を止められる者がいないのだ。ジェディがいればまだ抑止力になったかもしれないが、今この場にはむしろ暴走を加速させる者しかない。

まさか滞在期間中、ずっとこれが続くのだろうか？

そう思うと、急に冷や汗がダラダラと出てきた。

セシルのその様子に、エリスが心配そうに声をかける。

「もしかして、セシルものぼせたのか？ 顔色が悪いようだ……」

「違うよ。気分が悪いわけじゃないから安心して」

「？」

そんなやりとりをしている内に、金髪の壮年の女性が料理を運んできた。

彩り鮮やかな異国の料理に、セシルは一時的に不安を忘れて目を輝かせる。

大きめの机に次々と並べられるそれは、明らかに普通の三人分とは思えない量が置かれていった。まるでこれから大人数で宴会を行うような様相である。

「大変な健啖家だとお聞きしておりますので、沢山ご用意させて頂きました」

料理を運んできた女性が、そう補足してくれる。

本当に手際のいい手配である。

……いや、これはいくら何でも手際が良すぎるんじゃないか？

とセシルは思いはじめた。そもそも、ロスラヴリに来ることを決め

てから、ここまで事前に手配する暇なんてあっただろうか？ 何か特殊な連絡手段があったようにしか思えない。

セシルはそこではじめてこの宿に疑問を抱いた。

金髪の女性の琥珀色の瞳に何かがひっかかるが、具体的にそれが形にならない。

いくら考えても答えは出なさそうだったので、ひとまずは気にしないことにした。

「本来は箸と呼ばれる二本の細い棒を使って食べるのですが、お客様は不慣れだと思うので、スプーンやフォークも用意しました。」

セシルは素直にそれを借りることにしたが、サクヤだけでなく意外にもエリスも箸を使って食べるようだ。

「それでは頂きましょう」

「そうだな」

サクヤが促すままに、エリスが何の疑問も抱かずに料理を食べ始める。

だがセシルは、その異国の料理に嫌な予感を覚え、念のために能力で視てみることにした。

……やっぱり。

セシルは心の中で独りごちる。

ちらほら見受けられる特定の怪しい食材の一つ一つに、それぞれ妙な成分が含まれていた。そこに、何とも言えない不安を感じたのだ。

そこでセシルは推測する。

ほぼ勘になるが、これら全ての成分を組み合わせた時にはじめて効果を表す副作用的なものがあるのではないか？

もしそうならば、それらのどれか一つを食べないようにすれば効果は現れない。

そこまで考えた所で、エリスの声がかかった。

「どうした、セシル？　食べないのか？」

「エ、エリス……」

セシルは、エリスがその手に持つ取り皿を見て焦った。

エリスは見事に、その怪しい成分が含まれる料理だけを少しずつ食べていたのである。

「な、なんでそんな食べ方を？」

「私は少食だからな。まずは珍しいものから少しずつ食べようと思っただけだ」

少し遅かったかと思っただが、特にエリスに変化はない。

しばらく時間が経過し、考えすぎだったか？　とセシルが思いはじめた所で、エリスの顔が徐々に赤く染まっていくのを見て取った。

「ふえ？　何か体が熱いような……？」

「やっぱり……」

セシルの疑問が確信に変わる。

料理に何かが仕込んであるということとは、この宿は絶対何かがおかしいということだ。

それを問いたただそうとしてサクヤに視線を向けると、彼女は何やら小さな杯を呷った状態で硬直していた。

「……サクヤ？」

セシルの呼びかけを合図に、その体がゆっくりと後ろに傾いて倒れてしまう。

何事かとセシルが慌てて傍に寄ると、サクヤは凄まじく酩酊した様子で目を回していた。

「せ、世界がお回りにございんす」

「サクヤ、お酒弱かったんだ……」

もしかしてはじめて飲んだのだろうか？ たった一杯で再起不能になるとは……

しかし、すぐにセシルはそれを心配している場合ではないことに気づかされた。セシルの背中に、妙に甘ったるい声かけられたのである。

「セシル、助けてくれ……体がどうしようもなく熱いのだ」

見ると、荒い息を吐いたエリスが熱に浮かされた顔で浴衣を脱ぎうとしている所だった。

セシルは咄嗟にエリスの手を掴んで、それを止めようとする。

「ひゃあううう！？」

エリスは少し手を握られただけで体を震わせた。

一体、どれだけ強力なものを仕込んだんだ。

爆弾を残して、勝手に自滅して倒れたサクヤを恨めしく思う。

「ふぁ……熱い、熱いのだセシル」  
「エリス、気を確かに！」

体を痙攣させた後、力なくしなだれかかってきたエリスに、セシルの心拍数が跳ね上がる。

浴衣が乱れ、その下の肌が見えてしまっているが、今のエリスにそれを気にする余裕はないようだ。

エリスはその体をセシルに預け、その上昇した体温を直に伝えてくる。

正直、これは風呂場の騒動よりも我慢するのが大変だった。エリスから発せられる女性特有の匂いに、激しく理性が揺さぶられる。

だが、そこでセシルは踏みとどまった。いや、踏みとどめさせられた。

体の奥から溢れるように出てきた罪悪感が、セシルの体を支配することによって。

漠然とだが、サクヤが言っていたことを理解する。

それが何かはつきりとは分からないが、たしかに自分には何かがあるようだ。

それを克服、もしくは凌駕しない限り自分は理性を失うことはなさそうである。

それが良いことなのか悪いことなのかセシルには判断しかねた。

しかし、そんなセシルの困惑を無視して事態は推移する。

しなだれかかっていたエリスが、正気を失った目でセシルを押し倒してしまったのだ。

倒れたセシルの胸板に、エリスが顔を獣のように擦りつけてくる。

まずいっと思った。

何よりも、こんな形ではいくらなんでもエリスが可哀想だ。

そう思い、何とかこの状況から脱しようと思えば……  
気がついた。

セシルの胸板に頭を預けたまま、それ以上エリスは何もしてこないのだ。

ただ、何かの愛玩動物のようにずっと顔を擦り付けてるだけである。

「〜」

「エリス？」

呼びかけるが返事はない。エリスはセシルに密着しているというだけでご満悦の顔をしていた。それで思い出す。

そういえば、エリスの性の知識は五歳児並だったのだ。

セシルはその事実感謝して安堵の息をついた。

安堵してしまうと、心に余裕ができる。その余裕をもって、セシルはエリスの頭を撫でてやった。

嬉しそうに目を細めるエリスに、笑いかけてやる。

料理は冷めてしまいそうだが、しばらくはこのままでいる必要がありそうだった。

その全身でセシルを感じようと縋り付いてくるエリスに、これは正気に戻った時が大変そうだと、セシルは他人事のように思った。

## 第二十一話 危険な温泉宿 ？

三日月の弱々しい月光りの元、それを補うように夜空で輝く星々を眺めながら、サクヤはそこに佇んでいた。

ロスラヴリという街のエリス達が滞在する宿、その玄関先。

そこで、ただ立ったまま空を眺め続ける。

その無表情の顔から、彼女の感情を読み取れる者は少ない。いや、少ないどころか恐らくは一人しか存在しないだろう。

サクヤは、ずっとそのたった一人のことを考え続けていた。

三年前に出会ってからずっと傍で見てきた少女。

元はその命を狙う者であり、一度は殺しかけた。気まぐれを起こしてからは、ずっとその少女を守る者として傍にあった。

そしていつの間にか、その少女はサクヤにとって大切な者となっていた。

ひたむきに足掻き続けるその姿に魅了されたのだ。

それは自分とは正反対のものだったから。

そして様々なものを諦めて感情が死んでいた自分に、再びその少女は感情をくれた。

その少女は、今報われようとしている。

自分を置いて世界に受け入れられそうな彼女に、嬉しさと共に寂しさも感じていた。

こうして傍ににいるのに、どうしようもなく孤独感に苛まれる。

だが、それでいいと思う。

彼女の持つ力と志ならば、きっとそのうち人々の太陽となれるだろう。

自分は影の中で、その光を眺める一人になるのだ。

だから、その光を陰らそうとする雲の存在は許さない。

様々なことに思いを張り巡らせ、サクヤは夜空を眺め続ける。  
やがて、その背中に声をかける者が現れた。

「まさか、本当にあんたがここに顔を出すとはねえ」

それはこの宿に勤める壮年の女性だった。

その琥珀色の瞳を愉快そうに細め、頭に被せてあった金髪のカツラを取ってみせる。その下には、サクヤやサイラスと同じ黒髪があった。

その女性に、サクヤは背を向けたまま応じる。

「少し、味方を増やしておく必要がございます」

「味方ねえ……私があんたの味方になると？」

「昔の私だったならば、貴方は断っておられたでしょうね」

サクヤの返答に、その女性は何かを思い出したのか、笑いを堪えるような様子を見せた。抑え切れなかった声が、クツクツクツと口から漏れ出す。

この女性は、サクヤと同じく自分の故郷から抜け出して来た者だった。ただサクヤとは、その動機も意志も目的も、似ても似つかないものだったが。

笑いによって浮かんだ目尻の涙を拭いながら、その女性が声を上げた。

「まあ、あんたの変わりっぷりは十分拝見させてもらったよ。変わりすぎて何度か爆笑しそうになったけどね」

「そうですか」

「それで、味方が欲しいってのはあのお嬢ちゃんのためかい？」  
「はい」

彼女がお嬢ちゃんと言うのはエリスのことだ。実はサクヤは、風呂の仕掛けをしてもらために、事前にセシルの性別のことは彼女に伝えてあった。

それをセシルに悟られないために、女性だと勘違いしている演技はしてもらったが。

「エリスお嬢様は、これから目立つ場所に立たれることになるでしょう。その時に、キルストア教の関係者が大人しくしておられるとは思えません」

「だから、キルストア教とは確実に関係ないであろうあたしに依頼を？」

「その通りです。そして貴方の協力を得るには、まず今の私を信用してもらわなければならない」

サクヤのその言葉に、壮年の女性は呆れたように頭を掻いた。

「それでわざわざ顔を出したのは分かったけどさ……あの大金はどこから手に入れてきたんだい？ さっき届いたのを見てぶったまげたよ」

「私が三年の間に、ムーア家から賜ったご給金です」

「……あんだ、本当に変わったね」

壮年の女性の双眸が、今度は慈しみに変わって細められる。

「っていつかさ、なんて不器用な愛情表現してんだか。あの意中の男に対しても、風呂に突撃したり薬を盛ろうとしたりと変則的なこととはする癖に、正面からは何もしないなんてね」

「それは私の趣味です」

「そうかい、あの男も大変だねえ」

そう言つて、また堪えるように笑つ。

サクヤはその気配を背中で感じながら、彼女の言う意中の男のことを考えた。

屋敷ではじめてその姿を目にした時から、なぜか自分の心を激しく揺り動かす少年。

その表情の一つ一つが、その仕草の一つ一つが、その言葉の一つ一つが、サクヤに何とも言えない充足感をくれる。

これが俗に言う一目惚れなのだろうか？もしそうだとしたなら、サクヤは自分に恋という感情が生まれたことに感謝した。

エリスのひたむきな姿に感情をもらつたのと同じだ。世界とは、一つの感情が増えるだけでその姿を鮮烈に変える。

実はサクヤが彼女に言った、自分の趣味だという返答は半分嘘だ。サクヤには、ああいった形でしか思いを表現できないのだ。そつち方面の経験は、サクヤもエリスと大した差はなかったりする。

サクヤはセシルのことを思うと、心臓の動きが速まり頭がクラクラするのを感じた。何だかあまりにクラクラするため、サクヤは足下をふらつかせてしまう。

「……まだ酔っぱらつてたんかい」

「貴方に盛られた薬のせいです」

「いや、あれは普通の清酒だよ……」

「頭がふらふらします」

「あゝ、はいはい」

彼女はふらつくサクヤに肩を貸した。そして、そのまま宿の中へとサクヤを連れて戻る。

彼女のその苦笑いを、サクヤは目尻に捉えた。

サクヤが、彼女の協力が欲しかった理由。

それは彼女に、それなりの力と情報網があることを知っていたからに他ならない。

実はこの宿で働いている者は全て、サクヤと同郷だったりする。訳ありで国を追い出されたり、狂気に耐えられなくて逃げ出して来た者達を彼女が受け入れているのだ。

だが決して全ての者を受け入れているわけではない。特にサクヤのような経歴を持つ者には最大限の警戒をしていた。むしろサクヤほどになると、危険分子として彼女側から殺しに来てもおかしくはなかったりする。

それだけ、祖国でのサクヤの経歴は酷いものだった。

その詳細を、エリスは知らない。

彼女が祖国でのサクヤを知ればどんな顔をするだろうか？彼女が禁忌した、あのリチャードよりも遥かに酷いことをサクヤはしてきたのだ。

人を殺せないエリスが、人を殺しても眉一つ動かさないサクヤを見ればどう思うだろうか？

泣きながら命乞いをする男を。

子供を守る母親の背中を。

親の亡骸に縋り付いて泣く子供を。

サクヤは平気な顔して切り裂いてきたのだと知れば、エリスはどうするだろうか？

騙されていたと憤慨するだろうか？

それとも裏切られたと嘆き悲しむだろうか？

かつてのエリスは自分自身のことを人間じゃないと言っていたが、サクヤからしてみれば自分のほうがずっと悪魔だった。

悪魔だからこそ、サクヤはエリスが放つ光に誘われたのだ。エリスがイルレオーネ守護騎士団という強い光に誘われたように。

言うなれば、自分はエリスという光に群がる害虫だ。

エリスの光を守るつもりでいるが、もしかしたら自分が一番その光の陰りになりかねない。

もしそうだったならば……

サクヤは近い未来にあるかもしれない別れに思いを馳せた。

「……まさか、あんた泣いてるのかい？」

自分に肩を貸す女性の、驚いたような声を耳にはじめて気がついた。

思わず自分の頬に手をやると、わずかに指がそこに流れていたもので濡れる。

「これが泣く、ということでしょうか」

サクヤは、自分の胸に穴を空けそうなその感情さえも、深く噛みしめて感謝した。

そんなサクヤの様子を見て何を思ったのか、ふと真面目な声色になった女性が囁くように言う。

「私ここではアルマって名乗ってるんだ。私のことはそう呼ぶいい」

「承知いたしました」

「あんたが路頭に迷うことがあったら、いつでもここに来な。飯の世話くらいならしてやる」

「……………？ 急に何を？」

「分からないのかい？あんたを仲間だって認めてやるって言うてんだ」

アルマがそう言ってニヤリと笑った。

何がどうなったのかは理解できないが、どうやら自分の企みが上手くいったことだけはサクヤにも分かった。

## 第二十二話 異変の足音

自分の妹がロスラヴリへと遊びに行つてから数日が経過した。その妹には、自分は宮廷魔術師の仕事があるから一緒には行けないと伝えている。

その多忙なずのジエディは実のところ、エリスがこの街を発つた後ずっと何もしていなかった。

宮廷魔術師の研究塔の一室。

その部屋の小さな窓から入ってくる光は弱く、普段はランプに火を灯すか魔術で光源を作つてやらないと、その部屋は暗いままである。

だがあえて、今は何の光も灯されていなかった。

その薄暗く陰鬱な部屋で、ジエディはいつも以上にその双眸を眠そうに瞬かせ、いつも以上に気怠げに椅子に座り込んでいる。

その椅子の周りには、机さえ埋まれるほどのガラクタや書物、紙などが散乱していた。

いずれも安価なものではない。

特にその無造作に置かれた書物などは、あまりの扱いの粗末さに怒り狂う者がいるぐらい価値があるものだ。

だが、今までのジエディならばそんなことを気にしている余裕はなかったし、そうでない今は指一本動かすのも億劫なので、その書物は床に転がったままである。

ジエディは、魂の抜け殻のような体たらくでずっと椅子に座り続けていた。

その部屋は、ジエディの数年にわたる戦いの跡である。

妹には秘密にしていたが、ジエデイはずっとここでアニスのやっていた魔力素体の研究を続けていたのだ。

母の研究成果は父が全て葬ったので、ゼロからずっと独自の理論で。

それは母の無念に報いるためではなく、愛する自分の妹を人間に戻すためだった。

苦しみ続ける妹を救うため、ずっとこの研究室にこもり続けてきたのである。

でも、それは唐突に終わりを迎えた。

それは、ジエデイの研究成果が実ったわけではない。

何のことはない。妹は元から人間だったのだ。

その事実にはジエデイは歓喜したものの、すぐに悔恨と自己嫌悪に襲われた。

ジエデイは今までの自分の行動の意味に気がついてしまったのである。

結局自分は、ずっと妹を人間だと信じていなかったのだ。

口では妹に、お前は人間だと言い続けてきたのに、肝心のジエデイ自身がまるで信じていなかった。

多分、妹は心のどこかでそれが分かっていたからこそ、ジエデイの言葉を聞き入れなかったのではないだろうか？

躍起になって魔力素体の研究に明け暮れていたのがその証拠である。

さらにはその研究に没頭するあまり、ジエデイはいつしか、エリスの盾になってやることも忘れていた。

本当に何をやっていたんだろうか。

ジエデイは熱量を失った虚無感と自己嫌悪のあまり、ずっと無気

力が続いていた。

ロスラヴリへ行くこうという妹の誘いを断ったのも、この為である。

この強い目的があると様々なものが見えなくなるその性格は、姉妹揃ってそっくりであった。

ジエデイが力なく椅子にもたれかかっていると、その部屋の入り口である扉をノックする者がいた。

その者は、ジエデイが返事をする前に部屋の扉を開けてしまう。

それは、ジエデイもよく知っている人物だった。

長く赤い髪の毛を左右両側で括った、小柄な女の子。いつもジエデイの研究室の惨状を見ては、怒りの声を上げている騒がしい部下であり、教え子でもある十五歳の少女だ。

幼い顔立ちと赤い双眸が特徴的な最年少宮廷魔術師、その名もステラ・メイスフィールドである。

「あら、ステラちゃんじゃないの。今日はどうしたの？」

ジエデイが、いつもの間延びした声をステラにかける。だが、すぐにそのステラの様子が変であることをジエデイは察した。

いつもなら諫言を口にしながら部屋の片付けをはじめるとステラだが、今日は扉を開けた場所で立ち竦んでいる。

その顔色が真っ青になっていたことに、ジエデイが声の調子を真面目なものに変えた。

「何があったの？」

ジエデイがそう問うと、ステラは若干震えた声でそれを伝える。

「宮廷魔術師総長から、第一級指令が公布されました。続いて全ての宮廷魔術師長に、招集がかかっています」

その意味する所に、ジェディの表情も凍り付いた。

そんなジェディに助けを求めるかのような視線を向けながら、ステラが言葉を続ける。

「北の大国、マグケストが怪しい動きを見せています。戦争が、はじまるかもしれません」

ジェディがその知らせを聞いたのと同時刻。

イルレオーネ守護騎士団の本部にいたサイラス・ランカスターも似たような知らせを、部下から受けていた。

彼が新しい団長となってから随分と質素になってしまった執務室にて、その戦争のことについて頭を悩ませる。

その戦争自体には、彼らイルレオーネ守護騎士団は参戦しない。

彼らはいくまで対魔獣用の兵士なのだ。戦争は宮廷魔術師達を筆頭とする、国が抱える別口の軍隊の担当である。

そもそも、魔法が飛び交う戦場で騎士団が参戦しても、そこらへんの雑兵と変わらない働きしかできないであろう。

事が国の存亡にまで至るなら、たしかに騎士団も他人事ではいられないのだが、今からサイラスがそれをあれこれ心配してもどうにもならない。

彼が頭を悩ませているのは、その要因となった事象だった。

約半月ほど前から、魔獣とほとんど遭遇しなくなったのである。

それはイルレオーネだけでなく、その周辺の国々も同じようだった。今まで地上を蔓延っていた魔獣達が、忽然と姿を消したのである。

特に魔獣の被害が多く、余裕のなかったはずのマグケストが事を起こしそうなのは、その魔獣の脅威がなくなってしまったことが起因の一つになっていた。

マグケストとイルレオーネの間にはトランテスタという小国を挟んでいるが、そのトランテスタはイルレオーネの従属国である。

その従属国にマグケストが戦争を仕掛けるというのなら、イルレオーネも黙っているわけにはいかなかった。

だが、今騎士団が気にするべき点の一つ。

なぜ地上から魔獣達が激減したのか？

北のほうから伝わってきた噂に、天界と冥界が本格的な戦争をはじめたという荒唐無稽なものがあったがサイラスはそれを全く信じていない。

それでも、キルストア教を信じる者が大多数である民衆にとってはそうもいかなかった。

おかげでキルストア教の関係者達が最近、増長傾向にある。そのことは、とある要因によって少しだけ騎士団にも影響があった。

サイラスはそのキルストア教の要求をつっぱねたが、その事も追々考えていかなくはならないことがある。

「だがしかし、まずは魔獣達が減ったことの原因の調査をせねば……」

サイラスは疲れた声で独りごちた。

リチャードの不祥事の後始末から団長就任による引き継ぎの問題など、彼はあれから凄まじく慌ただしい生活を送っている。それに加えしつこいキルストア教の要求やら、異常事態やらで心休まる日がない。

そして、サイラスにはもう一つ気になることがあった。

サイラスは魔獣が減った原因の調査に割り当てる人員を考えながら、そのもう一つの懸念にも頭を悩ませる。

そっちは騎士団や戦争のこととは関係のない、どちらかと言えば個人的なものだった。

サクヤが、どうもあの人物と接触を図っているようなのだ。

一体何を企んでいる？

サクヤのことを知っているサイラスとしては、正直な所、戦争や魔獣の激減よりもそっちが気にかかっていた。

サイラスの祖国の闇の、最も深い所に関わっていた女。

魔術師を徹底的に禁忌して排除し続けるあの国が、一体何を考えて何を目的にしていたのかは知らない。

ただあの国は、その狂気をあらゆる国にまき散らしていた。

様々な国に刺客を潜伏させて内乱を煽動し、どうにかしてその国

を同じ狂気に染めようとするのである。

今までは、祖国から遙か遠方に位置するイルレオーネには、その狂気が及んでいなかった。だが、祖国でその狂気の深層にいたサクヤは、その種である可能性が十分にある。

そしてサイラスはこうも思っている。

あの女は、魔獣の何かを知っている。

もしくは、何かを握っている。

サイラスはキルストア教の主張することをまるで信じていない。もちろん、祖国にあった妙に偏りのある教育も信じてはいない。そして、人のみを襲う魔獣に対して何とも言えない違和感を感じていた。

なぜか祖国では、その魔獣の被害が一件もないのである。

魔獣がないのでない。被害が全くないのだ。

もしかすれば、これはサイラス程度が手を出していい話ではないのかもしれない。

身の程をわきまえぬ者は早死にするのみ。

サイラスはこれまでの人生で嫌というほどそれを教えられた。

だがどうしても、気になるのだ。

サクヤのあの瞳の色が。

「む、いかなな」

思考が違う方向にいていたサイラスが、頭を振って自分を戒める。

サイラスは改めて魔獣激滅の調査に割り当てる人員を決めるべく、その琥珀色の瞳を机の書類に向けた。

## 第二十三話 レティシア

楽しい時間とは、楽しければ楽しいほどあっという間に過ぎ去ってしまうものだ。

特にセシルと出会ってからは、本当に時間の流れがはやく感じる。だがそこに濃縮された内容は、エリスにとって十年に等しい価値があった。

それはこれまでの日々、ずっと屋敷に引き籠もって剣を振っている時間がほとんどだったせいもある。でも、それだけではない。

セシルが現れてから、エリスの中で様々な革命が起こった。それらは全て、エリスにとってかけがえのないものになっている。

そして今回の旅行も、ちょっとした革命を経てあっという間に終わりを迎えてしまった。

「またいつでもお越し下さい」

宿の店員である女性の声を背に受けながら、エリスはこの旅行が終わってしまったことを感じて少し寂しさを覚えた。

それと同じ感傷を抱いたのか、サクヤがエリスの隣に立って声をかけてくる。

「楽しかったですね」

「あ、ああ……」

エリスはそれに、若干躊躇いながら頷いた。

たしかに楽しかったのだが、やたら顔をツヤツヤさせて満足げにしているサクヤを見ると、何故だかちょっと同意しかねる。

そんな彼女と反するように、セシルは青くやつれた顔をしてフラ

フラしていた。

まるでサクヤが、セシルの活力を吸い取ってしまったかのようにある。

「やっと……終わった……」

そんなセシルの呟きに、もしかして今回の旅行は楽しくなかったのだろうか、エリスは心配になった。

それ以前に、なぜセシルがこんなにも疲労困憊しているのかが分からない。

一体セシルに何があつたのだろうか？

エリスはそれを考えようとするが、何だか思い出してはいけないものを掘り起こしてしまう気がしてやめた。実は滞在期間中、いくつか記憶が飛んでいる時間があつたりする。

エリスは自己防衛本能を存分に発揮させて思考を切り替えた。

「帰ったら、いよいよイルレオーネ守護騎士団の入団式典だ。……とうとう私も正式に騎士になれるのだな」

エリスが感慨深げに呟きながら、街の外へと向かって歩いていく。

すると突然、凄まじい轟音が鳴り響いて大地が揺れた。

あまりに激しい揺れだったので、地震が起こったのかと錯覚してしまいそうになる。

それと同時に、外壁の方角から大勢の人々が一斉に逃げてきた。

「な、何事だ!？」

エリスは驚いて、その音源である外壁の方へと視線を向ける。

遠目では詳細が分からないが、何やらこの街の衛兵らしき人物達が逃げ回っているのが見えた。応援らしき兵が続々と集まっているようだ、すぐに顔を恐怖に引き攣らせて逃げ出してしまっている。中には勇敢な兵士もいたようだ、そのことごとくが空高くに体を舞わせていた。

「だから、この街の責任者を連れて来いつつてんだろうがああああああああ！ そんなに玉を潰されてえのかためえらああああああ！」

恐ろしく巨大な声が、エリスの立っている足下までをビリビリと震わせる。

その異常な事象に、エリスは啞然とした。

「え、この声……」

その声には何か気がついた様子を見せて、セシルはその現場へと走って行ってしまふ。それにサクヤとエリスが顔を見合わせると、彼女らもその背中を追うことにした。

その現場に近づいていくと、そこで起こっていることが見えてくる。

エリスが白いドレス姿の少女を視界に捉えたのは、丁度勇敢な衛兵の一人が股間を蹴り上げられる瞬間だった。

悲惨な声を上げたその衛兵が、嘘のように空へと飛んでいく。

その様子を見たサクヤが、すかさず平坦な声でエリスに忠告した。

「エリスお嬢様は、決してあれの真似をなさないようにお願いいたします。特にセシル様に対しては」

「あ、ああ……」

飛ばされた男が、口から泡を吹いて白目を剥いている様を見て、  
エリスは頷いた。

「だああああああああ、もうめんどくせええええええええええ！」

酷く下品な言葉使いを巨大な声でまき散らしながら、その少女が  
地団駄を踏む。

すると、また恐ろしい轟音を上げて地面が揺れた。少女が踏み抜  
いた場所が、大きく抉れて円形にくぼんでしまう。

そのまま放置して置けば、街全体を簡単に破壊してしまえそうであ  
った。

凄まじく馬鹿げた力だ。

そんな化け物のような力で暴れる者を前にすれば、衛兵が逃げて  
しまうのかもしれないだろう。

まさに厄災のような少女。

だがエリスは、その常識外の力に既視感を覚えた。

あれと似たような大きな力を、以前にも身近で感じたような気が  
する。

そう、エリスが騎士団への入団を認められるきっかけとなったあ  
の夜に。

その少女に、エリス達の先を走っていたセシルが声をかけた。

「やっぱり、レティシア！？何でここに！？」

「あら、セシルじゃありませんの」

白いドレス姿の少女が、急に豹変して上品な言葉使いになる。そ

のスカートの裾をつまんで、セシルに向かって優雅な礼をして見せた。

その隙に、周囲にいた衛兵達が全て逃げてしまう。

「お久しぶりですわ」

「う、うん。ひさしぶり」

セシルが引き攣った笑みを浮かべながらも、右手を上げて挨拶を返す。

その二人の会話に、丁度その場に追いついてきたエリスが声を上げた。

「知り合いだったのか？」

「うん、僕と同郷の人だよ」

「セシル、そちらの方達は？」

亜麻色の綺麗な髪を整えながら、その少女がセシルに紹介を求め

る。そこに、どこか気心の知れた響きを感じ取り、エリスの中でズキンと何かが痛んだ。

「ああ、彼女達は」

「サクヤ・ミナモトと申します。以後、お見知りおきを」

セシルの言葉を途中で遮って、サクヤが起伏のない声で自己紹介した。

エリスはそこに、何か対抗心めいたものを感じ取る。

対するドレス姿の少女は、それに気がついた様子もなく紹介を返した。

「レティシア・サーティと申しますわ。……そちらの方は？」  
「え、エリス・ムーアだ。よろしく頼む」

促されるまで名乗るのを忘れていたエリスは、慌ててそう答えた。  
さつきから何とも言えない不安に苛まれて失念していたのだ。

妙にレティシアを意識してしまうエリスとは反対に、紹介を終えたレティシアはもうエリス達から興味が失せたようだ。

無遠慮にセシルに歩み寄り、まるでダンスに誘うかのようにその手を取る。

それに、またエリスの胸が痛んだ。

さつきから一体なんだというのだろうか？

「内界に行ったとは聞いていましたが、まさかこんな所で会えるとは何という幸運。貴方の能力があれば、あれも簡単に解決できるかもしれませんわ」

「あれ？ 何かあったの？」

「実は、最上位クラスが内界に侵入してしまいましたの。しかも能力持ちですわ」

「ええ！？」

セシルが驚いた声を上げるが、エリスにはその話が上手く理解できなかつた。

それはどうやら、隣にいるサクヤも同じようである。

何やら二人だけに通じる会話をしている様子を眺めていると、胸がやたらチリチリした。

自分の中に沸き上がる感情が理解できずに、エリスは首を傾げる。その間にも二人の会話は続いた。

「その能力が少々やつかいでして……今からわたくしが案内いたしますので、セシルにはそれを解析して欲しいですの」

「それはいいけど……所在が分かっているのに手を出せないんだ？そんなに強力なの？」

「いえ、戦闘力自体は大したことないのですが……とにかく、一緒に来てくださいますし」

レティシアの誘いに、セシルが迷いなく頷く。

それにエリスは

「……」

「エリスお嬢様？」

サクヤが、何かを感じ取って声をかけてくる。

だが、エリスはそれに応じる余裕がなくなっていた。

セシルが、そんなエリスの内心に気がついた様子もなく話しかけてくる。

「ごめん、ちょっと急な用事ができちゃった。先に王都へ帰っててくれる？」

「あ、ああ……」

エリスの声を絞りだすような返事に、セシルが首を傾げた。

「エリス？」

心配そうに顔を覗き込んでくるセシルの双眸を見つめながら、エリスは耐えきれずに口を開いた。

でも、何を言っているのかわからない。だが、何かを言いたい。

やがてエリスは、無難な言葉を選んだ。

「屋敷で待ってるから」

普通そうであってその実、様々な意味と強い感情を込められたその言葉に、セシルではなくレティシアの方が何かを感じていたようである。

レティシアのその瞳が、エリスを憐れむような色で見ていることを、その場の誰もが気がつかなかった。

## 第二十三話 レティシア（後書き）

実は温泉宿ネタが沢山余ってるので、また折りを見て間に割り込み投稿するかもしれないです

## 第二十四話 ドラゴンと魔獣

エリス達と別れて街を出ると、そこで出迎えに来た者にセシルは驚愕した。

体高だけでも人の数倍はありそうな巨躯に、伸縮性のある膜のような二枚の翼。そして全身が堅そうな鱗で覆われているその姿は、セシルが知っている知識によるとドラゴンという種族のはずだ。

その雄々しい姿に感嘆の息を吐く前に、ドラゴンが空気を振動させて言葉の音にした。

ドラゴンは口ではなく、その特殊な能力によって言葉を発音する。

『外界の使者殿の同志とお見受けする。我が背中に乗られよ』

その言葉に、思わずセシルはレティシアの方を見た。

「内界に来た時に色々ありまして。今は少々お世話になっていますの」

セシルの視線に簡単に説明しながら、レティシアは遠慮することなくその背中へと跳び乗る。セシルはそれに何となく思うところがあつたものの、素直にその背中に乗せてらもうことにした。

セシルとレティシアがその背に跨つたのを確認すると、ドラゴンは翼を力強く羽ばたかせて舞い上がる。視ると、その翼には、揚力<系の魔法が刻み込まれていた。地上にいたエルフ達とは、また違った方向で洗練された魔法である。これもまた、機会を見て教えを乞うてもいいかもしれない。

そんなことを考えながらドラゴンに跨っていると、空へと上昇す

る途中で、驚いた顔でこちらを見ているエリスを眼下に捉えた。その隣にいるサクヤは相変わらずの無表情であったが、内心は驚いているのかもしれない。

そんな二人に視線を送るセシルに何を思ったのか、急にレティシアが咎めるような声を上げた。

「悪戯に内界の人間をたぶらかすのは感心しませんわよ」  
「たぶらかすって……」

セシルが抗議しかけるも、それを遮ってレティシアが言葉を続ける。

「あまり親しくすると、辛い思いをするのは彼女ですわ」  
「……」

セシルはその言葉に、押し黙ってしまった。そんなセシルの反応に、レティシアはその口調を諭すようなものに変える。

「貴方が内界に何を求めているかは知ったことではありませんけど、あんまり陛下の元から離れるのはよして下さいな。寂しがってましたわよ?」

「陛下が?」

セシルが意外そうな声を上げると、レティシアは呆れたような溜息をついた。

「そうれはもう、煩わしいぐらいに貴方の名前ばかり口にされてますわ。今回のことが終わったら、すぐに戻って来ることです」

「うう、でもそうなる僕の後宮入りが確定しちゃうんだよね……」

「何を今さら。あの城に住んでいる男は皆その候補みたいなものですわよ。陛下の体質の都合上、子供が作れる相手が限定されるのですから」

「そうなんだけどさ……」

煮え切らないセシルの態度に何かを感じて、レティシアが眉をひそめた。その声が、何かを確認するかのようになり硬くなる。

「セシル、わたくし達は陛下のために在るということを忘れないで下さいな。貴方があの女性にかまけて陛下に何の利益があるのですか？」

「でも、エリスは僕たちに匹敵する魔力を秘めてるよ。>魔紋<が完全に定着すれば、アースガルズで>数字持ち<と肩を並べることだってできる」

「まさか……」

セシルが口にした事実には、レティシアの顔が驚愕に染まった。彼女も、まさか内界に自分達と匹敵する魔力を持つ者がいるとは考えもしていなかったのだろう。

その声が一転して上機嫌になる。

「それはそれは。それなら確かに、貴方が彼女にかまう価値はありますわね。陛下も歓喜なされるでしょう」

「……でもエリスを連れて帰るかどうかはまだ分からないんだけどね。」

声を弾ませるレティシアに、セシルは心の中で補足した。

そのセシルを見て、レティシアが怪訝そうな顔をする。

それに、セシルはしまったと思った。

もしかして、また顔に出ていたのだろうか？  
内心で焦るセシルに、レティシアが疑心に溢れた声を上げた。

「そういえば、貴方は何故メイド服姿をしていますの？」

「今さらそれ！？ 聞くの遅いよ！」

「あまりに違和感がなくて……それに、アースガルスでも頻繁に女性用の服を着ていた気がしますわ」

「うう、そういえばそうだった……」

セシルは自分の故郷で、あの女王にいつも着せ替え人形のように遊ばれていたのを思い出す。その女王から離れたというのに、結局は同じように女装させられているこの状況に、もしかして自分はどこに行っても同じ運命が待ってるんじゃないかと絶望した。

セシルはそこでふと、今の自分にこの格好をさせている張本人のことを思った。

いつもエリスの傍らで、彼女を守るように在る女性。

最近になって、その女性について少し分かったことがある。

セシルは眼下でゆつたりと流れていく景色を見ながら、そのサクヤの姿を思い描いた。

その顔に、石像のように動かない肌を貼り付けた女。

声は限りなく無機質で、喋る言葉は全て演技のような印象を与える。

それでも、彼女に感情がないわけではない。現に、エリスはその僅かな変化から感情を読み取ってすらいる。

セシルはその彼女に、かつてのエリス以上に危うい何かを感じていた。

エリスとは、また違った種類の危うさ。

その存在が儼くて、何だか次の瞬間には姿を消していそうな、そんな危うさだ。

エリスが足掻く者だとすれば、サクヤは諦めた者といった印象を受ける。

あくまでそれはセシルが感じたことであって、それが正しい印象なのかは分からない。

でもこのまま放置しておけば、何かが手遅れになる気がするのである。

セシルがそんなことを考えていると、いつの間にかレティシアがその顔を覗き込んできていた。

「またさつきとは違う方のことを考えてますかね？」

「えっ……いや、これは……」

ズバリと内心を言い当てられて、セシルが焦る。

慌てふためくセシルに、レティシアは諦めたように大きな溜息をついた。

「まあ、今はよしとしますわ。先に片付けるべき懸案がありますもの……見えてきましたわよ」

「え、もう？」

少し考えに耽っていた時間があつたとはいえ、それは予想していたよりもずつとはやい到着だった。

よく考えれば、レティシアが自分の足で走らずに、素直にその背中に乗っているぐらいなのだ。その飛行速度は、セシルにとっても驚嘆すべきものだった。やはり、是非にでもその仕組みについて聞いておこうと心に決める。

セシルは、遠目に小さく見えるソレを視界に収めた。  
峻険な山に挟まれた街道の、上部。山の一部に蛹のように張り付いて存在するそれを見て、セシルは顔をしかめる。

「……けっこう大きいね」

それはセシルが知る最上位クラスの魔獣の中でも、わりと大きめに部類するものだった。

その姿は黒く巨大な岩石のように擬態しており、何故か少しも身動きせずに山に張り付いている。あれでは、それを目撃した人も巨大な山の一部ぐらいにしか思っていなさそうだ。

「わたくしと交戦した時は、その形も大きさも全然違いましたのよ？」

「なんだって？ どういうこと？」

「それが分からないから、貴方の助力が必要なんですの」「それもそうか」

セシルは早速、その魔獣を能力で視てみることにした。  
その分析の結果に、レティシアが何故ロスラヴリで暴れていたのかを理解する。

「あれは……ここら辺一帯の人が危険だね」

「やっぱりそうなんですの？」

「うん。あれと戦うと確実に散らばるよ」

セシルが視た魔獣は、下位魔獣の集合体とも言えるものだった。  
網の目状に互いの核が繋がりがあい、それが一つの大きな核のような役割を果たしている。どこかにそれらの中心を担う核があるはずだが、その体内に無数の核を内包しているせいで発見できない。通常

ならば、その中心となる核は大きな魔力を持っているはずだが、どうにも無数の核と内包する魔力を均一化させているようである。

しかも厄介なことに、その魔獣にはもう一つ問題があった。

「どうやらあの魔獣は、近辺にいる下位魔獣も引き寄せて吸収して見たいだ。放っておくと際限なく大きくなっていくよ。できるだけはやく仕留めないと、僕らでも手が付けられなくなる」

だがしかし、今あれと交戦すれば蜘蛛の子を散らすように、一斉に下位魔獣の大軍が野に放たれることになる。

これが外界ならば問題なかったかもしれないが、ここは内界である。

下手をすれば、この周辺の街の人々は全滅しかねない。

「ですが避難してもらおうにも、誰もわたくしの話を信じないものですから……」

「とりあえず、何か考えないと」

セシルはその対策を考えながら、ふとこんなことを思った。

今も山に張り付いて動かないあの魔獣。

何だか都合の良すぎるそれは、まるで内界に侵入するためにその能力を持っていたみたいじゃないか……

## 第二十五話 入団式典

イルレオーネ守護騎士団の叙任式。

エリスが騎士団規定の赤い礼服に身を包んで臨んだそれは、騎士団本部内に設けられた特別な屋舎にて執り行われた。

その建物に荘厳さはあっても煌びやかな装飾はなく、ただ君臨する無機質な石の柱は、その屋内にいる者達を圧迫するようである。

輪切りの円柱の石を何枚も積み重ねた柱が支える天井は、その圧迫された空気をやわらげるように丸い穴が空いている。そこから唯一射し込む太陽の光が、穴の真下にある石の水瓶を照らし出していた。

その水瓶が置かれた祭壇の奥には、まるでそれを守護するかのように、武装した女性の像が控えている。

その背に翼を生やし、鎧と羽根のついた兜で身を固めて勇ましく剣を掲げた天使。

キルストア教の神話にある女神の像。

ドラゴンを従え、人間の英雄を天界へと導く戦乙女。

エリスはその女神像を眺めると、なぜだかセシルを連想してしまった。

国によつては神の如く崇め祭られている、あのドラゴンの背に跨っていた不思議な少年。

そのせいもあり、長年待ちわびたはずの入団式典の間、ずっとエリスは心にもやもやとしたものを抱えている。

この国のやんごとなき血筋の御仁が、祭壇にある水瓶から石の杯に水を汲み、ここに集まった新人騎士に与えていく。その儀式は、いつものエリスなら感涙したかもしれないほど神聖さに満ちあふれていた。

だが今のエリスの心には、それを堪能する余裕は微塵もない。

戦争のことを知ったのは、この王都に帰ってきてからすぐのことだった。

未だ宣戦布告は為されていないものの、布告と同時に攻め込んで来る腹づもりの敵国相手に、悠長に構えていては手遅れである。

だからジェデイが戦争に備えるため、北へと出立したのはエリスが帰還する少し前だった。

他国と戦争が起こるのは、エリスにとってはじめての経験である。姉が無事に帰ってこれるかどうかの心配が、エリスの心の中の大半を占めていた。

でもその心の中の一部だけ、それとはまた別の不安がエリスを苛んで止まない。

セシルが見知らぬ女性と親しくしていた時に感じたあの感情が、未だエリスの心の奥深くで燻っているのだ。

その二つの憂慮が心を圧迫し、エリスから余裕を奪ってしまう。

やがてその叙任式が終わりを迎えても、エリスは儀式の演目のことを思い出せないくらいに上の空のままだった。自分がちゃんと杯の水を飲めたのかさえ曖昧である。

そのせいか、叙任式が終わって屋舎の外に出るまで、エリスはその男に気がつかなかった。

「おい、何でお前がここにいるんだ？」

そう後ろから声をかけられて、エリスは振り返った。

そこではじめて、その男の存在に気がつく。

分厚い筋肉を備えた大柄の体に、額の左側から下の頬まで続く傷跡が特徴の男。その浅黒い肌をした禿頭の新人騎士は、セシルと出会った時に酒場の天井に突き刺さっていた者であった。

その男は、エリスが着ている赤い礼服をじろじろ見ながら、疑念の声を上げてくる。

「何でお前が騎士団の礼服を着ている？」

「私も、特例で入団させてもらえることになったのだ」

エリスは、事実をそのまま男に伝えた。

その返答の内容に、禿頭の男がエリスを蔑むような目で見て鼻で笑う。

「ハッ、あの新しい騎士団長に金でも積んだのか？」

「違う、私は実力を認められて」

「それとも、その貧相な体で色仕掛けでもしたか？新しく団長になった奴は、けっこう若いしなあ」

下卑た笑みを浮かべて自分の体を見てくる男の態度が、エリスは妙に癪に障って視線を鋭くした。

「構えろ」

「あ？」

その唐突な言葉の意味が理解できず、男が聞き返す。

エリスは苛立ちを含んだ声で、今度は相手のはつきりと理解できるように言った。

「私が騎士団に入るに相応しいことをお前に証明してやる。だから構えろ」

「ははっ、何を言い出すかと思えば……」

男がエリスを小馬鹿にしたような顔で、肩を竦めた。

「お前の実力は本戦で見たから知ってるぞ？ あれからまだ一月程しか経ってないってのに、初戦で惨敗したのをもう忘れたか？」  
「いいから構えろ」

エリスの繰り返しの言葉に、男はやれやれといった様子で、手を招くようにして挑発する。

「わかった、わかった。ほら、来いよ」  
「……」

男の言葉が終わると同時に、エリスは無言で魔紋くを発動させて距離を詰めた。

相手がエリスの動きに反応できないうちに、その大柄な体を少し強めの力を込めて押してやる。

それだけで、男の体は嘘のように宙を舞った。  
かなりの距離を飛んで、敷地内の建物の壁に衝突する。

まだ敷地内に残っていた新人騎士達が、その派手な音に騒然となった。

偶然その一部始終を見ていた者は、目を丸くして呆然としている。エリスと男の争いは、その場にいた騎士達にエリスの強さを印象づける結果となった。

「ぐっ……あう……」

そのあまりの衝撃に、男が苦悶の声を上げて蹲る。

エリスはその姿に妙な虚しさを覚えて、さっさと踵を返した。

何をやっているのだ私は

エリスは自分のやったことに後悔して首を振る。いくら挑発されたからといって、男を痛めつける必要はなかったのだ。

戦争に赴いた姉の心配や、セシルに関する妙な感情のせいで、エリスは自分がイライラしていたことを自覚した。

男はその八つ当たりにあつたにすぎない。

そして苛立ち紛れに男を押し飛ばしてしまった今、エリスは強い孤独感に襲われていた。

そのせいで、無性に誰かと会いたくなる。

でも今は、ジエデイもセシルもない。

だからエリスは、早足で帰路につきながらサクヤの姿を思い浮かべた。

三年前に出会ってから、ずっと自分の傍にいてくれた人。

その出会いは衝撃的で最悪だった。

サクヤの凝り固まった無表情と平坦な声は、その頃のエリスにとつてかなり怖かったのを覚えている。

だが、サクヤが屋敷で働くことになってからはエリスの近くにいることが多くなり、そのうち「気くを教えてもらうことになってからは、もう毎日のほとんどの時間を共に過ごすようになった。

長く過ごしている内に、その無表情の中にある微かな感情表現と、平坦な声の中の僅かな揺らぎに気がつくようになる。

それが理解できるようになった頃には、エリスはサクヤに強い親しみを覚えていた。

彼女の気持ちを読み取れるのは私だけだ

それが無性に嬉しかった。誇らしかった。

そしていつしか、サクヤはエリスの中で大切な人の一人になっていた。

そのサクヤに会うべく、エリスは帰り道を急ぐ。

だがエリスは、その足が屋敷に到着する前に、目的の姿を遠目に見つけた。

サクヤが、エリスの知らない人物と話し込んでいる様子を見て、足を止めてしまう。

相手は黒い髪をした、琥珀色の瞳の青年だった。わりと背が高く、その顔立ちはよく整っている。

だが別に、エリスはその男自身には興味を持てなかった。

ただエリスも知らなかったサクヤの交友を見て、胸の中の孤独感が増したのである。

一身上の都合で、エリスの交友関係は限りなく狭い。

そんな中で、サクヤの意外な交友関係を知ると、何故か妙な寂しさを感じてしまったのだ。

その寂しさのせいで、その時に感じた小さな不安がエリスの中で埋没する。

エリスが立ち竦んでそこから目を離せずにいると、やがてサクヤの方がこちらに気がついた。最後に男と一言交わしてから、エリスの元へとやってくる。

「お疲れ様です、エリスお嬢様。式典の方はもう終わったのですか？」

「あ、ああ。……今話していた人は知り合いか？」

「古い知人でございます」

「そうか」

本当はもっと詳しく聞きたかったのだが、何やらサクヤから拒絶の気配を感じ取ってやめることにした。

「これから屋敷にお戻りになられるので？」

「そのつもりだ」

「ではご一緒させて頂きます」

そう言っつてサクヤがエリスの隣に並ぶ。本来ならば、エリスのやや後方に付き従うのが使用人なのだが、サクヤは今のエリスの気持ちを含み取ってくれたようである。

そして二人して屋敷への帰路につこうとして……サクヤの足が止まった。

その顔が上空へと向けられるのと同時に、何かの影が地面を横切る。

何事かとエリスが空を見上げる前に、それは大きな着地音を鳴らして落ちてきた。

日の光を反射してキラキラと光る銀髪に、緑の双眸をしたメイド服姿の少年。

たったの数日ぶりだというのに懐かしく感じるその姿に、エリスは思わず声を上げた。

「セシル!？」

「ただいまエリス」

そう言っつて、はにかんだような笑顔を浮かべるセシル。

セシルが「ただいま」と言ってくれただけで、自分の心が少し軽くなったのをエリスは感じた。

セシルの帰る場所がまだここであるのを実感できたのだ。

「今まで何処に行っておられたのですか？」

「うん、そのことも含めて説明しなきゃならないことがあってね……」

サクヤの問いに、そう答えるセシル。

セシルの若干急いでいるような様子に気がつき、エリスは首を傾げた。

何かあったのだろうか？

そのセシルが、エリスの瞳に目を合わせる。

「エリス」

「ん？」

次のセシルの口から出た言葉は、エリスは予想もしていなかったものだった。

「できれば、イルレオーネ守護騎士団の力を借りたい」

## 第二十六話 予兆

セシルがエリスに事情を話すと、すぐに騎士団本部に行くことになった。

聞けばエリスは新人騎士団員の叙任式を終えたばかりであり、今なら新しい団長であるサイラスも本部にいるはずとのことである。

エリスは早足で騎士団本部へと案内しながら、先ほどセシルが説明したことに懐疑的な声を上げた。

「しかし、その話は本当なのか？ それ程に恐ろしい魔獣が存在するなど、私は聞いたこともないぞ」

「うん、まあここにはいるはずがない魔獣だからね」

「？」

「いつぞやのあの男の台詞ではありませんが……」

エリスが頭に疑問符を浮かべると、それに追従していたサクヤが口を開く。

「セシル様のご経歴に、強い興味があります。もし差し支えなければ、教えて頂きたいのですが……」

「うーん、別に話してもいいんだけどね」

見ればエリスもそれに興味があるのか、セシルの顔をチラチラと覗き見ているようだ。

セシルは別に、外界のことを隠しているわけではない。ただ誰も信じないので口を噤んでいただけである。でも、今の彼女たちなら信じてくれる気がした。

「このことが終わったら全部話すよ。ちょっと信じられない話かも

しれないけどね」

「お前が実は天界の人間だと言われても、私は驚かないし信じると思うぞ」

自信満々にそう言い切るエリスに、セシルは思わず苦笑してしまった。流石にそんな空想上の神の類だと信じてもらっても困る。

外界のことを説明する時は、上手く話さないと甚だしく勘違いされそうであった。

それから適当に無駄話をしつつ先を急ぎ、やがて騎士団本部へと辿り着くと、エリスの先導で敷地内に入る。

その足が騎士団長がいる執務室の前にまで来た所で、丁度その扉を開けて出てきた先客と出くわすことになった。

頭の白髪を全て後ろに流し、その碧眼に強い覇気を携えた年配の男。袖のないゆったりした白い外套を着込んでおり、その年季を感じさせる皺を今は怒りによって歪めていた。

その男がセシル達に気がついて視線を向けると、エリスが若干怯えたような声を漏らす。

「あ……」

年配の男から視線を外し、俯いてしまうエリス。

そのエリスの姿を見た男は、表情を忌々しそうなものに変えた。

「穢れた娘め。まだのうのうと生きていたのか？」

「……」

男の言葉に、エリスは何も応えない。

そのやり取りを見て、セシルはその男の正体を漠然と察した。  
内界でもっとも多くの人に信じられている宗教、キルストア教の  
神官だ。

「さつさと自決でもすればまだ救いはあるだろうに。醜く生に縋り  
付く呪い子め。そんなにお前は人の世に不幸を呼び込みたいか」

「……」  
「聞いているのか？ 私は、穢れたお前に救いの道を説いてやって  
いるのだぞ？ 今すぐにでも、天に召されてその魂を浄化してもら  
えと言っているのだ」

男から放たれたる言葉に、セシルは頭に血が昇るのを感じた。

だがセシルが何か行動を起こす前に、サクヤの手がそれを制する  
ようにセシルの前へと差し出される。

思わずサクヤの顔を見ると、セシルは戦慄した。

セシルでもはつきりと分かるぐらいに冷たい目をしたサクヤが、  
その神官なる男に視線を注いでいたのだ。

神官はエリスのことしか見ていないのか、それに気がついていな  
い。

やがて何も答えないエリスに鼻を鳴らすと、神官なる男はそのま  
まセシル達を横切って立ち去ってしまった。

その背中が見えなくなるまで、サクヤは冷たい視線を送り続ける。  
セシルはその様子に、嫌な予感を感じた。

漠然と危惧していたことが、水面下で着々と進んでいるかのよう  
な気がしたのだ。

そんなセシルの不安をよそに、サクヤはいつもの無表情に戻って  
エリスに起伏のない声をかけた。

「エリスお嬢様、お辛いかとは存じますが今は……」

「分かっている」

少し目尻に溜まっていた涙を拭くと、エリスは顔を上げた。気丈に表情を取り繕い、ここに来た目的を果たすべく、執務室の扉を手の甲で叩く。

「……入れ」

若干の間があつた後、サイラスの声が入室を許可した。そこで現れた三人の姿に、サイラスは眉をひそめる。

「お前らか……来る時間が悪かつたな」

サイラスのその言葉に、エリスが耐えきれずに声を上げてしまった。

「やはり、先ほどの神官は私のことを……？」

「それは、お前が気にする必要のないことだ」

エリスの不安そうな言葉を、あっさり切り捨てるサイラス。だが俯いてしまったエリスを見ると、その顔は無愛想なまま、ぼつりと言葉が付け足された。

「……私は言ったはずだ。我々が必要とするのは魔獣に対抗できる力だけだ。そこに品性や生い立ちは問わないし、その理念を私は曲げるつもりはない」

その言葉が意味することを察して、エリスが顔を上げる。

その一連の流れを見たサクヤが、起伏のない声でボソッと呟いた。

「これが、巷で噂の>ツンデレ<というものでございませぬ」

「ツンデレ？」

「……」

首を傾げるエリスと、苦々しい顔で黙り込むサイラス。

サイラスが以前言っていたように、確かにサクヤは若干空気が読めないようだ。とセシルは思った。

「それで、一体私に何の用だ？」

ゴホンと一つ咳払いをしてから空気を取りなしたサイラスが、エリス達の用件を促す。

エリスの視線を受けたセシルは、早速あの魔獣のことをサイラスに話すことにした。

「実は」

セシルは自分が視てきた魔獣の、その強さや影響などを事細かにサイラスに伝えた。

信じてもらえるかどうか心配だったが、サイラスは意外とあっさりセシルの話信じてしまう。

拍子抜けしたようなセシルの表情を見たサイラスは、それに補足の言葉を口にした。

「半月ほど前から、魔獣が激減していてな。これはお前の証言と一致している。それに、お前が我々の知らない魔獣の情報を持っているのは、リチャードの件で知っていた。……私としては、是非その全てを教えてもらいたいのだがな」

そう言ってセシルに視線を送るサイラスに、セシルは曖昧な笑顔

で応じた。

正直、それはちょっと面倒くさい。

だがサイラスは、そんなセシルの笑顔を受けると慌てて視線を逸らし、コホンと咳払いをした。その耳が少し赤くなっているのが凄く気になる。

そんなサイラスの反応に、執務室に微妙な空気が漂って、皆が沈黙してしまった。

「……」

「……」

「……」

「……っ失礼」

無表情のまま鼻から血を流したサクヤが、上品にそれをハンカチで拭き取る。

それにセシルが堪らず叫んだ。

「なぜ今鼻血を!?!」

「ご理解なさっているくせに」

「理解したくないよ!」

「それで、どちらが攻め手でございましょうか?」

「それ、生々しいからやめて!?! とういか、話を戻そうよ!」

セシルの悲痛な声の要求に、サイラスが応じた。

話の流れを、先程までの魔獣の件に戻してくれる。

「それで、その魔獣の位置は分かっているのか? 我々はどう動けばいい?」

「とにかく、大量の魔獣が拡散してしまうから、できるだけ戦力を

集めてそれを抑えて欲しい。今、内界で声をかけられるだけの戦力を集めてて、これにはドラゴン達やエルフ達も協力してくれるよ。魔獣の位置については、地図があると助かるんだけど……」

ドラゴンやエルフという単語に驚愕した様子を見せつつも、サイラスは机の中から地図を取り出した。

「ならば、各地の騎士団員達を全て呼び集めよう。どうせ今は魔獣がそっちに集中しているのだ。問題はあるまい」

「うん、ありがとう。助かるよ」

セシルはその言葉に感謝の意を述べながら、机に広げた地図を見る。

「ええっと、ロスラヴリはどこになるの？」

「ここだ」

セシルは、サイラスが指し示した指の位置を確認した。その地点から、セシルがドラゴンの背に乗って移動した方角を辿っていく。

「ここらへんかな。かなり険しい岩山があつた場所なんだけど……」

そのセシルが示した場所に、サイラスが表情を曇らせた。

それはサイラスだけでなく、エリスまでもが難しい顔をしてしまう。サクヤは無表情なので内心がどうなのか読み取れないが。

「どつしたの？」

セシルが首を傾げると、その疑問に答えたのはエリスだった。

「セシル、今この国では戦争が起こりそうなのは知っているか？」

その問いに、セシルは首を横に振る。そんなことは初耳だった。エリスは、セシルの示した地点を見ながら声を絞り出した。

「そこは、トランテスタとマグケストの国境なんだ。イルレオーネとの連合軍が、今はそこで相手を迎え討とうと戦力を集めている。つまりそこは……」

セシルはその事実にも、思わず頭を抱えそうになった。

## 第二十七話 鎧と兜

結局、敵国が戦争の動きを止めない限りこちら側も待機させている兵を引くことはできないそうだ。どちらにしる、そんな空前絶後の魔獣のことなど、軍も貴族達も信じようとしないだろうとはサイラス談である。

ならばせめて、両国の軍が魔獣の傍でぶつかり合う前に事をはじめることになった。

サイラスも出来るだけ迅速に騎士を集めて駆けつけるとは言っている。だが、その前に戦争がはじまる予兆があれば、その到着を待つことなしに戦闘をはじめなければならぬ。

「だから先に行って待つてよ」

「ああ、私達も絶対に後から駆けつける」

セシルの言葉に、エリスは力強くそう答える。

サイラスに話をした後、すぐに騎士団本部から屋敷に戻ってきたエリス達は、今は鍛錬場にてとある人物を待っている状況であった。エリスも、セシルを見送った後すぐに騎士団本部に戻って待機することになっている。

言葉を交わし合う二人を見たサクヤが、不意にセシルに歩み寄って起伏のない声をかけた。

「私、この戦争が終わりましたらセシル様と」

「はいはい、どっかで聞いたような台詞はもういいから」

「ですが、私のお腹の中にはもうセシル様の子が」

「出来るようなことした覚えはないからね!？」

「では、急にセシル様が身の上話をおはじめになるあたりで手を打

「ちましよう」

「どんだけ僕に死亡フラグ立てたいの!？」

一応は切迫した状況であるのに、変わらずいつも通りの二人にエリスは笑ってしまいそうになる。

そんな和やかな空気の中、やがて鍛錬場の地面に黒い影が差した。その直後に巨大な着地音という、ついさっき見たことのある光景が繰り返される。

落ちてきたのは、布に包まれた荷物を片手で抱えたレティシアだった。

「皆様、ごきげんよう」

その声を耳にしながら空を見上げると、エリスの目に遙か上空で二枚の翼を羽ばたかせるドラゴンの姿が見えた。恐らくは、セシルが落ちてきた時もその姿はあったのだろう。

それを確認して視線を前に戻すと、ふとレティシアと目が合った。ロスラヴリで会った時はあまりエリスに関心がなさそうだったのに、今は興味津々といった様子でその視線を注いでくる。

さらには親しげな様子で歩み寄ってくると、レティシアは残った片手でエリスの右手を取ってみせた。

「セシルから、貴方の魔力のことをお聞きしましたわ。とても大きい魔力を持っているのだとか」

「えっ……あ……」

その唐突な行動に、エリスはどう反応していいか分からずに困惑する。

そんなエリスを余所に、レティシアは言葉を続けた。

「貴方には期待していますのよ？このことが終わったら、お茶でも一緒にゆつくりお話ししたいですわ。よろしいかしら？」  
「あ、ああ」

エリスが戸惑いながらも頷くと、レティシアは満足げな顔で手を解放する。その所作を見て、もしかしてレティシアは相手が逃げないように手を握っているのではないかと、エリスは思ってしまった。

レティシアは続いてセシルに視線を向けると、その声を弾ませる。

「セシル、貴方が考案したものができましたわよ」

そう言いながらレティシアは、抱えていた荷物からそれを包んでいる布を取り払った。

その布の下から姿を現したそれは、胸部を覆えるぐらいの大きさの胸鎧だった。信じられないほど滑らかに仕上げられたそれは、その銀色の光沢の上に微かに文字のような光が蠢いているのが見取れる。

どこかで見覚えのあるその文字に、思わずエリスは声を上げていた。

「これは>魔紋<？」

「正解ですわ」

エリスの反応に頷くと、レティシアはどこか得意げな様子でそれを説明する。

「わたくしの能力とドラゴンの翼にあった術式、さらには外界の技術とエルフ達の秘術による合作ですの。これを装備しながら>魔紋<を発動しますと、この鎧にも魔力が循環して>揚力<系の呪文が

発動するようになってますのよ」

レティシアはその言葉の途中あたりでセシルに鎧を手渡すと、セシルは早速服の上からその鎧を装備してみせた。

セシルが体に、魔紋くを発動させると、その鎧の文字の輝きが増幅する。

するとその背の部分から、二対の青い光の膜が突き出すようにして出現した。

セシルの足下に軽い土埃が舞い上がり、その体が地面から僅かに浮く。

「うん、ちゃんと飛べるみたい」

その出来に頷いて満足しているセシルを、エリスは呆けたような顔で眺めた。

その背にある青い光は、どう見ても翼の形にしか見えなかったのだ。

エリスの様子に気がついたセシルが、不思議そうに首を傾げる。

「どうしたのエリス？」

「……ご自分の姿を見れば分かりますわ」

そう言ってレティシアは右手をセシルに向かって掲げると、そこから等身大の金属鏡を精製してみせた。それに映った自分の姿に、セシルの表情が苦笑いへと変わる。

その一連の流れを見たエリスが、少し驚いた声を上げた。

「それは、レティシアの能力なのか？」

「そうですね。簡単に言うると金属類を精製する能力ですの。色々と制約はありますが、けっこう便利で自慢の能力ですよ？」

「ふむう……」

「貴方にも、そのうち何らかの能力が発現しますわよ」

羨ましそうな顔をするエリスに、レティシアが慰めるような声をかける。

そこでふと、エリスはサクヤが若干離れた場所に移動しているのに気がついた。

「サクヤ？どうしたんだ？」

「いえ、何でもございません」

起伏ない声でそう答えるサクヤだが、エリスはそこから意外なものを感じ取ってしまう。

それはサクヤが、今まで一度も見せたことのないものだ。

あのサクヤが抱くとは、欠片も思っていなかった感情。

エリスがそんなサクヤに声をかけるべく口を開くと、それを遮るようにサクヤが先に声を上げた。

その拒絶の意思表示に、エリスは口を噤んでしまう。

「レティシア様、その能力で兜をお作りになることは可能でござい  
ますか？」

「兜？ ……まあ、よほど精緻なものでない限りすぐにできますわ  
よっ。」

「ならば、セシル様用に一つお作りになって頂きたい物がものご  
ざいまして……」

サクヤが要求した兜の形状を聞いて、エリスは目を丸くした。

「サクヤ、それは……」

サクヤが、人差し指を口に当ててエリスに沈黙を要求する。エリスは少し迷ったものの、その要求を受け入れた。

サクヤが何を企んでいるかは分からないが、その兜はセシルが今着ている鎧とならピッタリ合うんじゃないかと思ったのだ。

レティシアが、すぐにその要求通りの兜を作ってみせる。

それを受け取ったサクヤは、そのままそれをセシルに手渡した。

「戦う時は、それをお被りになって下さい」

「何で？」

戸惑った様子で疑問を口にするセシルに、サクヤはもつともらしい理由を言ってみせる。

「素顔を晒しながら戦うと、色々と不都合があるかと存じます」

「そうかな？」

「恐らく王都では住み辛くなるかと。セシル様のような規格外すぎる力を目の当たりにすると、黙っていられなさそうな組織が幾つかございますので」

セシルはそれに少し唸って悩んでいたが、次のサクヤの言葉で一気に受け入れる方向へと傾くことになった。

「もしその兜をお被りになって戦って下さるのなら、全てを終えられた後でセシル様からお預かりしていた衣服をお返しいたしますよ  
う」

「本当に!？」

「はい。ですが、それまでは私が指定する服をお召しになって頂き

ます。その鎧にあつ衣装を見繕いますので、少しだけお時間を頂きますか？」

「うん、いいよ」

セシルはメイド服から解放される目処が立ったのが嬉しかったのか、上機嫌で頷いてしまう。

それを確認して、サクヤがほくそ笑むのをエリスは感じ取った。

そこに、先ほど見せていたあの感情は残っていない。

そのことにエリスは安堵しつつも、あの時のサクヤの顔が妙に頭にこびり付いて離れなかった。

サクヤが、あの時に見せた感情。

それは怯えだった。

何に怯えてていたのかは分からない。

でも、確かにサクヤは何かに怯えていたのだ。

エリスはそれを見てしまった時、凄まじく嫌な予感に襲われた。胸の中に、焦燥感が沸き上がってくるのが止められない。

私は何かを見落としているのではないだろうか？

エリスはそんなことを思いながら、ずっとサクヤの横顔を眺めていた。

## 第二十八話 悪夢

六歳の頃に記憶を奪われてから、「私」ははじまった。

心から根こそぎ奪われた大切なものの変わりに注ぎ込まれたのは、  
狂気。

その狂気のみに従うように、その狂気のみに従うように、その狂  
気のみに殉じるように。

それは、来るべき本当の狂気を受け入れるための準備だ。

青白い肌をしたその狂気の塊は、その赤すぎるほど赤い唇でそう  
言った。

この世界に慈愛はいらない。

この世界に奇跡はもつたいない。

この世界に救いは存在しない。

私に一つ一つ刻む付けるように、その女は繰り返した。

この世界に必要なのは罰だ。

この世界には絶望さえあればいい。

この世界に存在するのは罪のみだ。

私に一つ一つ確かめるように、その女は笑いながら言った。

お前は私の分身だ。

お前は私の人形だ。

私はお前で、お前は私なのだ。

記憶を蹂躪された私は、その女の強力な狂気に逆らえない。

その女から滲み出る染料が、私の頭の隙間に染みこむようにして  
浸食していく。

でも残っていた元の私の人格は、必死にそれに抵抗した。

でも、それは無駄に終わった。

そのことは、ふと鏡を見た時にすぐに理解した。

まるで醜い害虫を見た時に覚える、深い嫌悪を感じたのだ。

私がその女に感じていた感情を、そのまま鏡に映る自分の姿にも  
感じた。

女は人を呪うような笑みを浮かべて言う。

その感情はあたりまえだ。

私はお前なのだから。

お前が私を見て感じた感情は、自分を見た時の感情なのだ。

私はそれを理解した時に、私を諦めてしまった。

抵抗しなくなった私は、その女の狂気を全て自分の中に受け入れ  
てしまう。

頭の中にあの女が入り込んでくるのが分かった。

私の中に私を残したまま、私はその女の分身となっていく。

私の意識を残したまま、私はその女になった。

私という悪魔はこの時に誕生したのだ。

斯くしてその悪魔は、その女の悪意を代弁してまき散らす。  
私はそれに耐えきれずに全てを諦めていった。

「クハツ、ハハハ、アハハハハ」

私は笑うという行為を、あの女の代わりにして見せた。

既に自分自身には愉悦などという感情は存在しない。

様々なものを諦めていくうちに、私の中から感情が消えていったから。

だからその笑い声は、酷く歪なものになる。

表情も上手く作れないので、無表情のままだ。

だが、頭の中を支配するあの女が笑っていたから、それを再現する。

あの女の憎悪の対象に、出来うる限りの悪意をぶつけるため、それを続ける。

目の前で自分に向かって頭を擦りつけていた男が、絶望に顔を歪ませた。

だがそれでも、男の言葉は止まらない。

「た、頼む！ 妻と子供だけは助けてくれ！」

この男の慈悲を乞う声は、あの女の憎悪に触れた。  
あの女が頭の中で叫んだ。

この世界に慈悲は必要ない。  
そんなものがこの世界に存在するなど、許せない。

「アハハハハハハハハッ」

私は機械的に演技を続けたまま、男を手に持った刀で刺し殺した。  
まるでそれを、念入りに世界から掃除するように、何度も何度も  
滅多刺しにする。

「お父さん！ お父さんが！」

幼い声が悲痛な声を上げるのを聞いて、やっと私はその男の死体  
を蹂躪するのを止めた。

あの女の声が頭の中で響く。

そうだ、それでいい。この世界には絶望さえあればいいのだ。

だが、その子供を必死に抱きかかえて守るように背を向ける女を  
見て、またそれがあの女の憎悪に触れる。

「神様……どうか、どうか私達を守り下さい……」

小さく呟かれたその声に反応して、私は刀を振り上げた。  
あの女の言葉が頭の中で繰り返す。

この世界に奇跡はもつたいない。  
それを呼ぼうとするなんて、許せない。



この世界に救いなんて存在しない。  
そんなものを求めるなんて許せない。

私はあの女に命じられた仕事を終えると、一緒にこの任務についていた男に視線を向けた。

その男の顔が、何か酷く醜いものを見るような目で私を見ている。

それは当然だろう。

私は、その現場にあつた鏡を見た。

だって私は、あの女は、こんなにも醜い。

でもそのことに何も感じない。

既に自分を嫌悪する感情さえ死んでいたから。

「……人の所業ではない」

そう吐き捨てる男。この男は、まだ私達が人だとも思っているのだろうか？

「アハハハハハ……」

そこで私は、まだ自分が演技を続けていたことに気がついて、その笑い声を止めた。

やがて何を思ったのか、急にあの女は私をあっさりと捨てて国外へ放逐した。

頭の中から、あの女が消える。

それは解放を意味したが、もう私には何も残っていなかった。

中身の無くなった人形は、ただ何も考えずに世界を彷徨い、ただ生き続けることになる。

そして、私はその少女と出会ったのだ。

サクヤは、そこでいつもの悪夢から目が覚めた。

屋敷の敷地内にある、いつもエリスと二人でいた鍛錬場。今は黄金色に染まるその鍛錬場の丸太を背にして、サクヤは座り込んでいた。

二人が行ってしまった後、どうやら少し居眠りをしていたらしい。

サクヤはそこでふと、背にしている丸太に二年前を思い起こした。大会で予選の初戦さえ勝てずに帰ってきた後、エリスが必死に剣を打ち込んでいた時のことだ。

その体質の問題とは別に、年齢だけで考えてもそれは当然の結果

だった。それなのに、エリスは泣きじゃくりながらこの丸太に剣を打ち込んでいたのだ。

世界に受け入れられようと、いつもエリスは必死に何かと戦っていた。

すぐに泣いてしまう癖はあるものの、絶対にその足は止めない。その熱量が放つ光に、自分はただ目を細めていたように思う。

サクヤは静かに目を閉じて、その姿を瞼の裏に描いた。

エリス・ムーア。

私の大好きな、私の光。

彼女は私にもその熱量を分け与えてくれた。

そしてそれは、私が感情を取り戻すきっかけとなった。

私に少しの感情が戻るのと同時に、世界の景観に色が戻った。

冷たい灰色しかなかった世界が、暖かく鮮烈なものへと変化する。

私はそれに深く深く感謝した。

だが、それは救済を意味しなかった。

狂気を手放した私は

感情を取り戻した私は

あの女から解放されつつある私は

自分のやってきたことを理解して絶望の底に叩き落とされた。

感情を取り戻せば取り戻すほど、これまでの自分の残虐な行為を理解して押し潰されそうになる。

自分の醜さが際立っていく。

さらにはセシルとの出会いを契機に、私の心は一気に人間へと引きずり戻されてしまった。

心の存在は予想を越えて私を蝕んでいく。

そこに後悔はない。私はその苦痛や罪悪感さえも、取り戻せたことに感謝している。

自分が犠牲にしてきた人達のことを考えると、私にはもったないぐらいだ。

でも、私が蝕まれていく事実は変わらない。

まるで火に群がる虫のように、光に近づくほど私の身は焼かれていく。

このままでは、私は私を保っていられる自信がない。

少女の光が強くなるほどに、私はそこに耐えられなくなっていく。

少年に惹かれるほどに、私は自己嫌悪で惨めになっていく。

私が私でいる限り、私は少女の傍にいようと思っていた。

本当は私にはその資格がないけれど、その少年が好きだった。

でも、もうここが潮時だと私は判断した。

私が二人の傍で狂えば、確実にそれは光を陰らせてしまう。

だからもう、終わりにしなければならぬ。

ならばせめて最後には……

## 第二十九話 異変

まだ昼下がりでだというのに、そこは黒い絵の具を落とし込んだかのように暗澹を漂わせていた。

ロスラヴリから北にある、国境に最も近い場所にあるセヴァストという名の砦。

その砦の屋上の一角にて、ジエディは空を眺めていた。

その上空を覆い尽くす暗雲は、まるでこらからの未来を指し示すかのうようである。

もうすぐ戦いがはじまるのかもしれない。

そんなジエディの予感を裏付けるように、その隣にまで歩み寄ってきたステラがそれを報告した。

「先ほど、マグケストから宣戦布告の使者が来たようです」

「そう……」

ステラの言葉が示す意味に、ジエディは短く答えて頷く。

それに何を思ったのか、ステラが感情を押し殺したような声を上げた。

「……怖くないのですか？」

ジエディはその声色が気になってステラを見ると、その小柄な体が震えているのに気がつく。

気丈に表情を取り繕うとしているものの、その瞳は綻るようにジエディを見つめていた。

そんなステラにジエディは微笑むと、その胸の中へと彼女の頭を

抱き寄せる。

「私は全然平気だけど、ステラちゃんは怖いんだ〜？」

「わ、私はそんな」

「でも、大丈夫よ〜？私がちゃんと守ってあげるからね？」

「うう……」

いつものステラならば、「貴方に守ってもらわなければならない」といった類のことを言っていてジエディの腕の中から離れようとするのだが、今の彼女は逆にジエディに顔を埋めてくる。

その姿は、そうやってカタカタと震える体の反応を必死に押しとどめようとしているかのようだった。

史上最年少の宮廷魔術師。

それ故に若い身空のまままで戦場へと赴く彼女の頭を、ジエディは慰めるように撫でる。

過酷な戦いを押しつけようとする運命に代わって、ジエディは心の中でステラに謝った。

しばらくそうしていると、ジエディはその最初の異変に気がついた。

分厚い雲に太陽を遮られた空。

その空に、一つの影が過ぎるのを視界の端に捉える。

ジエディがふとそれに顔を向けると、その姿を視界に収めて驚いた声を上げた。

重厚な鱗に覆われた体を、膜のような二枚の翼で空へと舞わせるその姿は

「ド、ドラゴンー!？」

「えっ？」

そのジエデイの言葉に、ステラも興味を惹かれて顔を上げる。二人して空を見回すと、すぐにそれが一つでないことを理解した。人々の間では、伝説にまで謳われているドラゴン。

キルストア教では人間を守る為に天界から使わされた存在とされ、国によっては決して人の身では敵わぬ尊き空の支配者として神のよう崇められている。

そんなドラゴンが、おびたしい数で国境線上の暗い空に集まってきたのだ。

その光景は、まるでこれから天変地異が巻き起こる前兆のように感じられた。

当然、ここに滞在する他の者達もそれに気がつき、皆の中が騒然となる。

それを目にする人々から強い不安が噴出し、敬虔なキルストア教の信者の中には、膝を折って祈る者から泣き出す者まで現れた。

「ジエ、ジエデイ……」

堪らず、ステラが震えた声を上げる。

強い不安を感じたのはステラも同じようで、ジエデイに縋り付く腕に力が込められた。

ジエデイはそれに、どう慰めていいか分からず困惑する。

この状況は、ジエデイにとっても理解の範疇を越えるものだった。

だが、そんな人々の不安も、次に空に現れたものに全て吹き飛ばされることとなる。

丁度雲の切れ間から流れ込んだ光に、照らし出されるようにして姿を現したものの。

それは、二人の少女だった。

まるで戯れるかのように、空に舞う二人の人間。

いや、それを人間と呼ぶのは冒涇だと、その背中の青白く透き通った二枚の翼を見て、人々は理解した。

白い羽衣のようなドレスと、その上に身に着けられた白銀の鎧。

さらには羽根の付いた兜で目元までを覆ったその姿は、まさしく神話にあった戦乙女そのものである。

その戦乙女達が、背中の翼から青い粒を散らしてドラゴン達を導く。

その二人の天使が降臨した空に、人々の視線が釘付けとなった。

まるで神話の一場面であるかのようなその光景に、誰もが息を呑んだ。

「綺麗……」

ステラが、ぽつりとそう呟く。

だがジェディは、その二人の片割れのほうに何故か見覚えがあるような気がして、素直に同じ感想を抱けなかった。

その疑念に答えが出るのを待たずして、空の異変に圧倒されて静寂が漂っていた砦に、再び騒然とした空気が流れ込む。

ジェディは屋上からそれを見下ろすと、砦の入り口にあたる門に、とある組織の集団の姿を確認した。

「あれは、イルレオーネ守護騎士団？」

ジェディと同じ方向に視線を向けていたステラが、その集団の名前を口にする。

その集団の中に一人の人物を見つけて、ジェディが思わず声を張り上げた。

「エ、エリスちゃん!？」

ジェディは何となく感じている厄災の予感と、そこに姿を現した妹の姿に、凄まじい不安が胸の中で荒れ狂うのを感じた。

一方、同じ光景を目撃したマグケスト側の軍は、イルレオーネ側よりもさらに深い混乱に陥っていた。

彼らが遭遇したのは、ドラゴンとその天使だけではなかったのである。

マグケスト側の軍を指揮する立場である年配の男は、その白く長い顎髭を撫で付けながら、自分達の陣地に訪問したその言葉の言葉を聞いていた。

「兵を皆の中へと引き戻せ。その中にいる者以外の命は守れない」

それは一見、人間とよく似た背格好をしている。だが、その尖った耳の形とその身に纏う空気が、自分達と違う種族なのだと言配の

男に知らせた。

腰にまで伸ばされた長い銀髪と、女性だと見紛うほどに整った顔をしたそれが、マグケストの軍を訪問した集団を代表するように立って、年配の男に言葉を続ける。

「一応は警告した。これで我らエルフに課せられた使命の一つは果たしたはずだ。後は好きにするがいい」

そのエルフを名乗った男は、それだけを言って踵を返すと、連れてきた集団を率いてさっさと立ち去ってしまう。

その流れを受けて、年配の男の隣に控えていた側近の青年が声をかけてきた。

「どうしますか？」

硬いその声とは裏腹に、その青年は動揺しているようだった。

いつもは覇気を有り余したような勝ち気を携えている瞳を、今は戸惑いによって揺らせている。

赤く短い髪をした青年の内心を察して、年配の男は嘆息した。

「どうもこうも……」

あの人間と関わりを持ちたがらないエルフ達が、わざわざ警告に来たのである。いくら折り合いが悪いと言っても、古代からずっと人間を守る者として存在する種族だ。その警告の内容に嘘はないだろう。

ならば、年配の男が下す判断は一つしかなかった。

「従うしかないの」

「よろしいので？」

「お主はあそこの下に飛び込んで行きたいか？」  
「……」

年配の男が、天使らしき二人の姿とそれに群がるドラゴン達を顎で差すと、側近の男が沈黙する。

「僕はとてもじゃないが、あれに関わりたいとは思わない」  
黙り込んでしまった側近に苦笑しながら、壮年の男はそうぼやいた。

何よりも、あの光景を見て兵士達の士気が保てるわけがない。

こうしてマグケスト軍の侵略は、その出鼻を挫かれたのである。

## 第三十話 国境での戦い

飛翔鎧と名付けたその初披露は、生憎の曇り空の下でやることになった。

セシルとレティシアはその身を空に舞わせながら、ドラゴン達に配置を指示していく。

「じゃあ、よろしく頼むね」

『任せられよ』

そう応じたドラゴンの鼻先を手で撫でることで、セシルは感謝の意を伝えた。

その目が妙にうつとりしていたことからして、何だかドラゴンにまで性別を間違われている気がする。

それは恐らく、サクヤに着せられたこの羽衣のような白いドレスのせいだとセシルは思った。

「何でまた、こんな戦いにくい衣装を……」

「でも、よく似合ってますわよ？」

レティシアが上機嫌な声で、その衣装を肯定する。

どうやらセシルと同じ格好をしているレティシアは、この衣装がかなり気に入ったようだった。元からレティシアは、お気に入りのドレス姿で戦いに行く癖があるので、大して気にならなかつたらしい。

ただレティシアの場合は、いつもそのドレスが汚れたり、ほつれたりして激昂するのだが。

レティシアは外界では、凄まじく気が短いので有名だった。

セシルはなんとなく、レティシアはドラゴン相手にも怒り狂って暴れたんじゃないかと思っている。

確かドラゴンは人間の若い女性を好む傾向があるらしいのだが、レティシアがセシルと同じように鼻先を撫でて、どのドラゴンも妙に体を萎縮させているのだ。

レティシアはそれに気が付いた様子もなく、上機嫌で飛び回ることとでドラゴン達に緊張を振りまいていく。

その様子に溜息をついてから、セシルは改めて山の上に鎮座している巨大な魔獣に目をやった。

その大きさだけなら、既に外界で現れたことのある歴代の最上位クラスの中でも有数のものとなっている。

その体内に保有する核の数は、万を余裕で越えていそうだった。対するこちらの数は、エルフ達とドラゴン達の個体数を合算しても全然届かない。

イルレオーネ守護騎士団はほぼ全員が集まって駆けつけてくれたが、彼らの戦力では自国の軍隊である魔術師達を守るので精一杯だろう。

つまり結局は、その大半の掃討はセシルとレティシアがするしかない。

かつてのセシルならば、これはわりと苦手な戦いだった。

攻撃の射程範囲がどうしても狭かったセシルは、一対一は得意でも一対多数の殲滅戦には向いていなかったのだ。

セシル自身が負けることは絶対にならないが、その数の大半を逃がしてしまっただろう。

でも、今の自分なら何とかかなりそうだ。

セシルはそう思って、軽くを滾らせる。

それに何かを察したのか、レティシアがセシルの傍にまで戻って

きた。

まるでこれから、ささやかな誕生パーティでもはじめるかのよう  
な気軽さで、声をかけてくる。

「それでは、もうはじめましょうか？」

「うん、まずはアレの中心になってる核を破壊しないとね」

「では、手筈通りにいきますの」

セシルとレティシアが、その魔獣の真上にまで移動する。

それを取り囲むように待機していたドラゴン達の間で、緊張感が  
漂った。

「それにしても、ピクリとも動きませんわね」

「うん、まるで本物の>蛹くみたいだ」

この魔獣を視た時から、何かがおかしいとセシルは思っていた。

それはもしかしたら、二〇〇〇年前から続いてきたアースガルズ  
の使命の何かに繋がるのかもしれない。

もしここが外界であれば、その魔獣がどうなるのか観察してみた  
かったぐらいだ。

でもここは内界である。

だから今回は、それが「何か」になる前に始末することにした。

いずれ外界で同質の者が現れたその時は・・・

セシルがそんなことを考えている内に、レティシアはもう攻撃の  
準備に入っていた。

両腕を掲げて、自身が出せる限界量の大きさの槍を精製していく。  
やがてその穂先だけでもレティシアの数倍はありそうな槍を作り  
上げると、それを全力で魔獣の上に投げ降ろした。

それにセシルが追従して急降下する。

能力を持っているのは最上位クラスの核のみだ。だから魔獣が拡散しようとするその瞬間にこそ、中心となる核を見つけ出せる機会があるはずだった。

レティシアの槍が魔獣に突き刺さると、それに反応して急激にその体が膨張し始める。

そこまでの流れを、セシルは能力で視続けた。

セシルの予測通り、中心となる核に魔力が集中していくのを視て取る。

「セシルっ！」

レティシアの確かめるような声には応じず、セシルはその膨張する魔獣の体表に掌底を打ち放った。

だが、その衝撃は魔獣の体表に何も変化を起こさない。

> 気くの技の一つである > 浸透 <

それは相手の体表から衝撃を内包した > 気くを流して、内部から破壊する技だ。

セシルは、魔獣の体内にある中心核に向かってその > 気くを送り込む。

手の平から水が流れ込むようにして侵入した > 気くは、その中心核がある部分に到達すると一気に衝撃を解放した。

それによって、魔獣の体内の中心核が砕け散る。

それを契機に、魔獣の膨張が止まった。

その体を爆散させることなく、まるで砂山のようにボロボロと崩れ落ちていく。

その崩れ落ちた欠片の一つ一つが、下位魔獣となって動きはじめた。

様々な種の下位魔獣が入り交じり、地上だけでなく空へも、羽根を持った魔獣達が一斉に散らばる。

「さあ、ここからが本番ですわ」

そんな中で聞こえたレティシアの声にふと嫌な予感を覚えて、セシルは全速力で空へと飛翔した。

それと同時に、魔獣を貫いて地面に刺さっていた槍から、放射線状に無数の針が突き出す。

それによって、散らばろうとしていた魔獣達を中心部から串刺しにしていった。

それを見届けて、セシルが抗議の声を上げる。

「殺す気!？」

「あんなので死ぬ貴方ではないでしょう」

悪びれた様子もなく降下してきたレティシアは、巨大な槍からトゲの付いたメイスのようになってしまった武器の柄の先を握る。

それを軽々と引き抜いて一振りするだけで、無数の下位魔獣がその巨大な質量と衝突して砕け散った。

「呑気に喋っている場合ではありませんことよ？」

「分かってるよ」

見れば、もうドラゴン達は交戦をはじめているようである。

空へと散ろうとする魔獣達に、その鋭い爪や牙、さらには高熱のプレスにて応戦していた。

一方、空を飛べない地上の魔獣達は、上手い具合に峻険な山の崖下にある街道に転がり落ちて流れてくれるようだ。岩壁の狭間のその道沿いに、南北へと二つに分かれて行く。

北側ではエルフ達がそれを迎え討ってくれるはずだった。

対して南は、イルレオーネ守護騎士団が待機している。エルフ達と比べて戦力的に不安がありそうに見えるが、騎士団にはエリスがいるのだ。

> 魔紋くを刻んでから一ヶ月とちょっと。

今のエリスならば、下位魔獣なぞ何匹いても敵ではない。

後で、サクヤに頼まれているアレもしなきゃ。

セシルはそう心に留めながら、両手の拳を構えた。その場から動かずに、常人には霞んで見えない程の速度で拳打を連続で撃ち放つ。その拳打が一つ放たれる度に、離れた場所にいる下位魔獣の体を跡形もなく消し飛ばした。

> 気くの技である > 遠当て < の連撃。

次々と凄まじい速度で放たれるそれは、セシルの視界に入る魔獣達を瞬く間に打ち砕いていく。

「また妙な技を修めておられますわね」

レティシアは手に持つメイスを振り回しながら、拳を振るセシルを見た。

その拍子に、偶然にもメイスの攻撃の合間を抜けてきた下位魔獣の接近を許してしまう。

レティシアは事も無げにそれを砕いて見せたが、その体内にある黒い血が白いドレスに降りかかってしまった。

わりとお気に入りだったその白いドレスに、黒い斑点がいくつも付着する。

「……」

それを見たレティシアは、至る所で虫のように蠢く下位魔獣達に

微笑みかけた。

その手に持つ武器の形状を、蠅叩きのような形に変化させる。

さりげなくドラゴン達が、そこから距離をあけて避難した。

「死にさらせやこの虫けらどもおおおおおおおおおおおおお  
おおおお」

鬼の形相に豹変したレティシアが、雄叫びと共に凄まじい暴風を  
まき散らして武器を振り回しはじめる。

その風圧に吹き飛ばされた下位魔獣が激しく飛び交い、それは大  
きな黒い空気の渦を形成した。

もしドラゴン達が避難していなければ、その下位魔獣の竜巻に巻  
き込まれていただろう。

もはや目が血走って回りが見えていないレティシアを見て、セシ  
ルは小さく溜息をついた。

### 第三十一話 奮闘

地を揺るがす程の轟音を合図に、その戦いははじまった。エリスはそれを見届けて、人知れず生唾を呑み込む。

遠目にでも、その現実離れた激しさはよく理解できた。幾つも閃光が走り、断続的に大地が揺れ、さらには竜巻までもが発生する。おびただしい数のドラゴンと二人の天使が、無数の魔獣達を相手に戦闘を繰り広げていた。

その光景は、もう誰が見ても神話で語られる戦争そのものである。人知を越えた戦いに、誰もがその身を震わせた。

エリスだって何も知らなければ、あれは冥界と天界の戦争だと言われて信じただろう。

できれば、それをずっと眺めて目に焼き付けておきたかった。

だが、その戦いに見惚れている暇など無いということ、こちらに近づいてくる音によって悟る。

見ると、無数の黒い魔獣達が雪崩を打ってこちらに押し寄せてきていた。

それはまるで、川から氾濫した黒い水が洪水となってこちらに流れってくるようである。

遠くで行われている激しい戦いに加えて、その押し寄せてくる魔獣達の数の多さに、騎士団員の誰もが怯えて萎縮してしまった。

通常の騎士は、一匹の魔獣を二人かがりか三人かがりやつと倒せるのだ。

一対一で圧倒できる者などは、騎士団の中でもごく一部なのである。

だがしかし、今押し寄せてきている魔獣の数は明らかに……

何故かエリスの隣にいた、あの浅黒い肌の禿頭の男が、その顔を

恐怖に引き攣らせてボソリと呟いた。

「……あれってどう見ても俺達より多いよな？」

それはもしかしたら、エリスにかけた言葉だったのかもしれない。でも、エリスはそれに応じなかった。

その余裕がなかった。

騎士達は、皆その恐怖によって絶望に近い緊張感を漂わせている。だが、エリスはそれを認知できない程にガチガチに緊張していたのだ。

エリスは、既に自分の実力が騎士団の中でも群を抜いているという自覚があった。だからこそ、その自分の戦いぶり次第で、騎士団側の被害に直接影響することも理解していた。

そしてエリスは、これまでの人生の重要な戦いで、いずれも最終的に敗北してしまった覚えしかない。

ずっと失敗や敗北だらけだったせいか、自分が上手くやれるという自信が全然無かったのである。

不安に押し潰されそうになったエリスは、ふとその目が無意識にセシルの姿を探していることに気がついた。

遠くで小さく天使のように空を舞う少年を見つけて、エリスは目を細める。

不思議と自分の中から緊張感が取れて、代わりに暖かいものが広がっていくのを感じた。

それにエリスは、唐突に気がついてしまう。

こんな時だというのに、気がついてしまう。

自分の中に育っていた感情の正体。

育ちすぎて溢れ出していたものの正体。

それは

ドクンツ。

それを理解すると、エリスの胸が高鳴った。まるで鼓動をはやめた心臓が、熱を持った血液を全身に送り込んでくるかのような錯覚を起こす。

エリスの感情を、全能感が支配した。

頭の片隅でそれは錯覚だと理解しつつも、エリスはそれに身を任せる。

知らず、口の端が上がっていた。

セシル、これが終わったら私は言いたいことが沢山ありそうだ。

体の中から、何かが飛び出していきそうだった

その勢いでもって、エリスは前方の魔獣の群れを睨み据える。

それでも沸き上がりそうになる恐怖や緊張を、エリスは声でねじ伏せた。

「恐れるな！」

それは自分自身に言い聞かせた言葉。

「恐れるな！」

それは自分自身を奮い立たせるための言葉。

「恐れるな！」

だがそれは、エリスの預かり知らぬ所で、騎士団全体に轟いていた。

その声に多大な熱量を感じて、怯えていた騎士達の目に力が戻る。

「私はもう負けられない！人は、あんなものに負けたりしないっ！」

エリスは剣を抜いて、その先を魔獣達に向ける。  
今こそ私が世界に受け入れられるために

「我が剣の錆びとなりて、我の栄光の礎となれっ！」

エリスは>魔紋<を発動させると、弾かれたように魔獣の群れに向かって走り出した。

魔獣達へと高速で接近しながら、その手に持つ剣に>気<を込めて全力で振り抜く。

その剣の軌道は、一筋の閃光となって魔獣の群れへと飛んだ。

>遠当て<の応用である>一閃<

最近になってやっと習得できたそれは、>気<の極地ともいえる技。

その閃光は、群れの最前線にいた魔獣達の体を切り裂いても止まらず、その後方の魔獣達をも切り裂いていった。

エリスは、一撃で多数の魔獣を屠ることに成功する。

だが、それで満足することはない。

エリスは、脳裏にセシルの姿を思い浮かべた。

そのセシルは言ったのだ。私はこれからまだまだ強くなると。

エリスはその勢いを殺さずに、次々と>一閃<を見舞いながら魔獣の群れへと突っ込んだ。

その群れの中で、剣を思う存分振るう。

エリスを中心として、小さな竜巻のように魔獣の黒い血と肉片が舞った。

それを受けて、剣がギシギシと悲鳴を上げる。

エリスは剣が折れないことを祈りつつ、剣身に負担がかかりにくい>気くの技を主体に切り替えて、魔獣との戦いに没頭していった。

サイラスは、エリスが単独で魔獣の群れへと切り込んでいくのを止められなかった。

それはエリスの行動が唐突だったからでも、その動きがはやかったからでもない。

サイラスも、エリスの熱量の込められた声に当てられたのだ。

それは足掻き続けたエリスだからこそ持ち得る心の力だった。

ただ一人、臆することなく魔獣へと切り込んでいく背中に、サイラスは光を見た気がする。

リチャードなどとは違う、本物の英雄が放つ光。

それはサイラスだけでなく、他の騎士達も同じような印象を受けたようだ。

騎士達の瞳から怯えが消えて、代わりに陶醉が見え隠れする。

そして、エリスの剣は瞬く間に魔獣達を蹂躪した。

その戦いに見惚れそうになるも、サイラスは頭を振ってから声を張り上げる。

「抜剣っ！」

その声に我に返った騎士達が、剣を抜いていく。

サイラスはそれを見届けてから、エリスの背中を剣で指し示して叫んだ。

「皆の者、あの背中に続け！」

騎士達が、その号令を受けて一斉に魔獣の群れへと突貫していった。

## 第三十二話 終戦

どれだけの時間を戦い続けたか。

どれだけ剣を振り、どれだけ技を駆使したか。

そして、どれだけの魔獣を屠ったか。

それらの全てが分からなくなっても戦いは続いた。

エリスは自分の呼吸の音さえ忘れて戦いに没頭し続ける。

> 魔紋くによって強化された体力も、通常以上の運動量で動き回ることで、常人以上のはやさで疲弊していく。それでも、エリスは自分の体を叱咤して動き続けた。

やがて、流石にその動きが鈍りはじめた所で、ふとその視界から魔獣の姿が途切れる。

エリスは魔獣を探して辺りを見回した。その地面は、その隙間を探るのが困難なほどに、魔獣の血と残骸で黒く染め上げられてしまっている。

その様子は、辺りに漂いはじめた闇へと紛れていき、その全容を覆い隠しはじめていた。

そこでようやく、エリスは魔獣の姿が一匹も見当たらないことに気がつく。

辺りが夜の闇に包まれる寸前で、この戦いは終わりを迎えたのだ。だが、エリスも含めた騎士達の誰もが、この戦いが終わったことを実感できずにいた。

誰もが疲弊して荒く息を吐きながらも、手に持つ剣を収めることができずに、その切っ先を所在なさに彷徨わせている。

その様子に歯止めをかけたのは、サイラスの声だった。

「魔獣は全てくい止めた。我々の勝利だ」

その言葉がゆっくりと騎士達に浸透していき、やがてその肩の力

を抜いていく。

誰も勝ち鬨を上げることはなかった。

それだけ、騎士達は疲弊仕切っていたのだ。

だが、勝利に対する高揚感だけは静かに騎士達にへと伝播していき。

「総員、セヴァスト砦にまで帰還せよ。怪我人については」

サイラスが次々に指示を飛ばしていく中、エリスは背後の方角にあるセヴァスト砦を眺めた。

そこは、夜の闇の中から浮き上がるように煌々とした光が灯されている。それはまるで、戦い終わった騎士達に帰る場所がここだと教えているかのようだった。

騎士達が次々とその光へと導かれて、歩んでいく。

エリスも疲弊した体を引きずるようにして、それに続いた。

やがて騎士達が砦へと帰還すると、そこで大きな歓声によって迎えられることとなる。

砦に滞在していた人々は、まるで騎士達の代わりに勝ち鬨をあげるようにして声を上げた。人々の誰もが、凱旋した騎士達を褒め称えて労う。

この砦にいた者の約半数は魔術師だった。もし、騎士団がこの砦を守るべく駆けつけなければ、自分達は天敵である魔獣達に蹂躪されていたのかもしれないのだ。

あの恐ろしい魔獣の群れを前にして体を張り、自分達の命を守ってくれたことに、誰もが感謝していた。

運び込まれた怪我人達は、即座に魔術師達が治療していく。

一流の魔術師達が多数滞在していたお陰で、幸いにも死傷者は少数で済んだようだった。

重傷者だけでなく、比較的軽傷だった者にも、次々と魔術師が付

いて治療が施される。

そのように、多くの人々に歓迎される騎士達の中でも、今のエリスは特に注目を集めていた。

その獅子奮迅の戦いぶりには、皆からでも見えていたのだ。

誰もが、その少女に声をかけたそうにしている。

だがしかし、それは一人の女性の存在によって阻まれてしまっていた。

その女性は、一番の活躍をしたその少女を抱きしめたまま、離そうとしないのである。

その女性であるジエディは、おいおい泣きながらエリスを胸の中へと抱きしめていた。

「ほう、ふっごいひんひゃいひたんやから！（もう、すっごい心配したんだから！）」

「へ、へえさん（ね、姉さん）」

泣きすぎて言葉にならないジエディの声と、胸に埋められて言葉にならないエリスの声の奇妙な会話が繰り返り広げられている。

その様子を、隣で呆れたようにステラが眺めていた。

自分の師の泣きじゃくる姿に、小さく溜息をついてみせながらも、その顔には安堵が見え隠れしている。

騒々しく様々な声が飛び交うセヴァスト砦。

それが、唐突に静寂に包まれた。

その不自然さに、ジエディとエリスの二人も顔を上げる。

辺りを見回すと、砦にいる全ての人々が同じ方向に向かって視線

を向けているようだった。

それは隣にいたステラも例外ではなく、呆然とした顔でその方向を見つめている。

エリスは気になって、その視線の先である空を見上げた。そうして視界に入ったそれに、なぜ人々が沈黙したのかを理解する。

そこには、青白い翼を背にした一人の少女がいたのだ。

その翼から発せられる青白い光は、夜の闇に包まれた空ではより眩しく輝き、より神々しくその姿を演出している。

人々に天使だと信じさせる格好をしたそれは、セヴァスト砦の上空で旋回していた。

その天使は、人々の注目を存分に集めた後、その機会を見計らっていたかのようにして降下してくる。

やがて地上の人々に、その姿が詳細に見える高度にまで降りてくると、その天使は微笑んでみせた。

その顔の鼻先までは、頭に被された羽根の意匠が施されている兜によって隠れており、素肌は口の部分しか見えない。

だがその唇は、たしかに微笑みを形作っていた。

人々の視線が、その微笑みを向けられた人物へと集中する。

エリスは空の天使を眺めながら、その視線を体で感じ取った。

ああ、サクヤはこれを狙っていたのか。

エリスはそこでようやく、何故サクヤがセシルにあんな格好をさせたのかを理解した。

全ては、この瞬間の演出のためだったのだ。

エリスはそれに付き合ってくれたセシルに笑いかけると、空にいた天使は手を振ることでそれに応じた。

エリスがそれを見届けると、天使は背を向けて、さらに上空へと

飛び去ってしまう。

その一連の流れを見ていた人々が、一斉に騒がしくなった。

天使が、あの少女に微笑まれた。

天使が、あの少女に手をお振りになられた。

あの少女を祝福なされたのだ。

それはきつと、戦乙女が少女の戦いをお認めになられたのだ。

それはきつと、戦乙女が人間の英雄をお認めになったのだ。

あの少女は天界のご加護を受けた。

人々が口々に囁き合う言葉を耳にして、エリスは苦笑しそうになる。

セシルが微笑んだ。たったそれだけのことで、エリスという英雄の偶像が、人々の心に深く刻みつけられたのだ。

遂には、エリスに向かって膝を付き、祈り出す者まで現れはじめる。

流石にそれには困って、エリスはジエディの顔を見た。

見ると、ジエディはあの天使の正体に勘づいたらしく、その顔を戸惑いに染めている。ジエディには、後で説明する必要があるようだった。

エリスはその人々の視線から避難すべく、ジエディの腕を引いて砦の中へと戻ろうとする。すると、ざあっと波が引くように道を空けた人々に、またもや苦笑しそうになった。

エリスはその空けられた道を歩みながら、自分を英雄へと仕立て上げてくれた二人のことを考える。

帰ったら二人にはお礼を言わなければ。

セシルには、伝えたいことも沢山ある。

サクヤにも、聞いて欲しいことが沢山ある。

エリスは、気分が浮つくのを感じた。  
でも今はそれを戒めることはせず、その多幸福感を噛みしめる。

エリスは漠然と、これからの未来に希望が待っていると信じた。

屋敷から、サクヤが姿を消したことを知るまでは。

### 第三十三話 エリスの願い

イルレオーネという国の王都の中心にある、クレスリンと名付けられた城。

その国の王が住まう城の中でも、最も広い部屋である謁見の間にてそれは執り行われた。

イルレオーネの英雄である証、その名譽騎士くという称号の授与式。

多くの貴族や要人達が見守る中、それを賜るべく、エリスはその謁見の間の中心にて片膝をついている。

赤く光沢のある滑らかな生地に、金糸と銀糸で装飾された玉座。

そこに腰掛けている御仁に、エリスは騎士団の礼服の上からその胸に手を当て、深く頭を垂れた。

この授与式は、イルレオーネ守護騎士団の団長であるサイラスの申請が、王族の審査を通ったことよって執り行われている。

その概略は、君主の政務を補佐する廷臣の口上よって語られた。

曰く、戦乙女为天啓を授かった一人の騎士は、近い未来に起こる厄災の存在を知り、それをイルレオーネ守護騎士団に知らせた。

そして、自ら騎士達の先頭に立ってその厄災へと立ち向かい、目まぐるしい戦果を上げることよってそれを食い止めることに成功する。

その功績は戦乙女からも認められ、その騎士に祝福をお与えになった。

流石にその栄誉とは比べものにならないものの、多くの命を救った騎士に対する感謝とその高潔な魂を称え、イルレオーネからもさやかな贈り物を授けることとする。

その浮世離れした口上の内容に、エリスの左右に分かれて見守る

人々が、感嘆の声でざわめいた。

事情を知らぬ者の中からは懐疑的な声も上がったが、そのエリスの功績は、現場にいた宮廷魔術師達や、エリス以外の騎士達も口を揃えて肯定している。

より有力な貴族達には、敵国であるマグケストも天使やドラゴンを目撃したという情報が入っており、その事情をよく調べた者ほどその話を信じざる得ない状態なのだ。

今回のエリスの躍進に、思うところがある者がいないわけではない。

だが神界や冥界を信じるこの国の人々にとって、戦乙女の祝福を受けた者に悪意や謀を向けられる者は皆無だった。

誰も、わざわざ自ら冥界への切符を手にしたくはない。

それは、エリスを私利私欲による謀略の渦から守る盾になっていた。

サクヤは、そこまで考えていたのだろうか？

エリスはその授与式の間、ずっと自分の元からいなくなってしまう女性のことを考えていた。

今までの人生の中で最大で最高の場面に立っているはずなのに、それを素直に喜べないでいる。

胸の中にある酷い喪失感のせいで、>名誉騎士<という称号さえ下らないもののように思えてしまった。

それ程に自分の中でサクヤの存在は大きくなっていったのだ。

それ程に彼女は自分の心の支えになっていたのだ。

だということに……

サクヤ、何でお前は私の前から姿を消したんだ？

エリスにはそれさえも分からない。

前兆はあった気がするが、それがどういつ心境の変化によってもたらされたのか見当もつかなかった。

その事実には、エリスは愕然とする。

彼女の微かな表情が読み取れるというだけで、エリスはサクヤを分かった気になっていたのだ。

思えば、エリスはサクヤのことを何も知らない。

それは彼女が語りたがらなかったせいもあるのだが、それは裏を返せば、それだけの過去があったということだ。

エリスはそれを知ろうとする努力を怠っていたことを後悔した。

守られるばかりで、自分のことしか考えていなかったことに歯噛みした。

何が名誉騎士かどうか。

エリスは肝心な人を守れずに失ってしまったのかもしれないのだ。

一体、どこにいるのだサクヤ

エリスは胸の中を占める憂慮を顔に出さないように苦慮した。

幸いにも、それはエリスに直接勲章を贈呈することになった精悍な王にも勘づかれることはなかったようである。

その碧眼に慈しみを込めて、頭を垂れているエリスの肩に剗飾をかけた。

エリスは、目の前のアルバートという名のこの国の王に、心の中で自らの不敬を謝罪する。

不敬だと分かりつつも、どうしてもこの暗澹とした胸の内を払拭できなかったのだ。

やがて授与式が終わりを向かえ、堅苦しい作法から解放されると、真っ先にジェディがエリスの傍にやってきてくれた。

その身は黒を基調とした金糸で装飾されたローブという宮廷魔術師としての正装をしているが、今日はムーア家の代人としてこの授

与式を見守っていたのである。

エリスの父は自らの領地にて病床に伏せている状態であるし、兄はそれによってホルミア領から離れられない。だから今日という日に立ち会った家族はジエディだけだった。

まあ父の場合、例え病気になるっていなかったとしてもこの場に立ち会ったとは思えないが……

その唯一立ち会った家族であるジエディは、エリスの内心を察してその身を抱きしめた。

正装が崩れるのもお構いなしである。

「ね、姉さん」

「エリスちゃん、格好よかったわよ？サクヤちゃんもきつと喜んでくれてるわ」

「……」

ジエディの口から出たサクヤという単語に、エリスは泣きそうになる。

だがエリスは、それを必死に堪えた。

ジエディは、それを慰めるように言葉を続ける。

「大丈夫よ、だってセシルちゃんは当てがあるって言ってたでしょ？きつと連れて帰ってきてくれるわよ」

「……」

「だから、今は待ちましよう？サクヤちゃんが帰ってきてから、みんなでお祝いしましょうね」

姉のその優しい言葉に、エリスは痛みを感じた。

セシルは、屋敷から姿を消したサクヤがどこに行ったのか、心当たりがあると言っていたのだ。

より長く一緒の時を過ごしたはずのエリスが分からないのに、セシルには分かったと言うのだ。

エリスにはそれが堪らなく悔しかった。

自分がどれだけサクヤを見ていなかったのかを思い知らされるように、悲しかった。

だからこそ決意する。

セシルがサクヤを連れ戻してくれたその時は。

再び、一緒に過ごせるようになったその時は。

絶対にサクヤから目を離さない。

今度は守られるだけではなく、私が彼女を守るのだ。

もし彼女が何らかの闇に囚われているのなら、今度は私がそれを打ち払おう。

エリスはそう深く心に刻んだ。

そして、サクヤのことを探しに行ったセシルに思いを馳せる。

彼には、まだ自分の気持ち伝えていない。

サクヤがいない時に彼にそれを伝えるのは、何故だか卑怯のよう気がしたのだ。

だから、それはサクヤが戻ってきた後だ。

エリスは、未だ他力本願な自分を情けなく思いつつ願う。

サクヤとまた会いたい。会って話したい。

だからどうか

エリスはセシルに強く願った。

### 第三十四話 神殿にて

キルストア教の神殿は王都に二つ存在する。

一つは王都の東地区にある、平民の居住区を中心に建てられた神殿。頂上に取り付けられた大きな鐘以外は、どこの国にもあるようなありふれた建物だ。

そしてもう一つは、郊外で最も高い丘の上に建てられたもの。その神殿は一年に一度行われる特殊な祭事用のものであり、普段は人が全くない。

定期的に清掃はするものの、それと祭事の時以外には、人が全く訪れることのない場所だった。

だからそこに、普段は人目に触れられたくない者達を潜ませようとするのは自然な発想だったと言えるよう。

外はもう夜の闇に覆われているというのに、その内部はシャンデリアの灯りによって煌々と照らされていた。

その光に照らし出されるのは、粛々と行われる凄惨な模様。複雑かつ詳細なモザイクに覆われた壁はあらゆる所が破壊され、半貴石によって豪華に彩られた装飾品は、今は人の血によって染め上げられていた。

神聖な場所であるはずのそこが、今は不浄なる血肉によって汚されていく。

それらは全て、この神殿に潜んでいた者達のものであった。

「ひいひいひいひい！」

自分が潜ませていた者達が全てもの言わぬ肉塊へと成り果てると、その年配の男は悲鳴を上げて壁際に背を付けた。

いつもは後ろに流してある白髪を乱し、その身を包んでいる白い

外套は、今は血によって染め上げられている。その恐怖に引き攣った目で縫る隙を探し求め、この惨状を作りだした黒づくめの者達を見回した。

そしてその中で、唯一顔を隠していない女を見つけると、年配の男はその女性に糾弾するような声を上げる。

「な、何者だお前達は！？こんなことが許されると思っているのか！？」

「貴方様がお雇いになった方々と同類でございます。私達が許されないとおっしゃるのなら、貴方様も許されはしないでしょ」

その女性の言葉に、年配の男は蒼白となる。

思った通りの反応を見せた男に、声をかけられた女性であるサクヤは、その鳶色の瞳の目を細めた。

「な、なぜそれを知っている……」

「貴方様が三年前に私をお雇いになったからでございます」

サクヤは男の問いに、明確に答えてやる。

だが、男はそれに納得しなかった。

「三年前だと？その時の私は、雇った者に正体を晒した覚えはないぞ！？」

「はい。ですので、貴方様に辿り着くには少々時間がかかりました」

言いながら、手に持っている刀を男に突き付けると、男は恐怖によって言葉を失う。

カタカタと震えて何も言葉を発せられなくなったこの男を、サク

ヤは探していたのだ。

三年前に自分という闇に潜む者を雇った、その雇い主を。

ロスラヴリで同郷出身の者に助力を頼んだのも、このためである。この男は、エリスが産まれた時から、その妄執に取り憑かれて過激な糾弾を煽り続けてきた者であった。

一六年にも渡るその妄執は、例えエリスがどれだけ人に認められようと、それを絶対に認めようとしない水準にあるとサクヤは判断している。

現にこの男は、エリスが天使に祝福されたという噂が流れた後、慌てたようにエリスに刺客を放とうとしていたのだ。

あの呪われた少女を、天のみ使いが祝福するわけがない。きっと悪魔が人々を騙して誑かしたのだ。一刻もはやく少女を始末して人々の目を覚まさなければ。

男の思考は恐らくこんな所だろう。

妄執とは、一種の狂気である。

多くの狂気を見てきたサクヤは、その狂気が導き出しそうな思考をよく理解していた。

ならば、男の行動を阻止することなど容易いことである。

そして今、その刺客達は、サクヤが助力を頼んだアルマ達が全て処理してくれた。

残るは刺客を雇って匿おうとしたこの男のみである。

サクヤは、狂気に取り憑かれた者がどれだけ救えないかを、その身でもって実感していた。

だというのに、サクヤは突き付けた刀を男に刺し込むことができないでいる。

別に殺すのを躊躇ったわけではない。

サクヤは、そこに一つの境界線を感じ取ってしまったのだ。このことが終われば、自分はすぐにイルレオーネを離れるつもりだった。つまり、この男を始末した後はもう自分がここに戻ってくることはないのだ。

光の傍から、再び影の中へ。  
それは自分が望んだことだ。

だというのに、サクヤはまだエリスの傍にいたいという未練を断ち切れていなかったことを自覚した。

その決定的な最後の一步が踏み出せない。

「……………？どうしたんだい？」

刀を突き付けたまま動きを止めたサクヤに何か異変を感じ取って、黒装束で顔を隠したアルマが声をかけた。

それに何かつけいる隙を感じ取ったのか、年配の男が恐怖に引き攣ったままの顔を半笑いに歪ませる。

「……………は、はは。そうか、私は神官だ。神官である私を殺せば、神はお許しにならないだろう。お前だって冥界には行きたいのではないのだろうか？わ、私を見逃してくれるなら、私はお前の為に祈ろうではないか。敬遠なるキルストア教徒である私が祈れば神も」

男なりの必死の命乞いの言葉は、逆にサクヤの感情を冷やす結果となった。

その手から迷いがなくなり、男の言葉が終わる前にその命を絶つ。声を上げる暇もなく事切れた男の骸に、サクヤは言葉をかけた。

「神は存在致しません。……………もし、存在したとしても、私の罪

は冥界すら生温いでしょう」

最後の一步を踏み出せずにいたサクヤの、その背中を押しした男の言葉に、サクヤは感謝の意を示すべく深々と頭を下げた。

自分の胸の中を、どうしようもない虚無感が支配するのを感じる。そのサクヤの顔を見て、アルマは暗い声で呟いた。

「……私は何か間違っ たのかもしれないね」

アルマのその言葉に、サクヤは首を傾げる。

自分が今どんな表情をしているのか、サクヤには分からなかった。

だが、鏡などで自分の姿を見ようとは思えない。

その姿を、鏡で確認したくなかった。

もしかすると、そこにあの女が映っているかもしれないから。だからこそ

さようなら、エリスお嬢様……

心の中でそう呟き、サクヤがその場を立ち去ろうとして……足を止める。

その神殿の出入り口にあたる扉にて、見覚えのある銀髪の少年が立ちただかっていたのだ。

サクヤはその姿を一目見ただけで、虚無感に支配されていた胸中が盛大に悲鳴を上げるのを感じる。

「どうして……」

つい、そんな言葉が口から漏れた。  
その疑問に、セシルが頭を掻きながら答えてくれる。

「大したことじゃないんだけどさ。サクヤはその神官とすれ違った時にすつごく殺意のこもった目をしてたんだよね。だから半分勘だったけど、サクヤはその神官の前に現れると思ったんだ。だから、その神官の人の行方を追って監視してた」

セシルの説明に、サクヤは自分の失策を認めた。

なぜかサクヤは、セシルが自分のことを見ているという発想がなかったのである。

こんな時だというのに、セシルが自分を見ていてくれたという事実に、嬉しさがこみ上げてくるのを感じた。

それと同時に、凄まじい寂寥感に襲われる。

できれば、もう会いたくなかった。胸が焦がれるほど会いたかったけど、会いたくなかった。会ってしまえば、自分がこんな気持ちになるのが分かっていたから。

「いつまでも屋敷に帰って来ないから、迎えに来たんだ。一緒に帰ろう、サクヤ」

そう言って、セシルは右手を差し出してくる。

その誘惑には凄まじいものがあった。

思わずその手に掴まってしまいそうになるのを、しかしサクヤは必死に手を握りしめて我慢する。

サクヤがたった今、その手にかけた骸を見て自分を戒めた。

できるだけ心を冷やすようにして、その言葉を口にする。

「私はもう、お屋敷に帰るつもりはありません。ですので」

「駄目」

自分の言葉を遮って言い放たれた単語に、サクヤは戸惑った。そんなサクヤにかまうことなく、セシルは言葉を続ける。

「エリスと約束したんだ。絶対に連れ帰るって。だから僕は、力尽くでもサクヤを屋敷に連れて帰るよ」

「……」

サクヤは言葉を失った。

セシルが本気だと理解したから。

それが本気だとしたら、サクヤが取るべき行動は一つ。

サクヤは近くにいたアルマに視線を送った。ある程度事情を察しているアルマなら、助勢してくれると考えたのだ。

だがアルマは、肩を竦めてそれを拒否した。

「私は手伝わないよ。私も、あんたはその屋敷に帰るべきだと思う」

「何を……」

「だってそんなにボロボロに泣かれちゃねえ？見てらんないよ全く」

アルマがそう言って溜息をつくのを見ると、サクヤは自分の頬に手を当ててそれを確認した。

それによって、自分がずっと泣いていたことを理解する。

「そうですか……」

アルマの助勢が得られないとなると、この場にサクヤに助勢してくれる者は皆無だということだ。ならば、何とか自力でセシルから逃げるしかない。

サクヤは自分の得意技である、空蝉くを使おうと、体内の、気くを練り込もうとした。

以前、エリスと試合をした時に披露した技だ。

自分の本来の立ち位置と違う場所に自分の幻影を作り出す、いわば目眩ましのような技である。

だが、サクヤがその技を使う前に、セシルの言葉によって抑えられた。

「言うておくけど、僕の能力にそれは通用しないよ？」

実際に技を使う前に、>気<の動きでそれを読まれた。

サクヤはそれを理解した時、自分がもう手詰まりなのを悟った。

そしてそれを悟ったのと同時に、セシルの姿が掻き消える。

「ごめんね」

次の瞬間に背後から聞こえた声に、サクヤは返事をする前に意識を暗転させた。

### 第三十五話 幸せ

私は、今見ているはずのそれを理解できないでいた。

そのあまりに異質な光景に、頭が混乱して吐き気がする。

でも自分の世界観とは違いすぎるそれに、私はどこか懐かしさを覚えた。

だがすぐにその映像は乱れて、騒音と共に掻き消える。

……？

……何かを思い出しかけた気がする。

何かとても大事だったもの。

……眩しい。

サクヤは、その瞼に射し込む光を認識して急速に意識を浮上させた。

目を開けると、この三年間ですっかり見慣れた天井が視界に入る。そのことに異常はないはずなのに、サクヤは何故か違和感を感じた。

だが、意識がはつきりしてくるにつれて、すぐにサクヤはその違和感の正体に気が付く。

何故、私はまだここにいるのだろうか？

その疑問と共に、サクヤは自分が意識を失う前のことを思い出した。

そうだ、私はあの時、あの少年に……

サクヤは自分の状況を完全に理解すると、その上半身をベットから起こす。

「サクヤ!？」

すると間髪入れずに、自分の体をきつく抱きしめられた。その聞き慣れた声と、慣れない人の温もりに、サクヤは戸惑う。

「エリスお嬢様？」

その姿を見なくても、サクヤはそれが誰かすぐに分かった。続いて、その体が小さくふるふると震えているのを感じて、彼女が泣いているのを察する。

サクヤは躊躇いながらも、その体にそつと手を回した。すると、自然とその言葉が口から溢れる。

「申し訳御座いません……」

「っ！謝るな！」

サクヤはエリスの切り返しに困惑した。

自分の言葉は何か間違っていたのだろうか？

そういえば、「こつ」という時は、謝罪ではなく感謝を伝えるといった類のことを何かの本で読んだ気がする。

サクヤは釈然としないものを抱えながらも、その本を参考にすることにした。

「ごういう場合は、有難うでございますか？」

「違う、私はお前にお礼を言われるようなことはしていない。していないかったんだ。謝るのは私の方だ……」

エリスの涙混じりの声に、もうサクヤはどう返していいか分からなくなつて沈黙した。

ただ泣き続けるエリスを少しでも慰めるように、その背中をさする。

それに少しは安堵できたのか、エリスがゆつくりとそれを語りはじめた。

「サクヤ、私は>名誉騎士<の称号を贈られたんだぞ」

「……おめでとうございます」

「私は、本物の英雄になれたんだ」

「はい」

「これも、お前とセシルのお陰だ」

「……いえ、私などは何も」

「お前のお陰なんだ」

エリスはサクヤが上げかけた声を遮つて、その言葉を強調した。そして、自分の胸中を吐露していく。

「私には、お前が必要なんだ。……お前がいなくなつたら、>名誉騎士<の証である勲章でさえガラクタにしか見えなくなった。胸に穴があいたようになって、何も嬉しくなくなつて……私は、お前がいないと駄目なんだ……」

エリスのその一言一言が、サクヤの心に染み渡るようだった。

自分を押し潰そうとしていた自己嫌悪が、エリスのサクヤを肯定

する声によって、少しづつ軽減されていく。

エリスのサクヤの存在を求める声によって、自分を押し潰そうとしていた罪悪感に耐える力が漲ってくる。

それによって、サクヤの中に一つの勇気が生まれた。逃げるばかりだったその足が止まる。

だから私は

やがてエリスは、涙声のままそれを要求した。

「もう、勝手に私の前からいなくならないでくれ」

「……はい」

サクヤは、少し躊躇いつつもそれに応諾する。

誰かに、代わりのきかない「私」として必要とされるのが、こんなにも救いになるのだ。

サクヤはそのことを実感した。

私は何て幸せなのだろうか。

世界には、未だ孤独に喘ぐ者達が沢山いるだろうに……

サクヤは、その幸せを噛みしめながら、エリスを抱く手に優しく力を込めた。

一方、その同じ屋敷の別室には、大量に用意された朝食を食べているセシルと、それにあやかるとレティシアの姿があった。食事を進める手は止めないままに、セシルは別室で未だ眠り続けているはずのサクヤのことを思う。

「サクヤ、もう目を覚ましたかな？ 食べ終わったらちよつと様子を見に行ってみようかと思うんだけど……」

「お二人の再会に水を差すものではありませんわよ」

レティシアの咎める声に、それそうかとセシルは頷いた。

もしセシルが入室した時に、二人が何か大切な話をしている途中だったら、気まずいにも程がある。

だから自分がサクヤの顔を見るのは、エリスと共に部屋から出てくるまで待つことにした。

……そしてその前に、セシルはレティシアに聞いておきたいことがある。

「ところでね……」

「なんですの？」

「何でまだここにいるの？」

「……」

セシルの素朴な疑問に、レティシアが食事の手を止めて沈黙する。やがてその青い顔に冷や汗を流しはじめると、レティシアはおずおずと答えた。

「それは、その……内界へと来ることになった時、少々へマをして  
しまいました……」

「……ああ、なるほど。陛下のお仕置きが怖いんだ？」

セシルの呆れた声に、レティシアは堪らず立ち上がって抗議した。

「だって仕方ありませんこと！？あの変態DS女はそれが愛情表現  
だから手に負えないんですのよ！あの女は、苦悶の表情〓本当は悦  
んでるといふ図式はM以外には適用されないことを理解するべきで  
すわー！」

「ま、まあそうだよな〜」

それはセシルにも存分に心当たりがあるので、思わず頷いてしま  
う。

「どうやら、しばらくはレティシアもこちらに滞在することになり  
そうだった。」

## 閑話 お仕置きと少女

地上の遙か上空を漂い、この世界の覇者のように君臨し続ける国、アースガルズ。

その中心点にそびえ立つ不可侵の城、グラスヘイムでは、その玉座の間にて一人の若き君主が頭を悩ませていた。

「……………内界に落ちたあの邪悪な気配が消えたというのに、肝心のレティシアが帰ってこないのう」

女王は、あの亜麻色の髪をした少し愉快な所のある部下に思いを馳せた。

もつそろそろ帰ってきてもいい頃合いなのに、全然その気配を感じ取れない。

まさか、同士討ちでもしたのだろうか？

その最悪な発想を、女王は頭を振って否定する。

「ま、まさか>数字持ちくに限ってそれは……………」  
「陛下？」

その顔を杞憂に歪める女王の様子に、傍に控えていたアイリスは首を傾げた。

それに、女王は縋るような視線を向ける。

「アイリス……………レティシアが帰ってこぬのじゃ。これは一体どうしたのか……………もしま、魔獣にやられたのではないかと思うてのう」  
「……………いえ、陛下。レティシアが未だに帰還しないのは、恐らくはその陛下の背後にあるものが原因かと」

アイリスは、女王がレティシアが帰ってきた時に備えて、選  
び抜いたお仕置き道具に視線を向けた。

何やら怪しげなその道具の数々に、アイリスまで顔が青くなりそ  
うである。

そのアイリスの言葉に、女王は珍しく反省の色を見せた。

「ふむう……やはりこれでは、少し刺激が足りなかったか」

「いえ、そういう問題ではなく……」

「どれ、道具を再考してみようかの」

「へ、陛下……」

アイリスは火に油を注いってしまったこの状況に、心の中でレティ  
シアに謝罪した。

「これなんかどうじゃろ？」

おもむろに女王は、何やら二の腕ぐらいの太さをした棒状ものが、  
ウィンウィンと魔法の動力で動いているそれを掲げて見せる。その  
卑猥な形を模されて作られた道具が何なのかを理解すると、アイリ  
スは思わず叫んでしまった。

「へ、陛下！？それは幾ら何でも酷すぎます！ レティシアに消え  
ない心の傷を刻むおつもりですか！？」

「む……もつと大きいほうがいいかのう？」

「いえ、大きさの問題ではなく！ というかそれ以上の大きさがあ  
るのですか！？」

「まあ、軽い冗談じゃ」

「冗談にしてもタチが悪いです……ってそれで流さないで下さい！  
何でそのようなものをお持ちになっているのですか！？」

「この間、カインの部屋を漁ったら出てきたのじゃ」

「あ・の・じ・じ・い・は・何を持ちこんどんじゃー！ー！」

あまりに憤慨すぎて口調が別人になるアイリス。

何やら怒りの形相でカインの元へと駆けていったアイリスを見送りながら、女王は溜息をついた。

「だが、流石にこのまま放置しておくわけにもいかんのう」

> 数字持ちくが二人も長期不在という状況は、対外的にもあまりよろしくはない。

アースガルズの機能的にはまだ余裕があるが、それでは納得しない者もいる。

女王は少し真面目に頭を悩ませていると、そこに唐突に声をかける者が現れた。

「……私が呼びに行く」

女王は、その小さく幼い声の主に目を向ける。

先ほどまで誰もいなかったはずの場所に、突然姿を現した者。それは、肩ぐらいにまで伸ばされた銀髪と、煌めく緑の双眸をした背の低い少女だった。

まだ一二歳になつて少しといった年齢だが、それ以上に少女の外見は幼く小さい。だがこれでも、少女は>数字持ちくの一人である。自分の提案に、女王が目を丸くして何も返事をしないのを見て、少女は再度同じ言葉を繰り返した。

「私が呼びに行きたい……」

普段はあまり喋らない子なので、その声は限りなく小さい。

だが、その口数が少ないのを補って表情で意志を伝えるのがこの少女だ。

その少女の顔が、何やら怒っているのを見て、女王は微笑んだ。

「もしかして、妾のために怒ってくれてるのかえ？」

「……」

その少女は、言葉で答える代わりにその女王に頭を差し出すよう、手で要求する。

普通で考えれば、それはあまりに不敬な要求だが、女王は何も言わずにしゃがんで頭を差し出した。

すると、その少女が一生懸命労るように、女王の頭を撫ではじめる。

少女なりの慰めのための行為に、女王は堪らなくなってその少女を抱きしめた。

「あーもう！何と愛い奴なのじゃー！」

「っ！っ！」

突然自分を捕まえて顔を擦りつけてきた女王に、少女が藻掻くように抵抗する。

だが女王の並外れた怪力がその程度で外れるわけもなく、それは女王の気が済むまで続けられた。

やがてその少女がぐったりとして、逆に女王の顔がテカテカと満たされた所で、その体を解放する。

少女が、その頭をべしべしと叩いてくることで憤慨の意を示すのを眺めながら、女王は先ほどの少女の提案の返事をした。

「いいじゃろう、お主の内界行きを許可する。………じゃが、怪しい人について行ったりしては駄目じゃぞ？その約束を守れるかえ

「？」

その女王の言葉に、その幼い少女は満面の笑顔で頷いた。

斯くして、内界に三人目の「数字持ち」が現れることが確定したのだった。

### 第三十六話 交錯

目を覚ましたサクヤが、皆に聞いて欲しいことがあると言つので、エリスはサクヤを連れてセシルとレティシアがいる食堂に赴いた。そこに丁度屋敷に帰ってきたジエディを加えて、一つの机を囲んで座る。

それが今回の失踪に関する話を話そうとしてくれているのを察して、エリスはサクヤの隣に座った。

サクヤから苦悩の気配を感じ取るが、エリスは話さなくていいと言わない。

エリスはサクヤが姿を消した時に決めたのだ。

彼女が何かに思い悩んでいるなら、今度は私が心の支えになりたい。

だからエリスは、サクヤが話してくれるのを止めずに耳を傾けた。そこで語られたサクヤの経歴に、衝撃を受けなかったと言えば嘘になる。

だがそれ以上に、ずっと怯え続けながらそれを話す彼女にエリスは胸が痛んだ。

他の三人もサクヤの話聞いていたが、彼女の怯えを感じ取れているのは恐らく自分だけだろう。

口調も相変わらず平坦で、表面上は何でもなさそうな無表情であるサクヤだが、エリスには彼女の怯えがよく伝わってきた。

エリスには今のサクヤがどうして怯えているのか、本人に聞かずとも理解できる。

それは、かつての自分も抱いていた怯えと同じだったから。

本当の自分を知られれば、拒絶されるかもしれない。

これは、誰でも少なからず抱いたことのある思いではないかとエリスは思う。

相手に強い親しみを感じていればいるほど、重くのしかかる恐怖特に自分自身がそれに強く否定的な感情を抱いていると、その恐怖は乗り越えられないものとなる。

拒絶されたくないが故に、思わずそれを嘘で塗り固めて、隠そうとしてしまうのだ。

でもサクヤは、今その恐怖に立ち向かっていた。

やがてサクヤの話が終わると、皆が集まった屋敷の一室に沈黙が漂う。

その静寂にサクヤが微かに手を震わせるのを見て、エリスがその手を握った。

それが、そのままサクヤへの返事となる。

サクヤの怯えが少し落ち着いたのをエリスが感じ取ると、それを見ているジェディが微笑んだ。

「そういうことだったのね。サクヤちゃんがこの家を嫌いになっただけじゃなくて良かったわ」

ジェディはそう言って安堵の表情を見せるが、すぐにそれは陰りのあるものへと変化する。

「サクヤちゃんの過去については私には何も言えないわ。だって私の手も綺麗だとは言えないもの」

ジェディの自嘲を含んだ声に、エリスは自分の姉の役職が何であるかを思い出した。

宮廷魔術師とは、別に研究ばかりしているわけではない。

国が与えるその本来の役割とは、国法に触れた魔術師達の取り締まりと、戦争時の主戦力となることである。

つまりは当然、ジエデイも幾つかの任務を経験しているはずだった。

「私達が取り締まる魔術師のほとんどは悪人だけれども、中にはそうとも言えない人もいるのよ？」

その事実には、エリスは少し気を沈ませた。

おおよそのことは察していたものの、改めてジエデイの口からそれを聞かされると、自分がいかに綺麗な場所で守られていたかを知っている。

ジエデイが言葉が終わると、今度はレティシアが声を上げた。

「お話を聞いている限り、貴方はその女性に操られていたのでしょうか？ 貴方に責任が全くないとは言いませんけども、そこまで貴方が自分を責める必要も感じられませんの」

そう言って、机の上に用意された茶菓子に手をつける。

どうやら、まだ付き合いの浅いレティシアでもサクヤに否定的な感情を持つことはなかったようだ。

だが、レティシアの言葉はそこで終わらなかった。

「ですが、少々気にかかることがありますわ。……セシル」

レティシアがその名を呼ぶと、セシルは沈黙を保ったままその体に魔紋くを発動させた。

恐らくは能力を使用しているのだろう。その様々なものを見通す力を持つ視線が、サクヤへと注がれる。

エリスは、サクヤの手の震えが強くなるのを感じ取った。その表

情から、先ほどよりも強い怯えの感情を読み取る。

だが、サクヤはそのセシルの双眸を見据えて目を逸らすことはなかった。

その中にある微細な何かに気がつき、エリスは思わず声を上げそうになる。

以前のエリスだったならば、気が付かなかったかもしれない機微でも、今のセシルへの思いを自覚したエリスだからこそ気が付くことがあった。

もしかして、サクヤは

それが疑念から確信に変わる前に、サクヤを視ていたセシルが、小さく溜息をついて首を横に振った。

「駄目だ。サクヤには何の痕跡もないよ。もしくは、僕の能力では見通せない何かかもしれない」

「残念ですわ。ですが、その国。一度調べてみる価値はありそうですの」

その二人の会話の意味が掴めず、エリスは首を傾げた。

それはジエディも同じらしく、その頭に疑問符を浮かべている。

二人以外の三人が抱いた疑問を、サクヤが言葉にした。

「一体、何の話でございましょうか？」

「うーん、それを説明するとすると、まず僕達の出身のことも説明することになって、かなり話が長くなっちゃうんだけど……」

「説明はセシルに任せますの」

素早く丸投げするレティシアに、セシルは半目の視線を向ける。

でも最初から、サクヤの視線はセシルから動かなかった。

「全てが終わった後、そのご経歴について教えて下さるとセシル様は仰いました」

その強い口調には、セシルの口から聞きたいという意思表示が感じられる。

セシルもそれを察したのか、神妙な顔つきになってサクヤに応じた。

「それもそうだね。じゃあ長くなるけど聞いてくれる？」

「ああ、私も気になっていたので丁度いい」

「セシル様のお話ならば、何年でもお付き合い致しましょう」

そのサクヤの軽口のような言葉を、セシルは苦笑して流す。

だがエリスは、そこでサクヤの中のあるセシルへの想いを、半ば確信していた。

たしかに半分は冗談なのだろうが、そこに込められた感情は決して嘘ではない。

そのことを理解すると、エリスの胸の中で小さな波紋が広がった。それでも今はセシルの話を聞くために、エリスは無理矢理それを心の奥へと押し込める。

だが、今日という日はそれで終わらない。

セシルが自身の経歴を語ると、それを聞いた三人には思わぬ影響があった。

それはセシルにとっても予想外だったのか、三人それぞれの反応に困惑する。

セシルが内界に来てから二ヶ月と少し。

それは木々に茂る葉に紅葉の色を覗かせはじめ、季節がそろそろ秋へと差し掛かった日のことであった。

第三十六話 交錯（後書き）

短くてすみません

ちよつと難航しております

後でちよつと改稿するかもしれません

三章本筋まで行けば以前のようペースに戻れると思うのですが  
ここを乗り越えるまでペースが落ちそうです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7765w/>

---

戦乙女の伝説

2011年10月13日01時02分発行